岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第40冊

鹿田遺跡　17

― 第22次調査地点 ―

（地域医療人育成センターおかやま新営に伴う発掘調査）

2024年

岡山大学文明動態学研究所

序

岡山大学津島キャンパスには津島岡大遺跡、鹿田キャンパスには鹿田遺跡、三朝地区には福呂遺跡があります。文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門は、これらの遺跡の調査・研究・保護と資料の公開ならびに活用事業に従事しています。３つの遺跡のうち鹿田遺跡は摂関家の荘園である鹿田庄に関する資料で全国的に知られています。

本報告書は、本学地域医療人育成センター新営にともなう鹿田遺跡第22次調査の報告となります。本調査では、弥生時代後期を中心とする井戸・溝・土器集中ほかの遺構が検出され、良好な土器資料が発掘されました。中世・近世・近代の遺構も検出され、鹿田遺跡の地形ならびに利用のあり方を考えるのに重要な知見を得ています。とくに近代の庭園遺構の発見は注目すべき成果です。庭園に関する資料を関係者からご提供いただき、詳しく考察が行われております。戦争や開発により近代建築やその遺構は岡山市内でも多くはありません。発掘調査からこうした資料の復元をおこなうことは今後重要となりましょう。本報告書がその基礎になれば幸いです。

本調査は2011年に実施されました。発掘調査時にご協力いただいた関係者の方々にあらためてお礼申し上げます。また、本報告書の作成に当たり、学内外の多くの方々から多大なご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。本報告書刊行に時間を要しましたが、本部門では調査成果を公開すべく今後も努力して参ります。引き続きご支援を賜りますようお願いするものです。

2024年３月

文明動態学研究所所長　松本直子
文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門 部門長　清家章

目　　次

第１章　歴史的・地理的環境 …… 1
第１節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
第２節　鹿田遺跡 …… 3
１．構内座標の設定 …… 3
２．遺跡の概要 …… 5

第２章　調査に至る経緯と概要 …… 10
第１節　調査に至る経緯と経過 …… 10
１．調査に至る経緯 …… 10
２．調査の体制 …… 10
３．調査経過 …… 10
第２節　調査の概要 …… 11

第３章　調査の記録 …… 13
第１節　調査地点と層序 …… 13
１．調査地点 …… 13
２．層序 …… 13
第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物 …… 17
１．井戸 …… 18
２．土坑 …… 23
３．溝 …… 30
４．土器集中 …… 31
第３節　中世・近世の遺構・遺物 …… 37
(1)　中世の遺構・遺物 …… 37
１．井戸 …… 37
(2)　近世の遺構・遺物 …… 41
１．井戸 …… 41
２．土坑 …… 45
３．溝 …… 47
第４節　近代の遺構・遺物 …… 49
１．井戸 …… 50
２．庭園遺構 …… 50
第５節　包含層ほかの出土遺物 …… 76

第４章　自然科学的分析 …… 79
１．鹿田遺跡第22次調査地点出土木製品樹種同定 …… 能城修一　79
２．鹿田遺跡第22次調査地点出土種子と土器圧痕同定 …… 木村理・沖陽子　85
３．鹿田遺跡第22次調査出土貝類の同定 …… 木村理　93
４．鹿田遺跡第22次調査地点出土動物遺存体の同定 …… 木村理　94
５．鹿田遺跡第22次調査地点出土漆碗の樹種同定・塗膜構造分析 …… ㈱吉田生物研究所　95

第５章　考察 …… 97
1．鹿田遺跡における近世の土地利用 …… 岩崎志保　97
2．鹿田遺跡における近代邸宅 …… 木村理　103

第６章　結語 …… 115

挿図目次

第１章～第３章

図１　周辺遺跡分布図 …… 2
図２　発掘調査地点と構内座標 …… 4
図３　調査開始状況 …… 11
図４　検出遺構全体図 …… 12
図５　本調査地点と周辺の既調査地点 …… 13
図６　土層断面柱状図 …… 14
図７　弥生時代～古墳時代遺構全体図 …… 17
図８　井戸１ …… 18
図９　井戸１出土遺物１ …… 18
図10　井戸１出土遺物２ …… 19
図11　井戸１出土遺物３ …… 20
図12　井戸２ …… 21
図13　井戸２出土遺物 …… 22
図14　井戸３ …… 22
図15　土坑１・出土遺物 …… 23
図16　土坑２ …… 24
図17　土坑２出土遺物 …… 25
図18　土坑３・出土遺物 …… 26
図19　土坑４・出土遺物１ …… 27
図20　土坑４出土遺物２ …… 28
図21　土坑５・出土遺物 …… 29
図22　土坑６ …… 30
図23　溝１～３断面 …… 30
図24　溝１～３出土遺物 …… 31
図25　溝４断面 …… 31
図26　溝５断面 …… 31
図27　土器集中１出土状況 …… 32
図28　土器集中１出土遺物 …… 33
図29　土器集中２出土遺物 …… 34
図30　土器集中３出土状況 …… 35
図31　土器集中３出土遺物 …… 36
図32　中世・近世の遺構全体図 …… 37
図33　井戸４ …… 38
図34　井戸４出土遺物 …… 38
図35　井戸５・出土遺物 …… 39
図36　井戸６ …… 39
図37　井戸６出土遺物 …… 40
図38　井戸７ …… 41
図39　井戸７出土遺物 …… 41
図40　井戸８・出土遺物 …… 42
図41　井戸９・出土遺物 …… 42
図42　井戸10・出土遺物 …… 43
図43　井戸11 …… 44
図44　井戸12 …… 44
図45　井戸13 …… 45
図46　井戸14・出土遺物 …… 45
図47　土坑７ …… 46
図48　土坑８ …… 46
図49　土坑９ …… 46
図50　土坑10 …… 47
図51　溝６断面 …… 48
図52　溝６出土遺物 …… 48
図53　近代遺構全体図 …… 49
図54　井戸15 …… 50
図55　SG1概要 …… 50
図56　SG1北護岸 …… 51
図57　SG1東護岸 …… 52
図58　SG1南護岸 …… 53
図59　SG1西杭列 …… 54
図60　SG1魚溜 …… 55
図61　SG1水路１ …… 57
図62　SG1水路２ …… 58
図63　SG1出土遺物１ …… 59
図64　SG1出土遺物２ …… 60
図65　SG1出土遺物３ …… 61
図66　SG1出土遺物４ …… 62
図67　SG1出土遺物５ …… 63

図68　SG1出土遺物６ …… 64
図69　SG1出土遺物７ …… 65
図70　SG1出土遺物８ …… 67
図71　溝７ …… 68
図72　溝７出土遺物１ …… 69
図73　溝７出土遺物２ …… 70
図74　SG2概要 …… 71
図75　SG2東半 …… 71
図76　SG2東半断面 …… 72
図77　SG2西半 …… 73
図78　SG2西半（石除去後） …… 74
図79　SG2出土遺物 …… 75
図80　包含層ほか出土遺物１ …… 76
図81　包含層ほか出土遺物２ …… 77

第４章

1

図１　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(1) …… 82
図２　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(2) …… 83
図３　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(3) …… 84

2

図１　出土種子写真１ …… 87
図２　出土種子写真２ …… 88
図３　土器圧痕写真１ …… 90
図４　土器圧痕写真２ …… 91
図５　土器圧痕写真３ …… 92

3

図１　出土貝類 …… 93

4

図１　出土動物遺存体 …… 94

5

図１　顕微鏡写真 …… 95
図２　塗膜構造顕微鏡写真 …… 96

第５章

1

図１　鹿田キャンパスと切り図 …… 97
図２　土地の所有状況 …… 98
図３　近世の検出遺構 …… 99
図４　耕作地のようす …… 100

2

図１　岡山医科大学の構内図の変遷 …… 104
図２　SG1の各部構造と出土遺物 …… 105
図３　SG2の各部構造と出土遺物 …… 106
図４　邸宅復元にかかる古写真と復元案(1) …… 108
図５　邸宅復元にかかる古写真と復元案(2) …… 109
図６　邸宅復元にかかる古写真と復元案(3) …… 110
図７　邸宅復元にかかる古写真と復元案(4) …… 111
図８　鹿田遺跡第22次調査で検出された邸宅復元案 …… 112
図９　備前地域における民家の諸例 …… 113

表　目　次

第４章

1

表１　鹿田遺跡第22次調査で出土した木製品一覧 …… 81
表２　鹿田遺跡第22次調査出土木製品の樹種 …… 81

2

表１　出土種子一覧 …… 86
表２　土器圧痕の種子同定結果一覧 …… 89

3

表１　出土貝類一覧 …… 93

4

表１　出土動物遺存体一覧 …… 94

5

表１　調査試料 …… 96
表２　塗膜構造 …… 96

第５章

1

表１　鹿田キャンパスの土地所有状況（抜粋） …… 98
表２　鹿田遺跡の近世井戸 …… 100

2

表１　鹿田遺跡第22次調査で検出された池の構造比較 …… 107

図版目次

図版１　調査区全景
図版２　井戸１
図版３　井戸２
図版４　井戸３
図版５　土坑１～３
図版６　土坑４
図版７　土坑５
図版８　土坑６
図版９　溝１～５
図版10　土器集中１
図版11　井戸４
図版12　井戸５・６
図版13　井戸７
図版14　井戸８
図版15　井戸９
図版16　井戸10
図版17　井戸11
図版18　井戸14
図版19　井戸13・土坑７
図版20　土坑８・９
図版21　土坑10
図版22　庭園遺構１（SG1）(1)
図版23　庭園遺構１（SG1）(2)
図版24　庭園遺構１（SG1）(3)
図版25　庭園遺構１（SG1）(4)
図版26　庭園遺構１（SG1）(5)
図版27　溝７
図版28　庭園遺構２（SG2）(1)
図版29　庭園遺構２（SG2）(2)
図版30　土器(1)
図版31　土器(2)
図版32　土器(3)
図版33　土器(4)
図版34　土器(5)
図版35　石器
図版36　木製品(1)
図版37　木製品(2)
図版38　土製品・石製品・その他
図版39　金属製品

例　言

1．本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学地域医療人育成センター新営に伴って実施した鹿田遺跡第22次調査地点の発掘調査報告書である。調査地点は岡山市北区鹿田町２丁目５番１号に所在する。発掘調査期間は2011年６月～11月で、調査面積は533㎡である。

2．発掘調査は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の、また報告書作成は岡山大学埋蔵文化財調査委員会の指導のもとに行われた。委員・幹事諸氏に感謝申し上げる。

3．本書作成にあたっては、以下の諸氏に教示・協力いただいた。記して感謝申し上げる。
石材同定：鈴木茂之（岡山大学名誉教授）、貝類同定：福田宏（岡山大学学術研究院自然科学学域）、木材樹種同定：能城修一（明治大学黒曜石研究センター）、種子同定：沖陽子（岡山県立大学）、動物遺存体の同定：富岡直人（岡山理科大学）、陶磁器：乗岡実（丸亀市教育委員会）、近代庭園：仲隆裕（日本庭園・歴史遺産研究センター）

4．近代庭園遺構に関連して、中山栄美子氏より写真をお借りした。記して感謝申し上げる。

5．発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、岩崎志保・野崎貴博・光本順・南健太郎・山本悦世のほか、奥原このみ・篠崎文佳・山田衛生が行った。

6．報告書作成にあたっての主な担当は以下の通りである。
【遺物】＜実測・観察表＞有賀紅美・木村理・柴田亮　＜浄書＞有賀・小野素子・木村・柴田
＜写真撮影＞木村・柴田　＜木製品SfM撮影＞木村
【遺構】＜下図作成＞岩崎　＜浄書＞木村・岩崎
遺物の全体整理は南・岩崎が、遺構の時期比定は岩崎が担当した。

7．本書の執筆分担は第１章を木村、第２・３・６章を岩崎が担当し、第４・５章は各節毎に目次に示した。

8．本書の編集は清家章文化遺産マネジメント部門長の指導のもと、岩崎が担当した。

9．発掘調査の概要は「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011」に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。

10．本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1／25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成６年発行）を合成して使用したものである。

11．本書に掲載した記録・出土遺物はすべて文明勤懋学研究所文化遺産マネジメント部門で管理している。

凡　例

1．本書で用いる高度値は海抜標高であり、方位は国土座標Ⅴ座標系（日本測地系）の座標北である。

2．遺物番号は遺構別に付し、土製品には T、石器は S、木製品は W、金属器は M、その他に X を付して通し番号とする。

3．遺物に関するデータは観察表にまとめている。観察表の表記基準は以下の通りである。
①法量値は、数値の差が口径・底径で２㎜以下、器高では１㎜以下の場合は平均値を示すが、同数値以上の差がある場合は「×」「～」を付してその数値幅を示す。
②残存状況については、計測部の残存度を示し、その割合が１／６未満の場合は「－」を記した。

4．土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。

5．巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。

6．オルソ図はデジタルカメラRICOH　GR2およびMetashapeを使用したSfMにより作成した。

7．オルソ図は平面掲載を主とし、断面形は掲載していない。厚みについては観察表を参照されたい。

8．庭園遺構について、SGの略号で記載する場合がある。

第１章　歴史的・地理的環境

第１節　遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町２丁目５番１号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。同遺跡は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたる、河口近くの三角州上に立地している。現在の旭川は本遺跡の東方約１㎞を見島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5㎞の距離を有するが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が及んでいたと想定される。

本遺跡周辺における人間活動の痕跡は旧石器時代にまでさかのぼる。旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている[1]。縄文時代では、本遺跡が所在する岡山平野北端を画する半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている[2]。その中で、人間活動が本格化するのは縄文時代後期前葉以降である。代表的な遺跡を挙げると、後期前葉～同中葉の竪穴住居や貯蔵穴群などが検出された津島岡大遺跡[3]、後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡[4]がある。いずれも丘陵付近のエリアに限定されるが、これらは一時的な中断を挟みながらも弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では津島岡大遺跡[5]、津島遺跡[6]、北方遺跡群[7]や百間川沢田遺跡・原尾島遺跡[8]において、水田遺構が検出されている。弥生時代早期とされる津島江道遺跡[9]の水田は時期についての評価が確定していないが、水稲農耕の情報が岡山平野に早い段階にもたらされ、受容されていたことは確実であろう[10]。

集落は、前期前半は津島遺跡に限定されるが、その後、南方遺跡[11]、雄町遺跡[12]、百間川沢田遺跡、同原尾島遺跡[13]などが出現する。さらに遺跡数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のふもとに広がる北群と、臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～中期前葉の代表的な集落である南方遺跡から、絵図遺跡[14]、上伊福九坪遺跡[15]、上伊福遺跡[16]へと集落域が拡大しつつ移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡[17]などを含めた広い範囲に中核的集落が形成される。また、南方釜田遺跡[18]では、中期前後の円形周溝墓や中期中葉の区画墓が検出されるなど、拠点的集落の一角に墓域が設けられることも判明している。

対して、旭川下流の臨界性の高いエリアでは、中期後葉に鹿田遺跡[19]、後期には天瀬遺跡[20]が加わった遺跡群のまとまりを認めうる。旭川の東岸では、雄町遺跡などのように前期から継続的に後期に至る遺跡が多いが、その平野南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡[21]、後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳[22]の系列が該当する[23]。造墓活動は古墳時代前期後半に最盛期を迎え、神宮寺山古墳[24]、金蔵山古墳[25]、湊茶臼山古墳[26]という全長150m級の前方後円墳を生み出す。その後、中期前～中葉において築造は一度低調化するものの、中期後葉～後期前葉にかけてはお塚様古墳や塚前古墳といった全長50m前後の前方後円墳が隣接して築かれたとみられる[27]。後期中葉に入ると、周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に展開するなど、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸のうち南群ではその傾向が顕著に認められる。古墳時代前期まで拠点をなしていた鹿田遺跡も、当地域

1．鹿田遺跡（縄文～近世）
2．津高城大遺跡（縄文中期～近代）
3．田益田中（国立岡山病院）遺跡（縄文～近世）
4．百間焼遺跡（古墳後期～奈良）
5．津高住宅団地内遺跡群（古墳後期～奈良遺跡群を含む）
6．佐良山古墳群（古墳後期）
7．祖師山古墳群（古墳後期）
8．焼地古墳群（古墳後期）
9．鬼岩古墳群（古墳後期）
10．ダイミ山古墳（古墳中期？）
10．津島３丁目第１地点（弥生～古墳）
11．信乃墳群（古墳後期～後期）
12．片山古墳（古墳後期）
13．幼年山遺跡（古墳～室町）
14．首部（石山神社）首塚（鎌倉～室町？）
15．島山城（砦？迫城）跡（室町）
16．七ツ塚墳墓・古墳群（弥生～古墳）
17．都月坂墳墓・古墳群（弥生～古墳）
18．半田山城（戦国）
19．津島坂田遺跡（古墳～室町）
20．原前古墳（古墳中期？）
21．上原様古墳（古墳中期）
22．津島東遺跡（縄文～室町）
23．朝妻車氏塚（縄文前～後期）
24．一本松古墳（古墳中期）
25．不動堂古墳
26．妙見山遺跡（戦国）
27．鹿田遺跡（弥生～近世）
28．三野宮之段遺跡（鎌倉～室町）
29．津島新野遺跡（弥生）
30．津高江道遺跡（縄文～近世）
31．北方長田遺跡（弥生～近世）
32．神宮寺山古墳（古墳前期）
33．善覚古墳（古墳前期）
34．十二本木塚古墳
35．石塔寺（奈良？～室町）
36．関西高校表山古墳群
37．津倉古墳（古墳前期）
38．妙林寺遺跡（弥生）
39．上伊福西遺跡・尾財神社南遺跡（弥生～平安）
40．津倉遺跡（弥生）
41．津高遺跡（弥生～近世）
42．北方下沼遺跡（弥生～室町）
43．北方横田遺跡（弥生～室町）
44．北方中溝遺跡（弥生～室町）
45．北方地蔵遺跡（弥生～近世）
46．北方東ノ内遺跡（弥生～近世）
47．北方上沼遺跡　他（弥生～近世）
48．上伊福遺跡・伊福定岡遺跡遺跡
49．上伊福遺跡（弥生～古墳）
50．絵図遺跡（弥生～平安）
51．南方遺跡他（弥生～近世）
52．広瀬遺跡（弥生）
53．上伊福（立花）遺跡（弥生～室町）
54．大供本町遺跡（古代～近世）
55．大供東通遺跡（弥生～室町？）
56．鹿田（県立岡山病院）遺跡（平安～鎌倉）
57．岡山城跡（室町～近世）
58．岡山座東湖（江戸）
59．天瀬遺跡（弥生～近世）
60．新道遺跡（奈良～近世）
61．二日市遺跡（弥生～近世）
62．電ノ口山頂古墳群（古墳後期）
63．湯迫古墳群（古墳前期）
64．西瀬神黄迫古墳群（古墳後期）
65．西瀬神黄迫子古墳群（古墳後期）
66．西瀬神谷口古墳群（古墳後期）
67．獲前平坂古墳（古墳前期）
68．上の山１号墳（古墳中期）
69．僧人塚古墳（古墳後期）
70．貴田院寺（奈良～室町）
71．百間川二の瀬遺跡（近世）
72．中島遺跡（鎌倉～江戸）
73．宮南遺跡（鎌倉～近世）
74．岡長遺跡（平安～近世）
75．天神河原遺跡（弥生～室町）
76．獲前岡野関遺跡
77．獲前岡宇神（奈良～平安）
78．獲前岡野普定地（南岡長）遺跡（弥生～鎌倉）
79．南方赤地遺跡（奈良～平安）
80．北口遺跡（弥生～室町）
81．ハザ（高島小）遺跡（奈良～室町）
82．中井・南三反田遺跡・古墳群（弥生～室町）
83．原尾島遺跡（弥生～室町）
84．赤田西遺跡（弥生～室町）
85．蟹多塚寺（奈良～平安）
86．浦水遺跡（弥生～室町）
87．雄町遺跡（弥生～古墳）
88．乙多見遺跡（弥生）
89．赤田東遺跡・関遺跡（弥生～室町）
90．関遺跡（弥生）
91．百間川遺跡群（縄文～近世）
92．百間川原尾島遺跡（縄文中期末～近世）
93．百間川沢田遺跡（縄文中期～近世）
94．百間川妻鹿遺跡（弥生～室町）
95．百間川寺谷遺跡（弥生～古墳）
96．祝山古墳群（古墳後期）
97．妙善寺城跡（戦国）
98．祝山２０号遺跡（須恵器）
99．金蔵山古墳（古墳中期）
100．妻鹿松坂遺跡（弥生）
101．郷浦塚寺（奈良～平安）
102．祝山１０号墳（古墳前期）
103．祝山２０２号遺跡（奈良～平安）
104．郷浦東山古墳（古墳後期）
105．祝山２１７号遺跡（須恵器）
106．祝山１０１号墳（古墳後期）
107．赤浜千山古墳（古墳中期）
108．祝山２０６遺跡（平安～室町）
109．浜荒神遺跡（奈良～室町）
110．大福山遺跡（鎌倉～室町）

図１　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000・1/3,750,000）

における古墳の消長と軌を一にして衰退する。

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡として、旭川東岸では、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡[28]、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺[29]、総柱建物や道路、「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器、「官」の刻印須恵器などが検出された百間川米田遺跡[30]などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺[31]が知られる。その対岸、旭川西岸では８世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡[32]、その西500ｍに８世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡[33]が位置する。これら旭川河口における活発な人間活動が、本遺跡との関わりの深い「鹿田庄」成立の重要な要因になった可能性も考えられる。

平安～鎌倉時代には、地割りを手がかりにした歴史地理の研究[34]や発掘調査成果から、摂関家殿下渡領に比定される、「鹿田荘」が鹿田遺跡周辺で展開したとみられる。遺跡の詳細は後述するが、同一地域に所在する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土したほか、南東600ｍの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている[35]。旭川東岸では、百間川遺跡群[36]において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

以後、戦国時代にかけても鹿田遺跡では大形の溝に囲まれた屋敷地の存在が認められるが、該期の集落状況がわかる遺跡は少ない。旭川東岸の中島遺跡[37]、東岡山遺跡[38]で、中世後半～近世の井戸、溝などが確認されている。

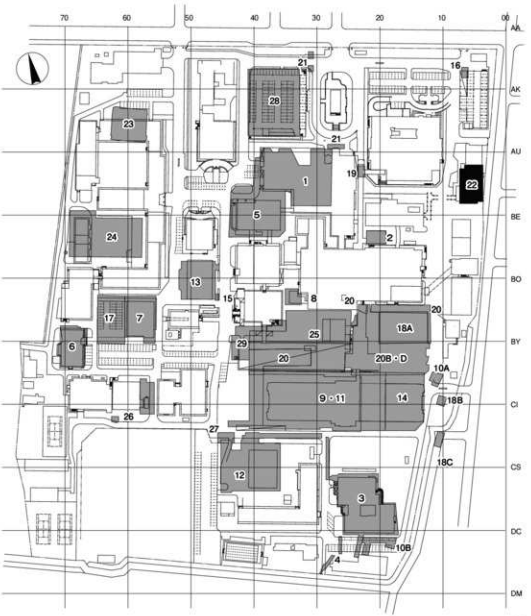
江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡周辺の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は一部を残して、屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～１ｍの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第２節　鹿田遺跡

１．構内座標の設定

本部門では、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査および記録を行っている（図２）。この構内座標は1983年から2002年度までは日本測地系による国土座標第Ⅴ座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（Ｘ＝－149,800ｍ、Ｙ＝－37,400ｍ）を原点とし、南北軸をＮ－15°－Ｅに振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとし、日本測地系によって設定した構内座標系を踏襲したまま、日本測地系に基づく座標値のみを世界測地系の座標値へと変換することとした[39]。すなわち、地図上に投影される局地座標系の相対的位置関係を保持したまま、座標値のみを世界測地系へと置き換えることとしたのである。その結果、構内座標の原点は、Ｘ＝－149,456.3718ｍ、Ｙ＝－37,646.7700ｍの数値にあたることとなった。ただし、日本測地系と世界測地系では、基準となる楕円体や測地座標系が異なるため、両者の座標軸は一致しない。したがって、日本測地系に基づいて設定した局地座標を用いる本構内座標の北は日本測地系に基づく座標北であり、世界測地系の座標北とは異なる。

構内では座標原点から一辺５ｍの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ５ｍごとの東西ラインをAB、AC…AZ、BA、BB…のごとく附番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ５ｍごとの南北ラインを01、02、03…と附番する。これらのラインによって掲載される５ｍ四方の区画名は、そ



1　第１次調査：外来診療棟
2　第２次調査：NMR-CT室
3　第３次調査：医療短期大学部【校舎】
4　第４次調査：医療短期大学部【配管】
5　第５次調査：管理棟
6　第６次調査：アイソトープセンター
7　第７次調査：基礎研究棟
8　第８次調査：RI治療室
9　第９次調査：病棟
10　第10次調査：共同溝開連
11　第11次調査：病棟
12　第12次調査：エネルギーセンター
13　第13次調査：総合教育研究棟
14　第14次調査：病棟
15　第15次調査：総合教育研究棟【外溝】
16　第16次調査：立体駐車場エレベーター
17　第17次調査：基礎研究棟
18　第18次調査：中央診療棟
19　第19次調査：渡り廊下
20　第20次調査：中央診療棟開連
21　第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備
22　第22次調査：地域医療総合支援センター（本調査地点）
23　第23次調査：JFホール
24　第24次調査：医歯薬融合棟
25　第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期）
26　第26次調査：動物実験施設
27　第27次調査：自家発電設備
28　第28次調査：アメニティモール
29　第29次調査：臨床検査センター

※建物名称は調査次の呼称による。

図２　発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

の東北コーナーで交わる２方向のライン名を組み合わせて、AA00区、AB01区…と呼称する。

２．遺跡の概要

鹿田遺跡では、2021年度までに29次にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

【地形環境】

本遺跡は、旭川河口付近に形成された砂州状地形に位置し、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第９次・第11次調査[80]、第14次調査[82]において水田域が、居住域（第１次・第２次調査[20]）の南側に確認されるなど、海岸線まで一定の距離があったことが想定される。

ここで、本地点に集落が形成される弥生時代中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第１次調査で確認された縄文時代中期末～後期前葉の土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる[20]。数はそれぞれ１点程度と、該期の人間活動は希薄であった可能性が高いが、各時期において多少なりとも陸地が存在していたことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文時代早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂堤状の陸域となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生時代前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている[82]。この成果は、出土遺物の時期とも概ね整合的で、鹿田遺跡が河口付近に形成された高まりのなかの一つに立地していたことを示す。

また、地形面での大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査[83]で確認され、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査[84]等でみつかっている。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、遺跡北側の調査からも追認される。第16次調査[85]、第21次調査[86]、第23次調査では、最も安定した微高地である第１次調査地点の北側で、長期にわたって存在する深い谷地形あるいは河道が検出された。同エリアが日常的に利用されるのは、平安時代後期～鎌倉時代初頭以降である。実際、本遺跡から北500mの大供中道遺跡[87]では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地がみつかっており、遺跡北側と一連の平坦な地形へと姿を変えていたことが想定される。

微高地南側も同様で、平安時代前半までは、第１次調査・第２次調査[20]・第５次調査[88]地点付近はその南側と１m程度の比高を有していたが、平安時代後期には屋敷地が広がっており、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立していたとみられる。

【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉・後期前葉～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～江戸時代である。遺構・遺物が不鮮明な時期を挟むが、弥生時代中期後葉以降、江戸時代末まで継続的に集落が営まれていたといえよう。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭：中期後葉における居住域は、現状では第１次調査地点に限られ、東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が想定される。その範囲は、後期には南側の第５次調査地点、南東側の第２次・第18次調査地点[89]、東側の第19次[90]・第22次調査（本地点）[91]地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には前述の通り、水田域が形成される（第９次・第11次・第14次調査地点）。

古墳時代初頭には、これら居住域のうち東側（第22次調査地点）の遺構は姿を消し、西～南側に新たな広がり

を見せる。なかでも、西側の第７次調査[52]・第17次調査[53]地点では竪穴住居や井戸が、第12次・第13次[54]・第18次～第20次調査[55]各地点では土器溜まりが確認されている。

居住域で検出された主な遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりである。また、集落は竪穴住居３～５棟前後で構成された可能性が高く、弥生時代後期末～古墳時代初頭には、柱穴をもたない小規模な住居や井戸の数が増加する。一方、土坑は弥生時代後期後半以降、その数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する。出土遺物の構成にも甕の増加など、新たな動きが認められる。また、第17次調査では、古墳時代初頭に位置づけられる炉や焼土集中域もみつかっており、集落内で多様な手工業生産が実施されていたことを窺わせる。

そのほか特徴的な遺物として、製塩土器や土錘・石錘、四国地域との関係を示す弥生時代後期の甕（第１次調査）、古墳時代における畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器があげられる（第12次・第24次調査）。このように、本遺跡は旭川西岸における集落の中で、臨海の集落として一定の役割を担っていたと考えられる。

古代（飛鳥時代）：古墳時代前期に集落は姿を消したのち、７世紀前半には第１次・第２次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がりは、同地点の西側（第23次調査地点）にまで及ぶことも判明している。また、キャンパスの南端、第12次調査地点でも該期の溝が検出されており、少ないながらも土地利用がキャンパス全体にわたっていることが確認された。

古代（奈良時代後半～平安時代前半）：第１次・第２次・第５次調査地点を中心に、既付き掘立柱建物を含む建物群や、大形の刳り抜き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。８世紀後半～10世紀初めに位置づけられ、遺構の分布範囲は限定的である。一方、同域から約250m南に位置する第４次調査[56]地点では、東西方向の河道に伴って橋脚、杭による護岸が確認されている。とりわけ、橋脚を構成する径30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の存在を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示していよう。

出土遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗り土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物が注目される。硯には蹄脚硯が含まれる。また、第24次調査地点では、井戸から２枚の絵馬が重なって出土した。本時期に属する５基の井戸では、刳り抜きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセット関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本遺跡が何らかの管理地的な役割を有し、都とのつながりが強い集落であったことを窺わせる。

中世前半（平安時代後半～鎌倉時代）：10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田遺跡（現・岡山県精神科医療センター）に、同時期の遺構が形成される[57]。鹿田キャンパス内で再び集落が活発化するのは11世紀代だが、新たに形成された11～12世紀の集落は以前とは全く異なる構造を呈する。具体的には、現在に残る地割り方向（北で東に15°傾斜：以下「鹿田地割」と記す）に沿った溝で敷地全体が区切られ、１町を単位とした碁盤の目状の地割りに合わせて屋敷地が配される。その地割は、その後12世紀後葉～13世紀初頭に再編され、新たに造営された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる[58]。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石に加えて瓦器・東播系の擂鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回しの到来を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第７次調査）と合わせて、盛んな人の往来、物資の流通を裏付ける。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡、銅鉋（第６次調査[59]）からは、宗教施設の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査地点では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層等の存在も想定される。

中世後半～近世（室町時代～江戸時代）：鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前葉）には、次の時代に向けて屋敷地

の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に集約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大する場合が多い。また、集落の配置は、第１次調査地点を中心とする北側域から、その南方の第９次・第11次・第14次・第25次・第20次・第18次調査地点付近に東西方向に並ぶ傾向を強める。

第20次・第18次調査地点では、井戸・土坑が江戸時代後期まで確認されており、この地点で屋敷地が継続していたことをうかがえる。第20次調査Ｂ地点の井戸からは、京焼の猿形水滴（17世紀初）のほかにも、肥前磁器の水滴（18世紀代）といった、武家好み・文人好みの品が出土した。また、18次調査Ｂ地点では幕末期の船着き場があった可能性が高い。こうした遺構・遺物からは大庄屋の存在が想定される。

この一角を除くと本遺跡の多くの調査地点では、中世後半以降耕作地へと変化する。検出される遺構には畦畔や溝、その脇に並ぶ野壺がある。

近代（明治～大正）：近代においても耕作地としての利用がなされる当地域だが、当時の地籍図や写真、あるいは発掘調査成果から、本地点で屋敷が存在していたことが判明している。その成立期は不明だが、キャンパス内の建物配置図に基づくと、1925（大正14）年から1930（昭和５）年にかけて段階的に岡山大学医学部の前身である岡山医科大学へ移管されたようである。

岡山大学医学部は、1870（明治３）年に岡山藩によって開設された岡山藩医学館に端を発する。その後、1880（明治13）年に岡山県医学校、1988（明治21）年に第三高等中学校医学部への改組を経て、1901（明治34）年に岡山医学専門学校として設立される。また、1916（大正５）年に現在の鹿田キャンパス内への移築工事が着工し、1921（大正10）年までにはおおむねの建物が建設されたようである。その後、大学令の公布を受けて1922（大正11）年には岡山医科大学へ改組、1949（昭和24）年の国立大学設置法により岡山大学医学部へ移行した。

【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は、「鹿田庄」比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、「興福寺縁起」によれば、817（弘仁４）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で充てたとされており[29]、平安時代初期には興福寺と強い関係を有する、藤原摂関家の影響が及んでいたことは十分に予想される。該期の遺構としては、第１次・第２次・第５次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸に加えて、集落の西端に位置する第24次調査地点で検出された井戸があげられる。前述したようにその内部から、２枚の絵馬が重なって出土している。これらの遺構・遺物は、鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考えるうえで重要な手がかりになろう。

本章は下記既報告の文章をもとに加筆および一部改変したものである。
山本悦世2020『第１章　歴史的・地理的環境』『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊

註

(1)　鎌木義昌　1962「第一編　原始時代」『岡山市史（古代編）』
(2)　富岡直人　1998「朝妻鼻貝塚発掘調査概報」加計学園理蔵文化財調査室発掘調査報告書２
(3)　a　山本悦世編　1992『津島岡大遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊
　　b　阿部芳郎編　1994『津島岡大遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊
　　c　岩崎志保編　2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
(4)　a　二宮治夫編　1985『百間川沢田遺跡２　百間川長谷遺跡２』岡山県理蔵文化財発掘調査報告59
　　b　平井　勝編　1993『百間川沢田遺跡３』岡山県理蔵文化財発掘調査報告84
(5)　山本悦世編　2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
(6)　a　津島遺跡調査団　1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
　　b　岡山県教育委員会　1970『岡山県津島遺跡調査概報』
　　c　鳥崎　薫ほか　1999『津島遺跡１』岡山県理蔵文化財発掘調査報告137
　　d　平井　勝　2000『津島遺跡２』岡山県理蔵文化財発掘調査報告151
　　e　鳥崎　薫ほか　2003『津島遺跡４』岡山県理蔵文化財発掘調査報告173

f　岡本泰典ほか　2004『津島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
g　烏崎　薫ほか　2005『津島遺跡６』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190
(7)　a　岡田　博編　1998『北方下沼遺跡　北方横田遺跡　北方中溝遺跡　北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
b　高田恭一郎編　2000『北方地蔵遺跡２　北方蔵ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
(8)　a　宇加匡雅編　1999『百間川原尾島遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b　平井　勝編　1995『百間川原尾島遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
(9)　a　高畑知功　1988『津島江遺遺跡』岡山県埋蔵文化財報告」18
b　草原孝典　1999『津島江遺（岡北中）遺跡』岡山市埋蔵文化財調査の概要　1997（平成９）年度」
(10)　a　柳瀬昭彦　1988『中溝遺跡』「日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－」日本考古学協会静岡大会実行委員会
b　柳瀬昭彦　1988『南方釜田遺跡』「日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－」日本考古学協会静岡大会実行委員会
(11)　a　岡山市遺跡調査団　1971『南方遺跡発掘調査概報』
b　岡山市遺跡調査団　1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
c　柳瀬昭彦・岡本寛久　1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d　安川　満編　2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
e　乗岡　実・高橋伸二　2021『南方（国体開発）発掘調査報告』岡山市教育委員会
(12)　a　高橋　護・正岡睦夫ほか　1972『雄町遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」１
b　草原孝典　2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
(13)　a　江見正巳ほか　1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b　正岡睦夫編　1984『百間川原尾島遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
c　柳瀬昭彦編　1996『百間川原尾島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
d　高田恭一郎編　2008『百間川原尾島遺跡７　百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
(14)　内藤善史編　1996『絵図遺跡　南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
(15)　a　中野雅美　1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告」14
b　中野雅美・根木　修　1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史　考古資料』
(16)　a　扇崎　由　2015『上伊福（済生会）遺跡１』岡山市教育委員会
b　扇崎　由　2016『上伊福（済生会）遺跡２』岡山市教育委員会
c　扇崎　由　2017『上伊福（済生会）遺跡３』岡山市教育委員会
d　扇崎　由　2018『上伊福（済生会）遺跡４』岡山市教育委員会
e　扇崎　由　2021『上伊福（済生会）遺跡５』岡山市教育委員会
(17)　a　杉山一雄編　1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
b　金田善敬編　2005『伊福定国前遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
c　亀山行雄編　2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
(18)　草原孝典編　2023『南方釜田遺跡』岡山市教育委員会
(19)　古留秀敏・山本悦世編　1988『鹿田遺跡１』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊
(20)　a　出宮徳尚　1986『天瀬遺跡』「岡山県史」考古資料
b　杉山一雄ほか　2001『天瀬遺跡・岡山城外堀跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告154
(21)　高畑知功　1982『百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財調査報告51
(22)　宇加匡雅　1990「綱浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅱ－」「古代吉備」第12集
(23)　松本武彦　1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」「鹿田遺跡３」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊
(24)　神谷正義・安川　満　2007「神宮寺山古墳　綱浜茶臼山古墳」
(25)　a　西谷真治・鎌木義昌　1959『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
b　宇加匡雅　2008『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
c　安川　満・寒川史也　2019『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
(26)　a　近藤義郎　1986「漆茶臼山古墳」「岡山県史」考古資料編
b　安川　満　2013「漆茶臼山古墳」岡山市教育委員会
(27)　a　近藤義郎　1988「岡山市津島の俗称「おつか」と称する前方後円墳についての調査の概略報告」「古代吉備」第10集
b　野崎貴博　2023「岡山市北区津島福居の前方後円墳－お塚様古墳と塚前古墳－」「古代吉備」第34集
(28)　草原孝典　2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
(29)　高橋伸二　2005『史跡貴田廃寺跡』岡山市教育委員会
(30)　岡山県教育委員会　1982『百間川当麻遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
(31)　中野雅美　1977「吉備における平城宮式瓦について」「川入・上東」岡山県埋蔵文化財報告16
(32)　草原孝典　2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
(33)　南健太郎　2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊

34　a　山本悦世　2007「中世の集落構造と推移－鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
　　b　山本悦世　2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条理関連遺構」「条里制・古代都市研究」30　条里制・古代都市研究会
35　出宮徳尚　1985「岡山県二日市遺跡」「日本考古学年報」３
36　柳瀬昭彦編　1996『百間川原尾島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106　ほか
37　河田健司・岡本芳明　2011『中島遺跡』岡山市教育委員会
38　草原孝典　2007『楽岡山遺跡』岡山市教育委員会
39　光本　順　2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002]
40　山本悦世　2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
41　岩崎志保　2014『鹿田遺跡８』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
42　山本悦世ほか　2019「岡山平野における環境復元へのアプローチ」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017]
43　南健太郎　2016『鹿田遺跡９』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
44　野崎貴博　2021『鹿田遺跡15』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第37冊
45　高田貢太　2006『鹿田遺跡第16次調査』[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004]
46　光本　順　2012『鹿田遺跡第21次調査』[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010]
47　河田健司　2000「大供中道遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会
48　松木武彦・山本悦世　1993『鹿田遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊
49　a　山本悦世　2008「鹿田遺跡第18次調査」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007]
　　b　光本　順　2013「鹿田遺跡第18次調査Ｂ／Ｃ地点」『鹿田遺跡７』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
50　野崎貴博　2010「鹿田遺跡第19次調査」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008]
51　岩崎志保　2012「鹿田遺跡第22次調査」[岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011]
52　山本悦世　2007『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
53　山本悦世　2020『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊
54　光本　順　2010『鹿田遺跡６』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
55　a　岩崎志保　2022『鹿田遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第38冊
　　b　山口琢治　2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
56　山本悦世　1990『鹿田遺跡２』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第４冊
57　河合　忍　2007『総括』『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
58　松木武彦・山本悦世　1997『鹿田遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
59　鈴木景二　2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会

第２章　調査に至る経緯と概要

第１節　調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

2010年度に岡山大学鹿田キャンパスに「地域医療人育成センターおかやま」の新営が計画された。建設予定地はキャンパス北東部の駐車場であり、以前は旧管理棟の建物があった地点である。周辺では鹿田遺跡第１次（外来診療棟）[1]・第16次（立体駐車場）[2]・第19次（歯学部渡り廊下）[3]等の発掘調査が実施されている。それらの成果を受け、旧地形および弥生時代以降の遺構・遺物の広がりを確認するため同年度に試掘・確認調査を実施した[4]。その結果、弥生時代～近世の遺構が確認されたことから、予定地に対し発掘調査を実施することとなった。

調査面積は533㎡で、調査員３名が担当した。

２．調査の体制

調査主体　岡山大学　学長　　森田　潔

調査担当　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　センター長　北尾　善信
副センター長　新納　泉

調査研究員　教授　山本　悦世
助教　岩崎　志保（調査主任）
助教　南　健太郎

運営委員会　調査年度

＜委員＞

北尾　善信　財務・施設担当理事（センター長）
新納　泉　大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）
久野　修義　大学院社会文化科学研究科教授
柴田　次夫　大学院自然科学研究科教授
大塚　愛二　大学院医歯薬学総合研究科教授
沖　陽子　大学院環境学研究科教授（調査研究専門委員）
山本　悦世　埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
秋山　明寛　施設企画部長

埋蔵文化財調査委員会　報告書刊行年度

＜委員＞

松本　直子　文明動態学研究所所長
清家　章　学術研究院社会文化科学学域（文）教授（文化遺産マネジメント部門長）
今津　勝紀　文明動態学研究所教授
大橋　俊孝　学術研究院医歯薬学学域（医）教授
中嶋　佳貴　学術研究院環境生命科学学域（農）准教授
野坂　俊夫　学術研究院自然科学学域（理）准教授
岩崎　志保　文明動態学研究所准教授（文化遺産マネジメント部門チームリーダー）
渡邉　恭令　施設企画部長

３．調査経過

2011年６月15日～７月13日に造成土掘削を実施した。掘削を始めてすぐに、旧管理棟基礎が前面に残っており、強固なコンクリート構造であることが判明した。遺跡の保護を第一に考慮し、まず基礎のない部分（190㎡）の発

掘調査を実施した後、コンクリート基礎を除去し、残りの調査を実施することとした（図３）。

前期調査は７月14日に開始した。調査は長方形の区画５つをそれぞれ掘り下げていくこととなった。表土直下で石組や水路が検出され、水路を伴う池状遺構が確認された。調査区が分断されていることから接続関係の把握が困難であった。石組等の記録のため、調査員を１名増員し、終了後、続いて近世～弥生時代の調査を進めた。近世の井戸・土坑、中世の井戸、弥生時代の井戸・土坑・溝・土器集中等を確認し、９月22日に前期の調査を終了した。

続いて９月26日～10月７日に基礎を撤去し、10月14日から後期調査を開始した。前期調査との接続部及び遺構関係に留意しつつ、近代の池状遺構、近世の井戸・土坑・溝と調査を進め、弥生時代後期の遺構の調査を実施した。11月18日にすべての調査を完了した。

前期調査中の８月21日に現地見学会を実施した。雨天であったが、26名の参加者を得た。この時に調査地点にかつて居住していた住民の情報を得ることができた。後期調査においても11月５日に現地見学会を計画し、広報をおこなったが、当日降雨によりやむなく中止した。

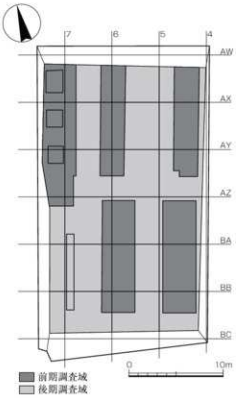


図３　調査開始状況（縮尺1/400）

第２節　調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、中世、近世、近代の遺構が確認された（図４）。

弥生時代後期～古墳時代初頭

井戸３基、土坑６基、溝５条、土器集中３カ所を検出した。本時期の調査地点付近の地形は南半が微高地を呈し、北側が低位部にあたる。検出した遺構は本地点の中央部～南半に位置するもので、微高地上に井戸３基と土坑４基、溝２条が、微高地部と低位部の境界に溝３条と土器集中が、そして低位部南端に土坑２基が確認された。

微高地上の遺構は後世の影響を大きく受けており、特に土坑・溝については全形並びにその機能を推測することが難しい。３基の井戸は調査区内でも南端に位置し、居住域はさらに南側に広がる可能性が高い。いずれも弥生時代後期に属する。土坑および土器集中から出土する遺物は、同じく弥生時代後期を主体とするが、一部の土坑に古墳時代初頭に入るものが少数認められる。また北半の低位部は弥生時代後期後半までに土砂の堆積が進み、弥生時代後期のうちに南半の微高地部との比高差が解消しつつある状況が窺える。

中世

井戸３基を検出した。中世前半に比定される２基は調査区南端に、中世後半の１基は調査区北部に位置する。前者の井戸のうち西側の１基は出土遺物から古代の可能性も残すが、本地点全体や本遺構周辺の古代の遺物はかなり少ない。中世前半においても、鹿田キャンパス全域で屋敷地が配置される時期であるが、本地点では南端に井戸が確認されるのみであり、居住域は本地点より南側に展開するのであろう。一方、中世後半の井戸１基が北部に確認され、後述するように近世の遺構・遺物のありかたから、中世後半以降、本地点全域が居住域として利

用されることが窺える。

近世

井戸８基、土坑４基、溝１条を検出した。井戸は調査区北東部に３基、北西部に２基、南西部に４基確認された。土坑と溝は南東部に位置しており、遺物が少なく詳細な時期の判断が難しいが、こうした分布は屋敷地のまとまりを示す可能性も考えられる。

近代

井戸１基、庭園遺構２基、溝１条を検出した。井戸は調査区北東部に、庭園遺構は北端と南半に位置する。溝１条は後述するが庭園遺構に関連する。井戸１基については遺物がなく、庭園遺構との前後関係あるいは同時性について不明である。

庭園遺構はいずれも、調査区外の東側を南流する枝川からの取水路と池からなり、南半の庭園遺構１には排水路も取りつく構造である。池部と水路には石組護岸を主体的に取り入れ、一部では板欄護岸を有する。出土遺物から明治～大正時代に機能し、岡山医学専門学校設置の際に埋没したものである。これら２基の庭園遺構は異なる２軒の居住区画にあたる。

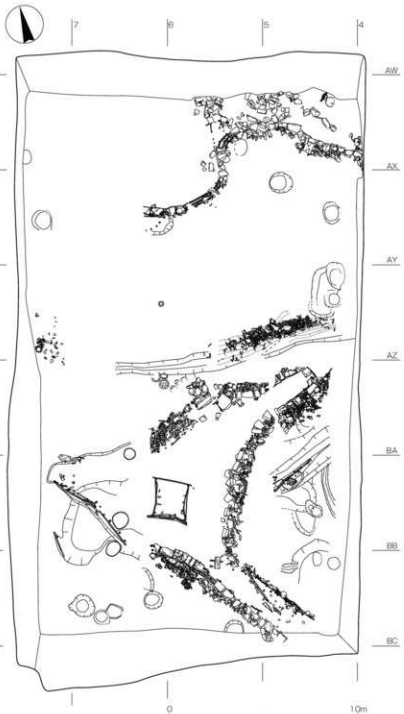


図４　検出遺構全体図（縮尺1/500）

註

(1)　吉留秀敏・山本悅世編　1988『鹿田遺跡１』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊

(2)　高田貫太　2006『鹿田遺跡第16次調査』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』

(3)　野崎貴博　2010『鹿田遺跡第19次調査』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』

(4)　野崎貴博　2012『岡山県地域医療総合支援センター予定地』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

第３章　調査の記録

第１節　調査地点と層序

１．調査地点

本調査地点は岡山大学鹿田地区の北東部に位置しており、鹿田地区構内座標ではAV～BB・04～07区に位置する（図５）。発掘調査直前には駐車場として利用されていた。

本調査地点は鹿田キャンパスの東端にあたり、北側に立体駐車場、北西に歯学部棟が位置する。前者の建設時には鹿田遺跡第16次調査（調査年度：2004年度）[1]を実施しているのみで、本地点周辺は既調査が比較的少ない。しかし、西に100m程で第１次調査地点、南西に70m程で第２次調査地点が存在し、両地点では弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構・遺物が密度高く確認されている[2]。本調査地点では、集落の東への広がりや地形の状況の確認が期待された。また調査前に実施した試掘・確認調査[3]の結果をうけて、本調査地点には弥生時代～近世の遺構・遺物の存在が想定された。

註 (1) 高田貴太2004『鹿田遺跡第16次調査』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
(2) 吉留秀敏・山本悦世1988『鹿田遺跡１』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊
(3) 野崎貴博2012『岡山県地域医療総合支援センター予定地』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』

２．層序

本調査地点は駐車場として利用される以前に、管理棟が建設されておりその建立は1930（昭和５）年である。

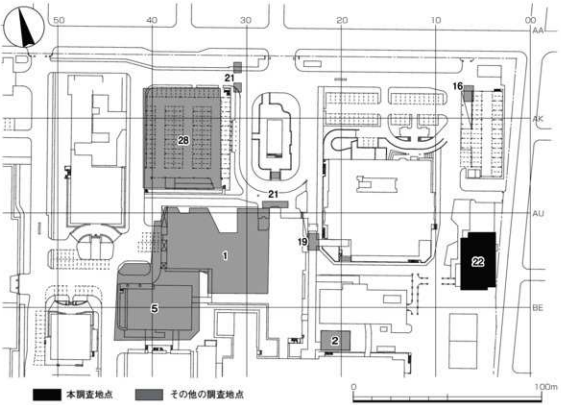


図５　本調査地点と周辺の既調査地点（縮尺1/2000）

3階建コンクリート製の建物であり、本調査地点の大部分は基礎工事により大きく破壊を受けていた。前述したように、本調査は遺跡の破壊を最小限に留めるためにコンクリート基礎を残したまま、前期調査を実施した。前期調査の終了後、コンクリート基礎を破砕・撤去し、残りの部分の調査を後期調査として実施した。図6に土層断面柱状図を示し、基本土層を以下に記述する。

＜1層＞1922（大正11）年に現在の岡山大学キャンパスに移転した岡山医科大学の建設工事に伴う造成土およびそれ以後、現代に至るまでの堆積土である。黄褐色を呈する真砂土を基調に大小の礫を含む。本地点南半は1925（大正14）年に文部省の所有となったことが判明し、また本調査地点北半は、岡山医科大学の移転後も1928（昭和3）年まで民有地が残されていたことが明らかであった地点である。その後、1930（昭和5）年に本調査地点全体が上述したコンクリート建物基礎工事の範囲に含まれることとなった。

＜1層＞上面の標高は2.8～2.9mを測る。＜1層＞には弥生時代後期以降近現代までの遺物が含まれ、コンテナ（28㎝×㎝）12箱の遺物が出土した。

＜2層＞～＜5層＞は近代の遺構（SG1・SG2）による破壊を免れた一部の箇所で確認された土層である。図6－⑥に代表される、調査区中央部で堆積が確認された。

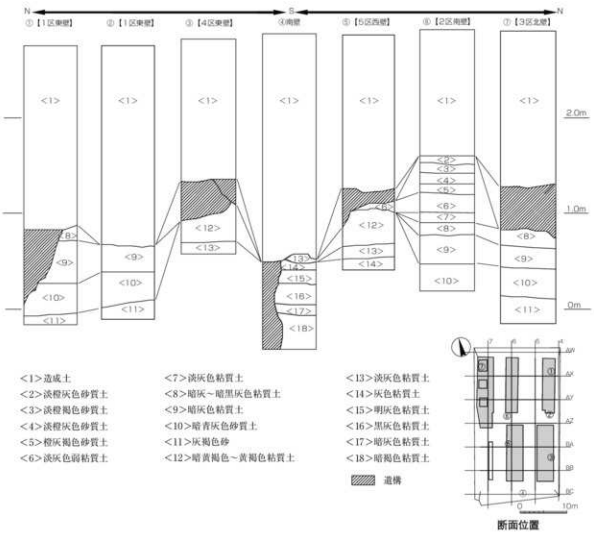


図6　土層断面柱状図（縮尺1/40）

＜2層＞淡橙褐色砂質土層である。上面のレベルは標高1.6mを測る。層厚は0.05mを測る。近代層である。庭園遺構および井戸は本層上面の遺構である。＜2層＞からはコンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）1／4箱の遺物が出土した。弥生時代後期～中世、近世、近代の遺物が含まれる。

＜3層＞淡橙褐色砂質土層である。上面のレベルは標高1.55m、層厚は0.1mを測る。近世～近代の層である。

＜4層＞淡橙灰色砂質土層で、上面の標高1.42m、層厚0.12mを測る。近世層である。＜3層＞・＜4層＞から併せてコンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）1／4箱の遺物が出土した。近世陶磁器・瓦を含む。

＜5層＞淡灰褐色砂質土層である。上面の標高1.3m、層厚0.1mを測る。近世層である。＜5層＞出土遺物はコンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）1／4箱が出土し、近世陶磁器・瓦のほか、弥生土器・須恵器が含まれる。

＜6層＞淡灰色弱粘質土層である。上面の標高は1.2m、層厚0.2mを測る。中世層である。コンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）1／4箱の遺物が出土し、須恵器・弥生土器が含まれる。図6－⑤に認められるように、＜12層＞直上で＜6層＞の堆積が見られ、本層の堆積段階に本地点一帯は削平を受けていることが窺える。本層は土色・土質の点から、耕作土の可能性が考えられる。

＜7層＞淡灰色粘質土層である。上面の標高は1.0m、層厚は0.1mを測る。土色・土質の点から＜6層＞と類似し、中世層と考えられる。出土遺物は少なく、古墳時代初頭の土器が含まれる。

＜8層＞～＜11層＞は調査区北半で確認された土層である。

＜8層＞暗灰～暗黒灰色を呈する粘質土層である。上面の標高は調査区中央部で0.9m、調査区北端で0.8mを測る。層厚は0.12～0.2mで、北にやや傾斜をもち、層厚を増す。＜8層＞出土遺物には、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が含まれ、後者は少ない。時期としては古墳時代初頭とする。

＜9層＞暗灰色粘質土層である。有機質を多く含む。上面の標高は調査区中央部で0.75m、調査区北端で0.65mを測る。層厚は0.25～0.3mで、北にやや傾斜をもつ。＜9層＞出土遺物はコンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）5箱があり、弥生時代後期の遺物で占められ、後期後半が主体である。

＜10層＞暗青灰色砂質土層である。上面の標高は調査区中央部で0.48m、調査区北端で0.4mを測る。層厚は0.3mを測る。出土遺物はコンテナ（28$^{\text{ｍｍ}}_{\text{ｍｍ}}$）14箱があり、時期としては弥生時代後期に比定される。

＜11層＞灰褐色砂層である。上面の標高は調査区中央部で0.1m、北端部で－0.05mを測る。－0.2mまでの堆積を確認した。本調査地点では遺物は確認されていない。

＜12層＞～＜18層＞は本調査地点南半でのみ確認した土層で、微高地を形成する土層である。

＜12層＞暗黄褐色～黄褐色を呈する粘質土層である。最も高いところで標高1.1mを測るが、大半の箇所で後の削平を受け、本来の標高は明らかでない。本調査地点で弥生時代後期の基盤層となる層である。層厚は0.3～0.4mを測る。

＜13層＞淡灰色を呈する砂質土層である。上面の標高は0.7m、層厚は0.1～0.15mを測る。

＜14層＞灰色粘質土層である。上面の標高は0.55m、層厚は0.1mを測る。

＜15層＞明灰色粘質土層である。上面の標高は0.4m、層厚は0.1mを測る。

＜16層＞黒灰色粘質土層である。上面の標高は0.25m、層厚は0.2mを測る。

＜17層＞暗灰色粘質土層である。上面の標高0.05m、層厚は0.1mを測る。

以上の＜14層＞～＜15層＞、＜16層＞と＜17層＞は漸移的な差異をもって分層している。

＜18層＞暗褐色粘質土層である。上面の標高は－0.1m、最深部で標高－0.4mまで堆積を確認した。

本調査地点では＜11層＞以下の各土層から遺物の出土は確認されておらず、時期としては弥生時代後期以前とする。

本調査地点の地形を時期を追って記述する。弥生時代後期段階には、本調査地点南半、概ね東端のAYから西端のAZを結ぶライン以南が微高地をなし、北半が北へ傾斜をもつ低位部をなしている。微高地では＜13層＞以下

が粘土～粘質土の互層をなし、層厚10～15cmで堆積するのに対し、＜12層＞は砂質土が40cm以上の厚さを有することから、環境の変化が窺われる。微高地の形成は弥生時代後期までに進んだものである。繰り返しになるが、本調査地点の大半は後世の遺構等により大きく攪乱を受けており、＜12層＞は少なくとも標高1.1m以上に本来のレベルが想定される。

一方、低位部については＜11層＞上面の標高は0.1m以下を測り、微高地との比高差は１m以上である。この比高差は、低位部に＜10層＞～＜８層＞が古墳時代初頭までに堆積し、次第に縮まったことが窺える。堆積状況からは＜10層＞以下で砂の堆積が特徴的であり流水を伴う状況を示すのに対し、＜９層＞には有機質を多く含むことから湿地環境への変化が看取される。低位部と微高地との比高差が解消されるのは＜７層＞段階であり、さらに＜６層＞堆積時には、微高地部の削平も伴う改変が認められ、本調査地点はほぼ平坦化したことがわかる。その時期は中世に求められる。これにより、古墳時代～古代の土層は本地点では欠落することとなる。

土地利用の点では、遺構の分布から、弥生時代後期には南半の微高地上に居住域が展開し、低位部との境界に溝、土器集中、そして低位部に土坑が位置する。この時期北半の遺構は希薄であり、活動には適さない環境と推定される。中世前半の居住域も、井戸の分布から調査地点南に想定され、この時期、鹿田キャンパス全域に広がる屋敷地の範囲に、本地点は含まれない。中世前半の本地点北半は耕作地として利用された可能性がある。中世後半になると１基ではあるが、調査地点北部に井戸が検出されており、これを皮切りにその後近世にはいると本地点全域が居住域へと変化したことが認められる。その利用は庭園遺構が確認された近代においても認められ、岡山医科大学移設に際する工事まで継続する。

第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

本時期に属する遺構には井戸３基、土坑６基、溝５条および土器集中が挙げられる（図７）。地形としては構内座標AZライン付近を境にして北側は低位部、南側は微高地にあたっており、微高地で井戸・土坑・溝２条を、ま

土器集中１（西から）

土器集中２（東から）

土器集中３（北から）

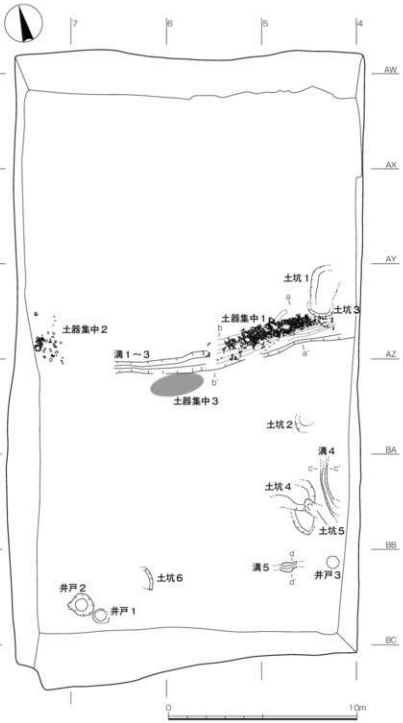


図７　弥生時代～古墳時代遺構全体図（縮尺1/200）

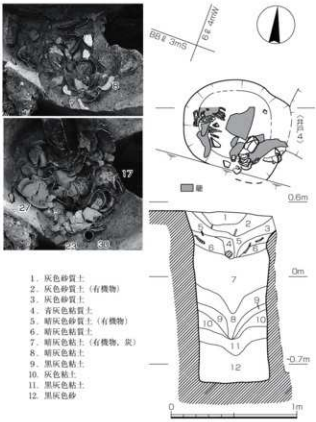


図8　井戸1（縮尺1/30）

た地形の境界付近で溝3条と土器集中を、さらに低位部で土坑2基を検出した。

1．井戸

井戸1（図8～11　図版2）

調査区南端、BB06区に位置する。上面では径0.8mの円形、底面では径0.58mの円形を呈する。検出面の標高0.52mを測り、検出面からの深さは1.3mを測る。東側を井戸4に切られ、2カ所にマツ杭が打ち込まれており、埋土にその影響が認められた。

埋土は12層に分けた。1～3層は灰色を主とする砂質土、4層は青灰色粘質土である。5層は暗灰色砂質土、6層は同色で粘質である。7層は有機質・炭化物を含む暗灰色粘土層、8～11層は暗灰色を主体とする粘土、最下層の12層は黒灰色砂層である。11・12層は使用時の堆積層、8～10層はブロックを多く含む粘土で埋め土と考えられる。7層以上も埋め土であるが、7層上面および6層上面に籠状に編まれた有機物が確認され、その上下である5・6層から多量の土器が出土している。7層まで埋め戻した段階での祭祀行為が窺われる。本遺構の上位は削

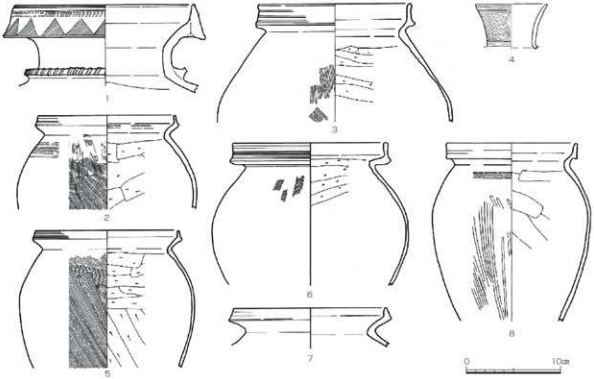
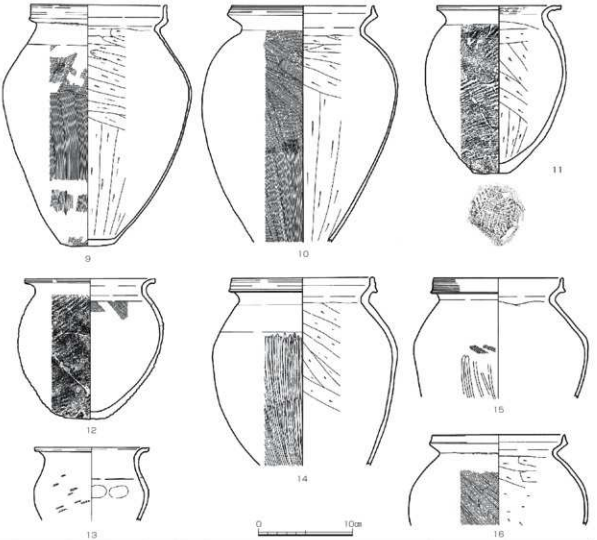
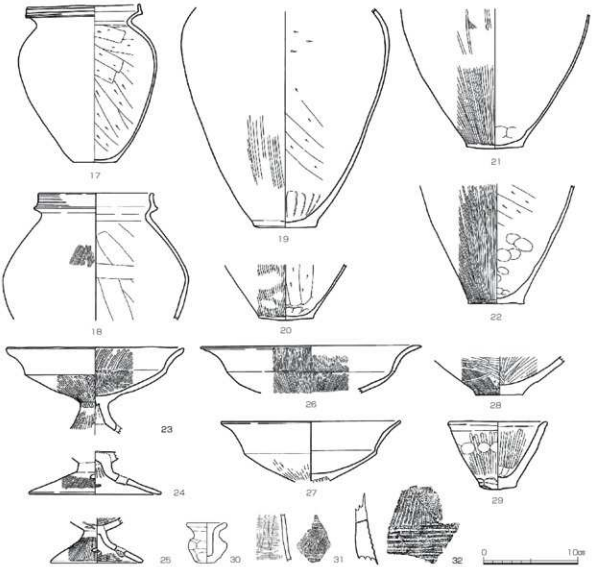


図9　井戸1出土遺物1（縮尺1/4）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	19.0	－	－	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ，口縁部：3条の沈線・半裁竹管文・刺突文・櫛面文，頸部に貼付突帯文に刻み目	淡橙	微砂 2～5mm大の礫を含む
2	弥生土器 壺	14.3	－	－	1/5	内：ナデ・筋ケズリ，外：ハケ目，口縁部淡色の凹線，煤，内外面磨滅	内：淡橙白 外：橙	微砂
3	弥生土器 壺	16.0	－	－	3/4	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ・縦ハケ目・斜めハケ目，口縁部：3条の凹線，黒斑	内：淡橙・淡橙灰 外：淡橙	微砂
4	弥生土器 壺	7.0	－	－	1/1	内：ナデ，外：ミガキ，口縁部：3条の凹線	明橙	微砂
5	弥生土器 甕	15.0	－	－	1/3	内：筋ケズリ・ナデ，外：ナデ・横ハケ目・斜めハケ目，口縁部：5条の沈線	内：淡橙 外：淡黄灰・淡橙	微砂
6	弥生土器 甕	16.2	－	－	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：縦ハケ目，口縁部1条の凹線・4条の沈線，煤，内外面磨滅	淡橙	微砂
7	弥生土器 甕	16.1	－	－	3/4	内：ナデ，口縁部2・3条の凹線，内外面磨滅，剥落	淡橙	微砂 白色粒 黒色粒
8	弥生土器 甕	13.7	－	－	1/4	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ・ミガキ・横ハケ目，煤，内外面磨滅	明橙	微砂
9	弥生土器 甕	14.4	5.5	25.5	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ・ハケ目，煤，内外面磨滅	内：橙 外：淡黄橙	微砂
10	弥生土器 甕	15.0	－	－	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：ミガキ・ナデ，口縁部：2条の凹線，煤，内外面磨滅	淡橙	微砂
11	弥生土器 甕	13.1	3.9	17.7	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ・平行タタキ，外底：格子目タタキ	淡橙・淡黄灰	微砂
12	弥生土器 甕	13.8	5.3	14.8	口3/4 底1/1	内：ナデ・斜めハケ目，外：ナデ・平行タタキ，外底：格子目タタキ	淡黄橙	微砂
13	弥生土器 甕	12.0	－	－	1/4	内：ナデ・オサエ，外：ナデ・平行タタキ，口縁部：1条の沈線，煤	淡橙	微砂
14	弥生土器 甕	15.0	－	－	1/1	内：ナデ・筋ケズリ，外：縦ハケ目・斜めハケ目・ナデ，口縁部：3条の凹線，外面煤，圧痕	淡橙	微砂
15	弥生土器 甕	13.6	－	－	1/2	内：ナデ，筋ケズリ外：ナデ・斜めハケ目・ミガキ，口縁部：6条沈線，煤，圧痕，内外面磨滅	淡橙	微砂
16	弥生土器 甕	14.0	－	－	1/4	内：筋ケズリ・ナデ，外：ナデ・斜めハケ目，内外面煤	淡橙	微砂

図10 井戸１出土遺物２（縮尺1/4）



番号	器　種	口径（cm）	底径(cm)	器高(cm)	残　存	特　徴	色　調	胎　土
17	弥生土器　甕	12.0	4.3	16.7	3/4	内：ナデ・筋ケズリ，外：ナデ，口縁部：3条沈線，圧痕	淡黄灰	微砂
18	弥生土器　甕	12.0	－	－	4/5	内：ナデ・筋ケズリ，外：縦ハケ目・ナデ，煤，内外面磨滅	橙	微砂
19	弥生土器　甕	－	6.6	－	1/1	内：筋ケズリ，内底：ナデ，外：ミガキ，黒斑，内外面磨滅，煤付着	内：黒(煤)　外：淡黄～淡橙	微砂　白色粒　2mm大の砂礫
20	弥生土器　甕	－	5.8	－	1/1	内：筋ケズリ，内底：オサエ，外・外底：筋ミガキ，内外面煤	内：鐵い赤褐　外：淡橙	微砂
21	弥生土器　甕	－	5.9	－	1/1	内：筋ケズリ・オサエ，内底：オサエ，外：ハケ目・ミガキ，内外面煤，外面磨滅	内：暗灰褐　外：暗褐	微砂
22	弥生土器　甕	－	5.9	－	3/4	内底：オサエ，外：ハケ目・ミガキ，煤，内外面磨滅	内：淡灰褐　外：淡橙	微砂
23	弥生土器　高杯	18.6	－	－	1/2	内外：ミガキ，透かし孔2カ所残存，外面磨滅	内：明橙　外：橙	微砂
24	弥生土器　高杯	－	13.9	－		内：ナデ，外：ハケ目，脚内部：絞り痕，円孔4カ所（径1.1cm），外面磨滅	淡橙	微砂
25	弥生土器　高杯	－	9.9	－	1/1	杯内外：ミガキ，脚内：ハケ目・ナデ，脚外：ミガキ，円形透かし孔4カ所（径1.3cm）	浅黄橙	微砂
26	弥生土器　高杯	23.0	－	－	1/4	内外：ミガキ・ナデ	淡橙	水漬粘土
27	弥生土器　高杯	18.9×18.8	－	－	1/1	外：筋ミガキ，内外面磨滅	明橙	微砂
28	弥生土器　鉢	－	4.8	－	1/3	内：筋ミガキ，外：オサエ，斜めハケ目・筋ミガキ，一部磨滅	明橙	細かい　水漬粘土
29	弥生土器　小型鉢	10.2	3.7	7.2	口1/4 底1/2	内：ミガキ・ナデ，内外底：オサエ，外：ミガキ・オサエ・ナデ，外底に幾の痕跡	淡橙灰	微砂
30	弥生土器　手づくね土器	4.0	2.2×2.5	4.2	口1/2 底1/1	内：ナデ，外：ナデ・オサエ	内：暗灰褐　外：暗灰	微砂
31	弥生土器　不明	－	－	－		内：横ハケ後ミガキ，外：5条の沈線・3本の沈線，鼓条の沈線，全施した装形文が連続して施文	内：淡黄橙　外：淡橙	微砂
32	弥生土器　器台	－	－	－		内：ナデ，外：ナデ，7条の筋描き文，長方形の透かし孔1カ所	黄褐	微砂　白色粒

図11　井戸１出土遺物３（縮尺1/4）

平をうけており、本来の上面は標高1.0m付近に想定される。5層より上位においても、井戸を埋めていく途中で複数回の祭祀行為が予想される。

遺物はコンテナ（28㌢／箱）3箱が出土した。壺4点、甕18点、高杯5点のほか、鉢、手づくね土器、器台が挙げられる。完形の甕は3点、完形に近く復元できたものも含めると8点に上り、量の多さが目立つ。これらの多くは5層と6層に含まれており、6層上面と7層上面にそれぞれ籠状の有機物が確認された。状況を復元すると、7層まで埋め戻した時点で中央に籠が置かれた後6層の堆積をはさみ、多量の土器を並べ置かれる。写真で状況がわかる限り、高杯（図11－23）・手づくね土器（同－30）、甕（同－17）等はほぼ正位置である。その後別の籠が置かれ、その上にも土器が重ねられている。籠はいずれも大変細かい茎状あるいは葉により構成されていたが、形を留めたまま取り上げることはできなかった。調査時の所見では編み方に少なくとも2種が観察された。籠であれば底面と側縁といった差異によるものと考えられる。そのほか甕（図9－6）内土壌より小型種子3科3種を描出している（第4章2参照）。また本井戸からモモ6点が出土した。

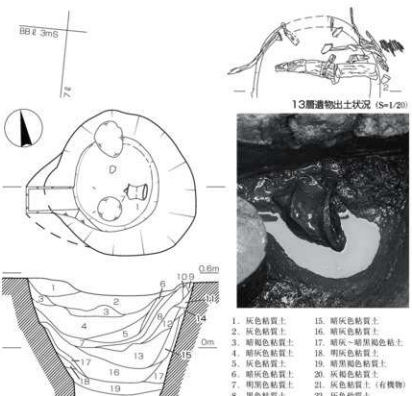
本遺構の時期は弥生時代後期である。

井戸2（図12・13　図版3）

調査区南端、BB07区に位置する。井戸1の西に隣接する。上面では1.35×1.18mのいびつな楕円形、下面では径0.65mの円形を呈する。検出面は標高0.55m、底面は標高－0.8mを測り、検出面からの深さは1.25mである。底面から0.5mはまっすぐ立ち上がり、それより上位はY字形に広がる。平面形で西側が歪に広がる点、断面形状においても西側の傾斜が緩やかな点、さらに18層以下と以上での埋土の特徴を考え、18層の堆積後に掘り直されている可能性がある。

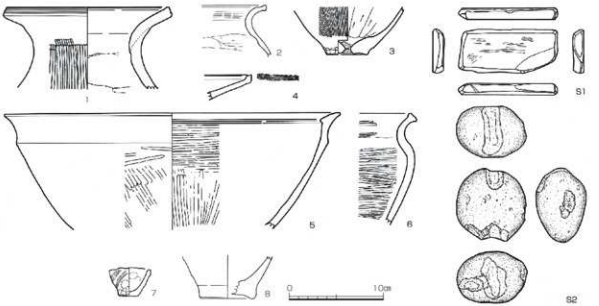
埋土は22層に分けた。1～17層と18層以下に大別される。後者のうち最下層22層は使用時の堆積、18～21層は埋め土と考えられる。出土遺物は少なく、21層から壺の頸部（図13－1）とミニチュア土器（同－7）が出土した。前述したように1～17層は掘り直し後の堆積と考えられる。17層の堆積状況から井戸枠材が粘土化した可能性を考えている。16層は使用時、15層より上位は埋め戻しによる堆積層であろう。図12右上に示したように、13層中に木材が多く含まれており、一部に加工痕が認められ、これらは枠材の一部と考えられる。

遺物はコンテナ（28㌢）1／



13層遺物出土状況（S=1/20）

図12　井戸2（縮尺1/30）



番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	17.1	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・櫛ハケ目、口縁部：2条の凹線	内：淡黄橙　外：淡黄白	微砂
3	弥生土器 甕	－	43×42	－	1/1	内：篦ケズリ、外：ナデ・オサエ・櫛ハケ目、内外面煤、底部6mmの穿孔	内：淡橙灰　外：暗黄灰	微砂　白色粒
2	弥生土器 甕	－	－	－		内：ナデ・工具ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・櫛ハケ目、外面煤、内外面磨滅	淡黄灰	微砂　白色粒
4	弥生土器 高杯	－	－	－		内：ナデ、外：ナデ・ミガキ　口縁部：鋸歯文	内：淡橙　外：明橙	微砂
5	弥生土器 鉢	34.4	－	－	1/4	内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ミガキ、外面磨滅	内：淡黄橙　外：淡橙・淡黄橙	微砂　白色礫　白色粒
6	弥生土器 鉢	－	－	－		内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ハケ目・ミガキ	内：黄灰　外：淡黄灰	細砂　白色粒
7	弥生土器 手づくね土器	3.9	2×1.9	1.7	口（一）底1/1	内外：ナデ・オサエ、外底：オサエ	淡黄灰	微砂　白色粒　黒色粒
8	弥生土器？不明底部	5.6			1/3	外：ナデ、自然釉？内外面の調整不明	暗黒褐	微砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S1	砥石	10.3	4.6	1.2	109.8	粘板岩ホルンフェルス	完存、砥面2面
S2	石錘	7.4	7.4	5.3	377.6	安山岩	完存、擦痕5ヶ所

図13　井戸２出土遺物（縮尺1/4）

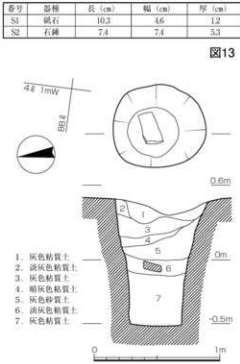


図14　井戸３（縮尺1/30）

３箱が出土した。壺・甕・高杯等がみられるがそれほど多くない。本遺構の時期は弥生時代後期である。

井戸３（図14　図版４）

調査区北東、BB04区に位置する。上面では南北0.75×東西0.65ｍの楕円形、底面では径0.4ｍの円形を呈する。検出面の標高0.5ｍ、底面の標高－0.5ｍで、検出面からの深さ1.0ｍを測る。＜12層＞上面の遺構であるが、後世に50cm程度の削平を受ける。底面から上面へ緩やかに広がる断面形を呈する。

埋土は７層に分けた。灰色を主体とする粘質土層が中心で、３層・５層は砂質である。最下層７層は使用時の堆積層であろう。６層以上は埋め戻しと考えられ、６層中で礫１点が出土した。

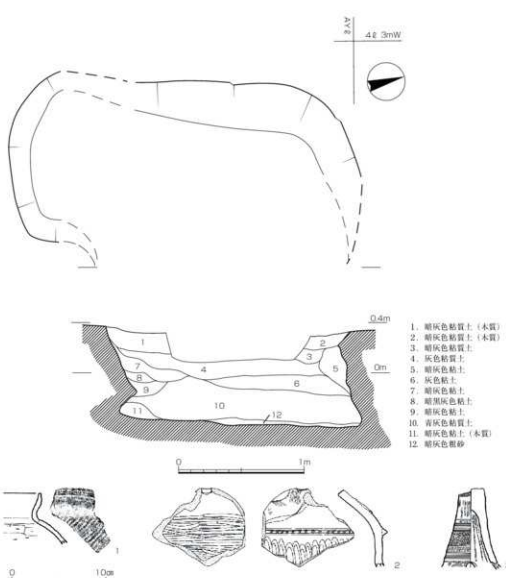
遺物の出土は12号ポリ袋５袋と少ない。甕、壺、高杯の小片が見られる。本遺構の時期は弥生時代後期後半である。

2．土坑

土坑は６基を確認した。北側の低位部で１基（土坑１）、南側の微高地部で５基（土坑２～６）を検出した。後世の遺構が重複しているため、全形が判明するものは少ない。前述の井戸が本調査区の南端に位置することから、本調査区南半から南に向けて微高地が広がり、そこに居住域が展開するものと想定される。土坑１と３は重複しており、低位部にかかる。その他の土坑はいずれも微高地部に位置するもので、土坑２・４・５は破壊の程度が大きく全形が不明であるものの、廃棄土坑といった性格が考えられる。

土坑１（図15　図版５ａ）

調査区中央東端、AY04区に位置する。上面では南北2.6m×東西1.6mの隅丸長方形を呈する。検出面の標高0.36



番号	器種	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　甕	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・平行タタキ、口縁部：3条の凹線	淡橙	微砂
2	弥生土器　壺	内：ナデ・ミガキ、外：ナデ・ミガキ、肩み目突帯、粘土帯が剥離している可能性（剥離部分はハケ目）、円孔の一部残存1カ所	内：淡黄褐　外：淡橙白	微砂
3	弥生土器　高杯	内：絞り痕、外：縦ハケ目・ミガキ、上側に6条の凹線、下側に7条の凹線、円形透かし孔3カ所残存（推計4カ所）、外面磨滅	内：淡橙褐　外：淡橙白	微砂　白色粒

図15　土坑１・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

土坑2・4・5完掘（南から）

m、底面の標高は－0.45mを測り、検出面からの深さ0.8mである。上面南端に土坑7・井戸13が重複する。検出面は＜10層＞中にあたる。

断面形は底面から標高０m付近まですぼまり、そこから上位へ広がるいびつな台形を呈する。上面が削平されているため、本来の形状は不明であるが、底面は平坦で袋状に底部が張り出す形状が想定される。

埋土は12層に分けた。最下層12層は暗灰色粗砂で使用時の堆積と考えられる。１～11層は暗灰色粘土を主体とする。３・５・９層等ブロック状に堆積するものもあり、埋め戻しの単位と考えられる。

遺物は12号ポリ袋10袋が出土した。壺・甕・鉢を含む弥生時代中期～後期の土器片がみられる。図15－１は甕、同－２は刻目突帯を巡らせる装飾ある壺である。

本土坑の時期は弥生時代後期である。

土坑２（図16・17　図版５ｂ）

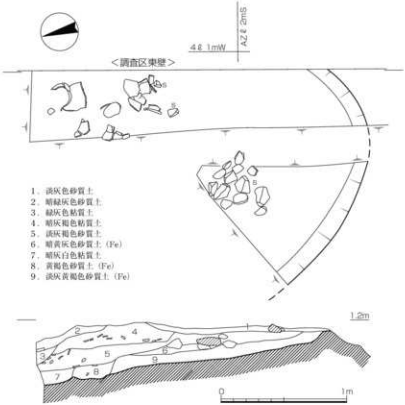
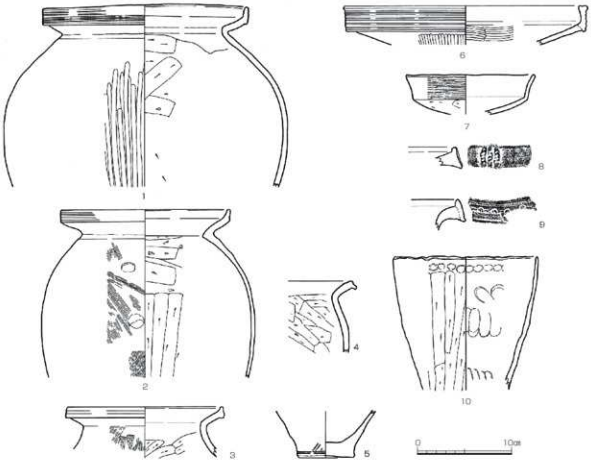


図16　土坑２（縮尺1/30）

調査区中央西寄り、AZ04区に位置する。土坑の北側・西側は攪乱および側溝掘削により失われ、全形は不明であるが、残存部分から長径１m程度の楕円形状が想定される。検出面の標高1.17m、底面の標高0.67mで、最深部で深さ0.4mを測る。断面形では緩やかな傾斜面を呈しており、底面も緩斜面をなす。埋土は９層に分けた。１・２層は灰色を基調とする砂質土、３・４層は粘質土、５・６層が砂質土、７層が粘質土と、砂質と粘質土層が互層となって堆積する。このうち４～６層中に土器片および10～15cm大の礫が多数含まれる。



番号	器種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調
1	弥生土器　甕	20.5	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ，外：ナデ・ミガキ，口縁部：7条の沈線，内外面磨滅	淡橙
2	弥生土器　甕	17.7	－	－	1/2	内：ナデ，篦ケズリ，外：ナデ・ハケ目・オサエ，口縁部：4条の沈線，外面磨滅	内：淡黄白・淡橙　外：淡黄白
3	弥生土器　甕	16.4	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ・擬ハケ目，内外面磨滅，口縁部：1条の凹線	淡橙
4	弥生土器　甕	－	－	－		内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ・ハケ目・ミガキ，種子圧痕	内：褐・淡橙褐　外：暗黄褐
5	弥生土器　甕	－	5.8	－	1/1	内：オサエ，外：オサエ・タタキ，内外面磨滅	内：暗橙　外：淡灰褐
6	弥生土器　高杯	24.0	－	－	1/6	内・外：ナデ・ミガキ，口縁部：5条の凹線	内：淡橙白　外：淡橙・淡橙白
7	弥生土器　高杯	13.4	－	－	1/6	外：ミガキ・篦ミガキ，内外面磨滅，黒斑	内：明橙　外：明橙・淡橙
8	弥生土器　器台形土器	－	－	－		内外：ナデ，口縁帯：剥面文・棒状浮文3本1単位	内：橙　外：淡橙白
9	弥生土器　器台形土器	－	－	－		内外：ナデ，口縁部：7条の凹線・竹管文	淡橙白
10	弥生土器　製塩土器	－	－	－	1/7	内：オサエ・ナデ，外：オサエ・篦ケズリ	内：灰褐・暗灰褐　外：暗灰褐

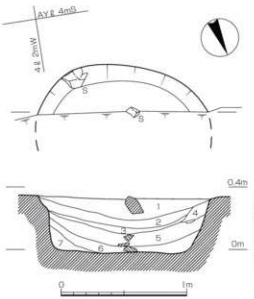
図17　土坑２出土遺物（縮尺1/4）

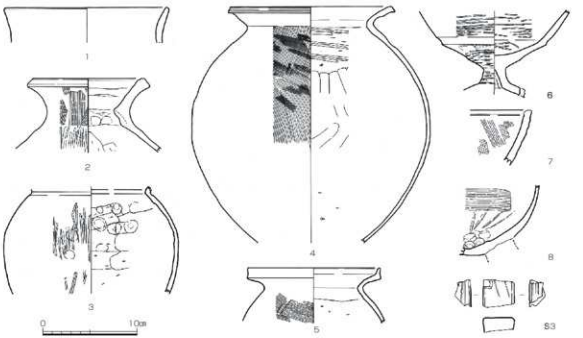
遺物はコンテナ（28㌢）１／２箱が出土した。弥生時代中期の土器が僅かに含まれ、大半が弥生時代後期前半～中頃のものである。本遺構を切って上位に位置する近代の池状遺構水路等の理土には、同時期の土器が大量に含まれており、それらは本来、本遺構に属する可能性が高いと考えられる。図17に10点を図化した。甕・高杯は弥生時代後期前半～後半のものがあり、製塩土器（図17－10）は後期前半のものである。

本遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

土坑３（図18　図版５ｃ）

調査区中央西側、AY04区に位置する。土坑１の南端部に重複する。長径1.4mの楕円形状と想定され、北半は





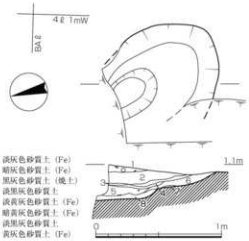
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	16.9	－	－	1/2	内外：ナデ	内：淡黄白 外：淡橙・淡黄白	細砂 5mm大の白色礫を含む
2	弥生土器 壺	11.8	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・笠ケズリ、外：ナデ・ハケ目・ミガキ	内：淡橙 外：にぶい黄橙	微砂 白色粒 2・3mm大の白色礫
3	弥生土器 甕	－	－	－		内：笠ケズリ・オサエ、外：ミガキ・オサエ、煤	内：暗褐 外：明橙・淡黄灰	細砂
4	弥生土器 甕	17.0		－	1/1	内：ナデ・笠ケズリ・ミガキ、外：横ナデ・斜のハケ目(格子状)、煤	黄灰	微砂
5	弥生土器 甕	－	－	－		内：ナデ・笠ケズリ、外：ナデ、ハケ目	淡黄橙	微砂
6	弥生土器 高杯	－	－	－		口内：ミガキ、脚内：絞り痕、外：ミガキ、円形透かし孔1ヵ所、内外面煤域	淡橙	微砂
7	弥生土器 鉢	－	－	－		内外：ハケ目・ナデ、5条の凹線	淡黄	微砂 白色粒
8	弥生土器 台付鉢	－	－	－		内：ハケ目・オサエ、外：笠ケズリ、脚(台)部調整	浅黄	微砂

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S3	砥石	3.0	3.3	1.6	24.5	粘板岩	砥面3面

図18　土坑３・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

土坑４（図19・20　図版６）

調査区南東、BA04区に位置する。上面で平面長楕円形の南東半が残る。残存部の長径1.0m、短径0.8mである。検出面の標高1.1m、底面の標高0.8mで検出面からの深さ0.3mを測る。北半部は近代の溝に切られている。断面形は標高0.9m付近で段を有する。埋土は８層に分けた。いずれも砂質土層であり、そのうち黒灰色を呈する３層には焼土を含む。遺物は非常に多く、コンテナ（28㌢）１箱が出土した。弥生土器壺・甕・高杯・鉢があり、甕は完形に近く復元できるものが３個体（図19－５～７）あり、口縁部片の大半は弥生時代後期後半のものである。ミニチュア土器（図20－22・23）、製塩土器（同－24）のほか、突帯文土器深鉢口縁部片１点が含まれる。同－Ｔ１～Ｔ３は粘土紐を緩やか



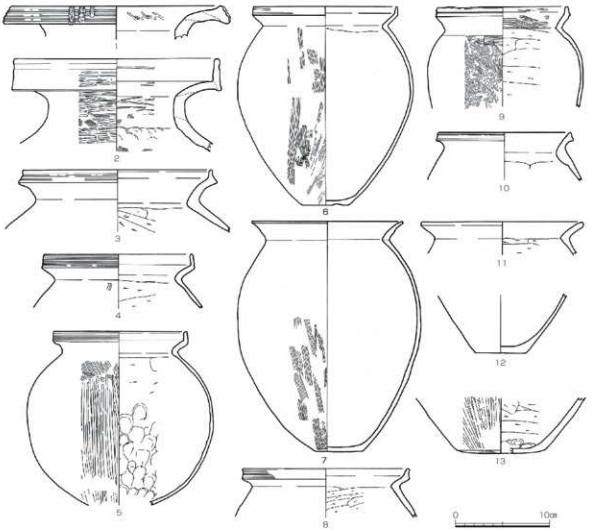
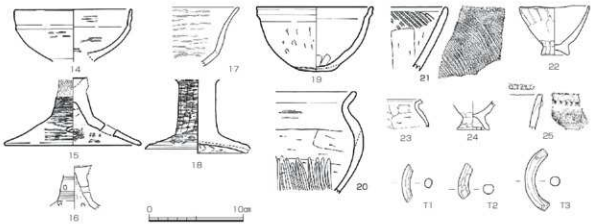


図19　土坑４・出土遺物１（縮尺1/30・1/4）



番号	器種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	22.4	－	－	1/3	内：ナデ・ミガキ，外：ナデ，口縁帯：3条の凹線・棒状浮文3か所残存	淡橙	微砂
2	弥生土器 壺	－	－	－		内：ミガキ・ハケ目・オサエ，外：ナデ・ミガキ・ハケ目	内：明橙　外：黄橙	細砂　2～6mm大の白色礫
3	弥生土器 甕	20.0	－	－	1/6	内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ，口縁部：2条の凹線残存	淡橙	細砂　2～4mm大の礫を含む
4	弥生土器 甕	－	－	－		内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ・ハケ目，口縁部：6条の沈線	淡橙	微砂　白色粒
5	弥生土器 甕	13.9	－	－	3/4	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ，外：ハケ目・ミガキ，口縁部：6条の沈線	淡橙	微砂　白色粒
6	弥生土器 甕	15.0	5.2	21	口・胴1/3 底1/1	外底：オサエ，外：ハケ目，口縁部：2条凹線（磨滅）内外面磨滅	明橙	微砂
7	弥生土器 甕	16.0	4.2	24.3	口1/4 底1/3	内：ナデ，外：ナデ・ハケ目，煤，黒斑，内外面磨滅	明橙	微砂
8	弥生土器 甕	17.5	－	－	1/3	内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ，口縁部：5条の沈線，外面磨滅	淡橙	微砂
9	弥生土器 甕	13.8	－	－	1/2	口内：横ナデ・ハケ目，体内：篦ケズリ，口外：4条の沈線，体外：ハケ目	淡黄橙	微砂
10	弥生土器 甕	14.0	－	－	1/3	内：篦ケズリ，内外面磨滅	明橙	細砂　白色粒
11	弥生土器 甕	16.9	－	－	1/4	内：ナデ・篦ケズリ，外：ナデ	淡橙	微砂
12	弥生土器 甕		5.4×5	－	1/1	内外面磨滅，煤付着	内：淡黄橙　外：淡黄橙・淡橙	細砂　白色礫　2mm大の礫
13	弥生土器 甕か 壺	9.6	－	－	1/3	内：ナデ・篦ケズリ，内底：オサエ，外：ミガキ，外底：ミガキ，内外面磨滅	内：淡橙褐　外：淡黄褐	細砂　白色粒
14	弥生土器 高杯	12.2		－	1/3	内外：ミガキ，内外面磨滅	明橙	微砂　水漏土
15	弥生土器 高杯	－	13.2	－	1/2	脚内：ナデ・ハケ目，脚外：ハケ目，円形の透かし孔4か所，内外面磨滅，煤	内：淡橙　外：明橙	微砂　白色粒
16	弥生土器 高杯	－	－	－		脚内：しぼり，内：ミガキ，外：ナデ，1段目3方向円形透かし，2段目4方向円形透かし	内：淡橙　外：淡橙	細砂　白色粒
17	弥生土器 高杯	－	－	－		内：ミガキ，外：ハケ目	内：明橙　外：橙	微砂　赤色粒
18	弥生土器 高杯	－	－	－		脚内：篦ケズリ，脚外：ナデ・ミガキ・面取り，黒斑	内：灰白　外：淡黄橙	細砂　白色粒
19	弥生土器 鉢	12.2	－	6.9	1/4	内：ナデ・オサエ，外：ナデ，内外面磨滅	内：黒褐　外：淡黄橙	微砂　白色礫　白色粒
20	弥生土器 鉢	－	－	－		口内：ナデ，内：篦ケズリ・ミガキ，黒斑，外面磨滅	内：淡橙　外：淡黄灰	細砂　白色粒
21	弥生土器 鉢	－	－	－		内：ナデ・ハケ目・篦ケズリ，外：ナデ・ハケ目	内：橙白　外：橙褐	細砂
22	弥生土器 ミニチュア土器	7.2	2.9×2.7	5.2	口3/4底1/1	内：ナデ，外：ナデ・オサエ，外底オサエ，黒斑，内外面磨滅	明橙	微砂　白色粒
23	弥生土器 ミニチュア土器	－	－	－		内：ナデ・オサエ・篦ケズリ，外：ナデ・オサエ	淡黄橙	細砂　白色粒
24	弥生土器 製塩土器	－	3.3×3.8	－	1/2	外：オサエ，外底：ナデ・オサエ，内外面磨滅	内：橙　外：明橙	微砂
25	突帯文土器 深鉢	－	－	－		波状口縁，刻み目突帯文，口縁：上部に刻突文	淡橙	細砂　白色粒

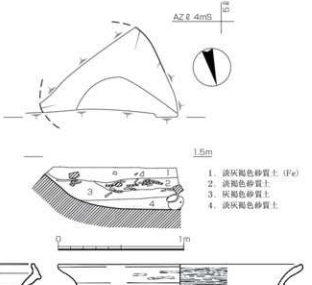
番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	特徴	色調	胎土
T1	弥生土器 祀手か？	4.0	0.9	0.9	ナデ	明橙	微砂
T2	弥生土器 祀手か？	3.7	1.1	1.0	ナデ	明橙	微砂
T3	弥生土器 祀手か？	6.5	1.1	0.9	ナデ	明橙	微砂

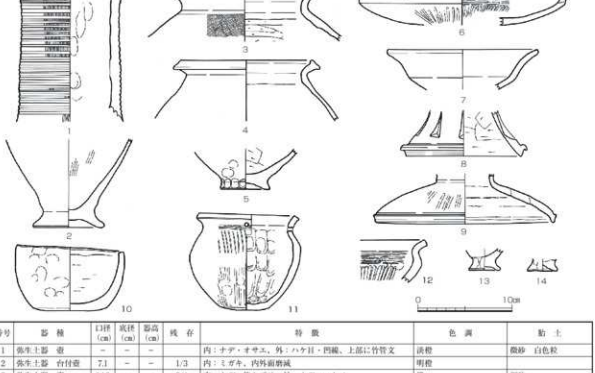
図20　土坑４出土遺物２（縮尺1/4）

にカーブさせ表面調整し、焼成したものであり、３点同一個体の可能性がある。細い把手状あるいは何らかの形象土製品と考えられるが全形が不明である。そのほかに古墳時代初頭の土器片が少数確認された。本遺構の時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭である。

土坑５（図21　図版７）

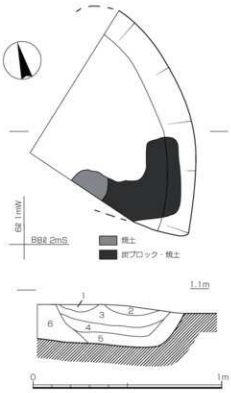
調査区南東、BA04区に位置する。本遺構は南端と北側を後世の溝によって削平されて一部が残るのみで全形は不明である。検出面の上面では長径1.0m、短径0.6mの不整形をなし、底面は平坦な傾





番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　壺	－	－	－	－	内：ナデ・オサエ、外：ハケ目・凹線、上部に竹管文	淡橙	微砂　白色粒
2	弥生土器　台付壺	7.1	－	－	1/3	内：ミガキ、内外面磨滅	明橙	
3	弥生土器　甕	14.9	－	－	3/4	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケメ	橙	細砂
4	弥生土器　甕	14.0	－	－	1/3	内：篦ケズリ、内外面磨滅	橙	微砂　白色粒
5	弥生土器　甕	－	5.8	－	1/2	内：篦ケズリ、外：オサエ、外面磨滅	内：明橙、外：明橙・褐	微砂
6	弥生土器　高杯	26.0	－	－	1/6	内外：ナデ・ミガキ、黒斑	内：淡橙　外：淡橙・橙	微砂
7	弥生土器　高杯	15.4	－	－	1/3	内外面磨滅、黒斑	内：橙　外：淡橙・橙	微砂
8	弥生土器　高杯	12.2	－	－	1/6	内：篦ケズリ、外：ナデ、三角形の透かし孔（未貫通・3カ所残存）、外面磨滅	浅黄橙	微砂　白色粒　黒色粒
9	弥生土器　直口壺？	－	－	－	1/3	内：ナデ、外：ミガキ、黒斑、直口壺と考えると縁は接合部にあたる	橙	微砂　白色粒
10	弥生土器　鉢	11.2	7.7	7.0	1/3	内：オサエ・ナデかケズリ、外：オサエ・ナデ、外面磨滅	橙	細砂
11	弥生土器　鉢	10.0	5.0	10.3	口3/4 底1/1	内：ナデ・オサエ、外：ナデ・ミガキ、外面に筋状の痕跡、内外面磨滅、底部に1対の穿孔	橙	微砂　白色粒
12	弥生土器　鉢	－	－	－	－	内：ナデ・オサエ、ミガキ（太・細）、外：ナデ・篦ケズリ	橙	微砂
13	弥生土器　製塩土器	－	－	－	1/1	外：オサエ、磨滅	内：黄白　外：橙	微砂　6mm大の赤色粒
14	弥生土器　製塩土器	－	3.1	－	1/2	内外：オサエ	内：橙　外：淡橙	細砂　白色粒

図21　土坑５・出土遺物（縮尺1/30・1/4）



1．灰色砂質土
2．灰色砂質土
3．灰色砂質土（Fe、炭化物）
4．灰色砂質土
5．青灰色砂質土
6．明灰色砂質土（Fe）

図22　土坑６（縮尺1/20）

向がみられる。検出面の標高1.4m、底面の標高1.1mで、検出面からの深さ0.3mである。埋土は４層に分けた。いずれも砂質であり、遺物を多量に含む。

遺物はコンテナ（28㌘）１箱が出土した。弥生時代中期末～後期中頃の土器が主体で、壺・甕・高杯・鉢、製塩土器が認められる。中心となるのは後期前半～中頃とみられる。本土坑の時期は弥生時代後期中頃と考えられる。

土坑６（図22　図版８）

調査区南部、BB06区に位置する。前半調査区の５区南西角で確認され、南・西側はコンクリート基礎下にあたり確認できなかった。検出面の上面で1.3m×1.3mの不整形をなし、本来は円形あるいは楕円形状の遺構の北東１／４部分とみられる。検出面の標高1.0m、底面の標高0.7m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は６層に分けた。

検出時には５㎜～１㎝大の焼土ブロック、３㎜大の炭化物粒を含む0.1×0.3mの範囲を囲むように、焼土や炭化物が散布していた。堆積状況を確認したところ、上面の焼土・炭化物は浮いた状態であったため除去し、底面では0.1×0.1mの焼土塊とその周囲で炭化物・焼土ブロックの散布が確認された。確認された範囲の底面に被熱痕跡はなく、焼土塊・炭化物・焼土は別地点から遺棄されたものと考えられる。

出土遺物はみられなかった。本遺構の時期については、検出面から弥生時代後期と考えられる。

３．溝

溝１～３（図７・23・24　図版９ａ）

調査区中央、AZライン付近を東西に走行する３条の溝を検出した。溝１～３は北側の低位部と南側の微高地部との境界を走行するものである。検出面はいずれも＜12層＞にあたり、検出面の標高は0.6m、底面の標高は溝１西端で0.54m、東端で0.39m、溝２西端で0.45m、東端で0.23m、溝３の西端で0.48m、東端で0.3mを測る。溝は

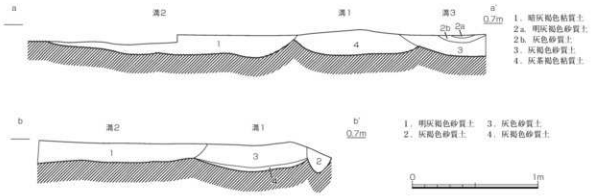
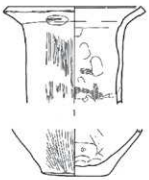


図23　溝１～３断面（縮尺1/30）

重複して走行しており、溝１は６ライン西３ｍ地点から調査区東壁までの長さ12ｍを確認し、溝１を切って走行する溝２・３は５ライン西２ｍ地点から調査区東壁までの間で長さ７ｍほどを確認した。溝１は幅0.6～1.0ｍ、深さ0.15ｍ、溝２は幅0.6ｍ、深さ0.3ｍ、溝３は幅0.7～0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。溝はいずれも西から東へ傾斜を有しており、西側にいくほど上面の削平の程度は著しいと考えられる。

断面形はいずれも浅いＵ字形を呈しており、埋土は灰褐色を基調とした砂質土である。溝１～３の遺物は一括して取り上げ、出土量は少なく、12号ポリ袋１袋であった。弥生時代後期前半の壺・甕・高杯が含まれ、うち壺２点を図化した（図23）。

溝１～３は相次いで同位置を走行したもので、弥生時代後期と考えられる。



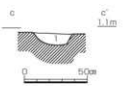
番号	器種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	壺	14.0	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・ハケ目、外：ナデ・オサエ・ミガキ、内外面剥減	浅黄橙	微砂　白色粒
2	壺	－	7.2	－	1/1	内：オサエ・筒ケズリ、外：ミガキ、外底：剥減	内：黒灰　外：灰黄	微砂　白色粒

図24　溝１～３出土遺物（縮尺1/4）

溝４（図25　図版９ｂ）

調査区南東、BA04区に位置する。４ライン西１ｍ付近を南北に走行する溝である。検出面は＜12層＞上面で、標高は1.05ｍを測る。本溝の北側は近代の遺構により削平され、BAライン以北の状況は不明である。南端は緩くカーブしてBBライン北２ｍ付近で調査区東壁へ抜ける。検出できた溝の長さは４ｍ、幅は0.5ｍを測る。底面の標高は北端で0.88ｍ、南端で0.95ｍであり、南から北へ流れる。埋土は暗灰色砂質土の１層である。

出土遺物はわずかで12号ポリ袋１／３袋であった。弥生時代後期土器の小片が含まれる。本溝の時期は弥生時代後期と考えられる。

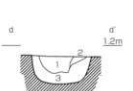


1．暗灰色砂質土（Fe）

図25　溝４断面（縮尺1/30）

溝５（図26　図版９ｃ・ｄ）

調査区南東BB04区に位置する。BBライン南にあたる東西方向の溝である。検出面の標高1.1ｍ、底面の標高0.9ｍを測る。東西両側との後世の遺構により削平され、長さ1.5ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを検出した。検出部分はわずかであるが、形状、埋土から溝と判断した。出土遺物は見られなかったが、検出面から、本溝の時期は弥生時代後期と考えられる。



1．混灰色淡褐色土（炭）
2．混灰色褐色土（炭）
3．混橙色褐色粘質土

図26　溝５断面（縮尺1/30）

４．土器集中

本調査地点では＜12層＞上面で土器が集中的に散布するまとまりを確認した。調査区の中央部に東西に点在する形で３カ所のまとまりを検出し、これらを「土器集中」として以下に報告する。

土器集中１（図26・27　図版10）

AY04～05区に位置する。東西９ｍ、南北２ｍの範囲からコンテナ（28㌢）10箱の遺物・礫が出土した。本調査地点で確認した３カ所の中で最も規模が大きい。前述の溝１～３の上方に重複しており、これらの溝が埋まりやや窪みになったところへ土器・礫を多量に含む灰褐色を主体とする砂質土が堆積した状況である。検出面の標高は西端で0.65ｍ、東端で0.55ｍを測り、東へ傾斜する。これは地形の傾斜、および溝１～３の傾斜に沿っており５ラインの１ｍ西の地点から西へは遺物の密度が減少し、５ライン３ｍ西地点以西には認められない。以西では

上面が削平されたものと考えられる。遺物を多量に含む土層は明灰褐色～暗灰褐色砂質土であり、西方では１層、東端では２～３層に分層できる。これらは<12層>と類似する特徴を有する。

遺物の出土状況では、完形に復元できるものはなく、小破片が主体で、図28－９の鉢の破片が最も大きいものであった。上面の削平を考慮しても、本来、完形のものが集積して廃棄された状況とは考えにくく、周囲から、特に西方から流れ込んだ状況が窺える。

土器は弥生時代後期前半のものが大半を占め、少数の中期の土器も含まれる。壺・甕・鉢・

①北から

②北から

全景　北東から

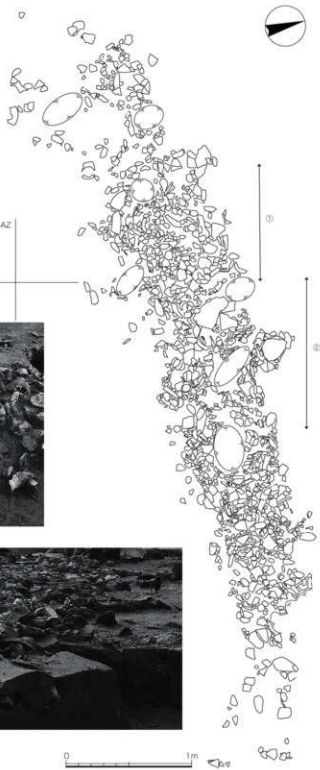
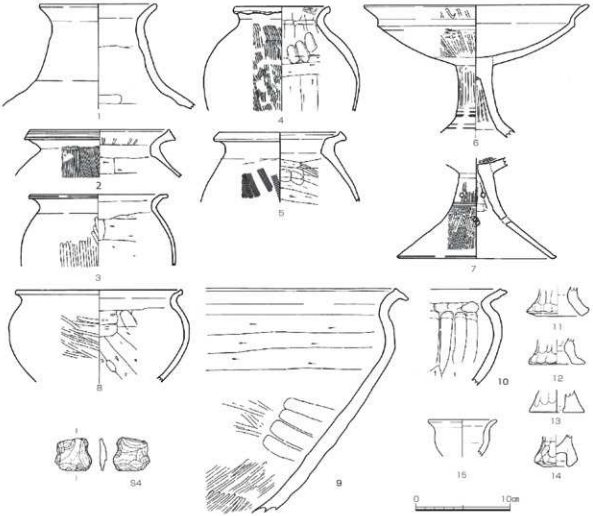


図27　土器集中１出土状況（縮尺1/30）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	12.2	－	－	1/6	内：篦ケズリ、外：ナデ、内外面磨滅	橙	微砂 赤色粒
2	弥生土器 甕	15×14.5	－	－	1/1	内：ナデ・篦ケズリ・工具痕、外：ナデ・ハケ目、口縁部3条の沈線	淡橙	微砂
3	弥生土器 甕	14.3	－	－	1/6	内：ナデ・篦ケズリ、外：ナデ・ミガキ、煤、内外面磨滅	内：淡橙　外：淡橙	微砂 白色粒
4	弥生土器 甕	12.8	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ・工具ナデ?、外：ナデ・ハケ目、煤、内外面磨滅	内：暗灰～灰黄 外：灰黄	微砂
5	弥生土器 甕	8.9	－	－	1/2	内：ナデ・オサエ・ハケ目・篦ケズリ、外：ナデ・オサエ・ハケ目、外面磨滅	純い黄橙	細砂 2mm大の礫
6	弥生土器 高杯	23.6	－	－	1/4	脚内：絞り痕、杯外：オサエ・ハケ目・ミガキ、脚外：ミガキ、脚部に3条の沈線、内外面磨滅	橙	微砂 白色粒 赤色粒
7	弥生土器 高杯	16.1	－	－	1/4	杯内：ミガキ、脚内：オサエ・工具による切れ込み、脚外：ハケ目・ミガキ、脚部中央に3条の沈線、上下段円形透かし孔（各4か所残存）、内外面磨滅	橙	微砂 白色粒 赤色粒
8	弥生土器 鉢	14.4	－	－	1/3	内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデミガキ、煤	内：灰白　外：純い黄橙	細砂
9	弥生土器 鉢	－	－	－		内：ナデ・オサエ・篦ケズリ、外：ナデ・ハケ目、口縁部1条の沈線、黒斑	灰白	細砂 白色粒
10	弥生土器 鉢	－	－	－		内：篦ケズリ、一部ミガキ、全体に磨滅、外：一部ミガキ残るがほぼ磨滅	内：淡橙　外：淡橙	細砂 赤色粒
11	弥生土器 製塩土器	－	5.7	－	1/1	内：ナデ、外：ナデ・オサエ、被熱	内：黒褐　外：暗赤褐	細砂 白色粒
12	弥生土器 製塩土器	－	5.5	－	3/4	内：ナデ・オサエ、外：オサエ、被熱	内：灰褐	細砂 白色粒
13	弥生土器 製塩土器	－	5.1	－	1/3	内：ナデ・オサエ、外：オサエ、被熱	内：暗褐　外：灰白	細砂 2mm大の礫
14	弥生土器 製塩土器	－	4.3×4.1	－	1/1	杯内：ナデ、脚内・外：オサエ、被熱	黒褐	細砂 2・3mm大の礫
15	弥生土器 ミニチュア土器	6.5	－	－	1/4	内：ナデ、外：ナデ・磨滅	淡橙	微砂 白色粒

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	石材	特徴
S4	石錘？	3.3	3.6	0.5	7.2	サヌカイト	縁周部を細かく調整

図28　土器集中１出土遺物（縮尺1/4）

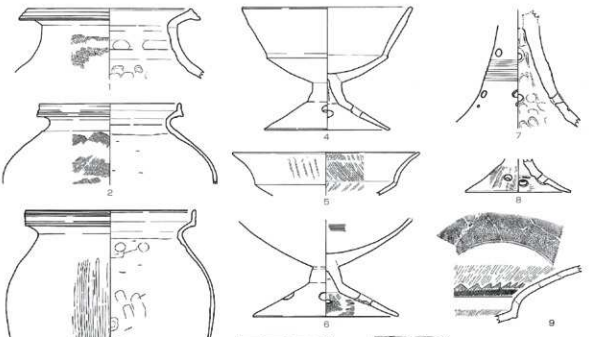
高杯のほか、ミニチュア土器鉢、製塩土器が出土している。土器以外には石器１点と、礫10点余、およびモモ２点が含まれる。礫には被熱痕は認められない。

本遺構の時期は弥生時代後期前半～中頃と考えられる。

土器集中２（図28）

AZ05区に位置する。東西４ｍ、南北1.5ｍの範囲から

土器集中２（北から）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	17.2	－	－	口1/4	内：ナデ・オサエ，外：ハケ目，口縁部：3条の沈線	淡橙	細砂 2～4mm大の白色礫
2	弥生土器 甕	14.9	－	－	1/3	内：ナデ・指ケズリ，外：ナデ・ハケ目，口縁部：2条の凹線	橙	微砂
3	弥生土器 甕	－	4.85	23.9	1/2	内：ナデ・オサエ，外：ナデ・ミガキ，口縁部：7条の沈線	内：淡橙・灰褐 外：淡黄褐	微砂 白色粒
4	弥生土器 高杯	17.8	13.1	13.0	口1/3 底(－)	内外：磨滅，脚内：絞り痕，円形透かし孔(ほぼ完形2ヵ所，欠損1ヵ所・対角に2対)	淡橙	微砂
5	弥生土器 高杯	－	19.9	－	1/3	内外：ミガキ，内外面磨滅	内：橙 外：橙・淺黄橙	水道粘土 微砂
6	弥生土器 高杯	－	15.3	－	1/3	杯内：ハケ目，脚内：ナデ・ハケ目，外面磨滅，円孔4ヵ所	橙	微砂 白色粒
7	弥生土器 高杯	－	－	－		脚内：オサエ・絞り痕，脚部中央に5条の凹線，円形透かし孔：上段3ヵ所残存，1ヵ所は未貫通，中段1ヵ所残存，下段2mm大	内：灰白 外：淡橙	微砂 2～4mm大の白色礫
8	弥生土器 高杯	－	11.0	－	1/1	内：ハケ目，外：ミガキ，円形透かし孔(4ヵ所)	淡橙・橙	水道粘土 微砂
9	弥生土器 高杯？	－	－	－		内：ナデ・ミガキ・波頂文・波状文，外：ミガキ・4条の沈線，外面磨滅	淡橙	細砂 白色粒
10	弥生土器 台付鉢	9.8	5.8	7.1	口1/6 底1/1	内：ハケ目，底内：ナデ・オサエ，外：ハケ目・ナデ，脚端部3ヵ所のみ丸みを帯	淡橙	微砂 白色粒
11	弥生土器 脚付鉢	7.4	－	－	1/3	内・外：ナデ・オサエ	橙	微砂 白色粒
12	弥生土器 手づくね土器	5.2	3.1×4.1	5.0	口1/2 底1/1	内：オサエ，外：オサエ・ハケ目，黒斑，外面磨滅	内：淡橙 外：淺黄橙	微砂 赤色粒 白色粒
13	弥生土器 製塩土器	5.8	－	－	底1/4	内：ナデ・絞り痕，外：オサエ・ナデ	内：明灰 外：淡白・黒灰	微砂
14	弥生土器 高杯	－	－	－		杯外：オサエ，脚内：絞り痕，脚外：ハケ目・ミガキ，脚部中央に8条の沈線，沈線下に円形透かし孔(上段2ヵ所・下段2ヵ所残存)，内外面磨滅	内：淡橙 外：明橙	微砂 2～4mm大の礫

図29　土器集中２出土遺物（縮尺1/4）

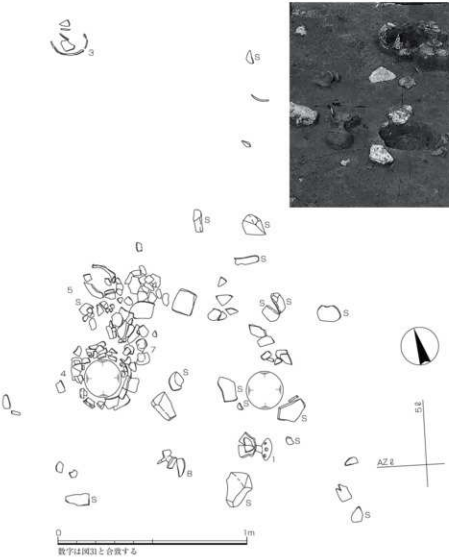
コンテナ（28/64）３箱の遺物が出土した。検出面の標高1.05m、底面の標高は0.7mを測る。土器集中１と同様に、溝１～３が埋まった後の窪み状の部分に土器を多量に含む明灰色砂質土が堆積した状況である。土器集中２は前期調査で検出し、土器集中１は後期調査で検出したもので双方の位置・レベルは異なる。しかし下位に位置する溝１～３、および本地点の地形が西から東へ傾斜していること、さらに南から北への傾斜を考慮すると、土器集中１と２が本来同一遺構である可能性は高いものと考えられる。

遺物は完形に近く復元できるものが３点と少なく、土器集中１に比しても散漫である。壺・甕・高杯・台付鉢のほか、ミニチュア土器鉢、製塩土器も見られる。弥生時代後期が主体である。

土器集中３（図30・31）

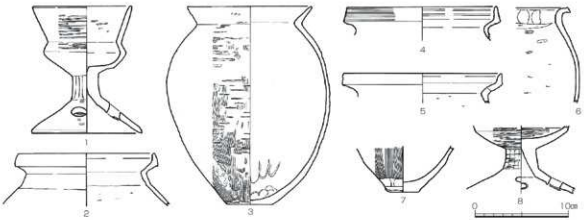
AY07区に位置する。1.5×1.5mの範囲にコンテナ（28/64）１／２箱の土器がまとまって出土した。標高0.76～0.84mで検出した。土器集中３の検出面は平坦であり、窪みなどは認められない。遺物には多数の土器片と礫15点余が含まれ、土器は図示しているように完形あるいは大形の破片がその場で潰れている。出土状況は土器集中１・２と比べ少量かつ散漫である。土器集中３は土器集中２と同じく前期調査で検出したもので、本遺構の下位

出土状況（北から）



数字は図31と合致する

図30　土器集中３出土状況（縮尺1/20）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器 脚付壺	10.3	11.7	13.5	口・底1/2	壺内外：ミガキ、脚外：面取り、脚柱：ハケ目、円形透かし孔(4カ所)、内外面磨滅	明橙	微砂
2	弥生土器 甕	14.5	－	－	1/3	内：ナデ・筒ケズリ、外：ナデ、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂 白色粒 2~3mm大の白色礫
3	弥生土器 甕	13.1	4.7	21.1	口1/2底1/1	内：ナデ・オサエ、外：ハケ目・平行タタキ、外底：ハケ目、内外面磨滅	橙	微砂 赤色粒
4	弥生土器 甕	15.9	－	－	1/2	内外：ナデ、口縁部内面条の凹線、口縁部：6条の沈線、煤、内外面磨滅	にぶい黄橙	微砂
5	弥生土器 甕	16.8	－	－		内：筒ケズリ、煤、内外面磨滅	淡橙	微砂 白色粒 2mm大の礫
6	弥生土器 甕	－	－	－		内：ナデ・オサエ・筒ケズリ、内外面磨滅	浅黄橙	微砂 2~3mm大の礫
7	弥生土器 甕	－	3.4×3.6	－	1/1	外：オサエ・ハケ目、内外面磨滅	明橙	微砂
8	弥生土器 高杯	－	－	－		杯内外：ミガキ、脚内：ナデ、脚外：ミガキ・面取り、円形透かし孔(3カ所残存)	内：淡橙 外：明橙	微砂

図31 土器集中３出土遺物

で溝１～３にあたるものは確認されていないため、溝との関係は不明である。位置的には、土器集中１の延長上にあたり、同一遺構の可能性も残す。

遺物は前述したように、完形の脚付壺（図31－１）、甕（同－３）のほか、甕・高杯、またモモ１点がみられる。弥生時代後期後半を主体とする。

第3節　中世・近世の遺構・遺物

中世に属する遺構は井戸3基である。近世に属する遺構は井戸8基・土坑4基・溝1条である。いずれの遺構も、近代以降の破壊を免れた箇所で確認されたものである。このほかに調査区中央で数基のピットを確認している。遺物の出土はなく、井戸との位置関係を考慮すると、ピットの時期は近世である可能性が高いものと考える。

中世の遺構は、調査区北東部に井戸1基、南端に井戸2基がある。詳細は後述するが、南端の井戸が古く中世前半、北東の1基は中世後半のものである。

一方、近世の遺構は、調査区全域に認められる。中世前半までの居住域は本地点より南にあり、中世後半から近世に、本地点が居住域として利用されたことが窺える。

以下中世・近世に分けて、概要を記す。

(1)　中世の遺構・遺物

1．井戸

井戸4（図33・34　図版11）

調査区南端BB06区に位置する。検出面では一辺0.8mの近方形を呈し、底面では一辺0.7mの近方形を呈する。検出面の標高0.55m、底面の標高－0.75mで、検

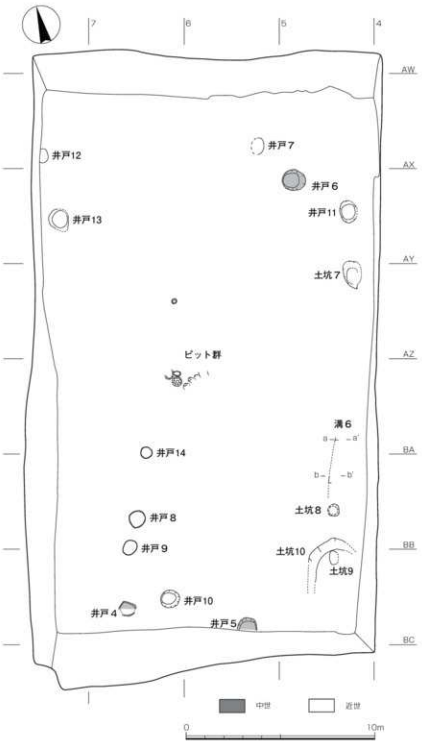


図32　中世・近世の遺構全体図（縮尺1/200）

出面からの深さは1.2mを測る。西側に井戸１が隣接する。また現代のマツ杭が打ち込まれており平面形や土層に影響が認められる。

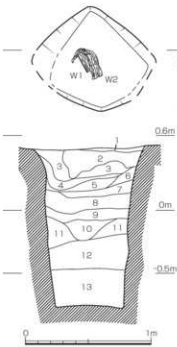
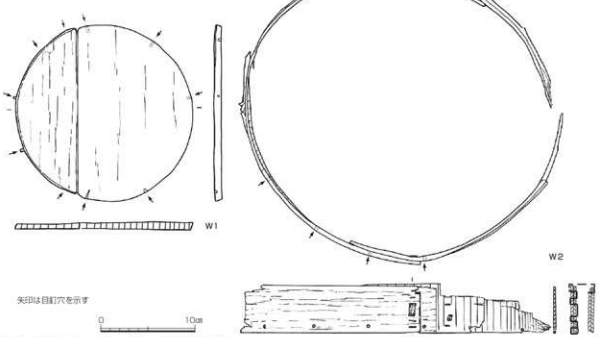


図33　井戸４（縮尺1/30）

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１～４層）、Ⅱ群（５～10層）、Ⅲ群（11～13層）に大別される。Ⅰ群は暗褐色～黒色を呈する粘土層であり、埋め土であろう。このうち４層には藻状の有機物を、３層に炭を多く含む。Ⅱ群は灰色～暗灰色を主体とする粘質土で埋め土である。９層に炭を多く含む。Ⅲ群は暗灰色を呈する砂と粘土が互層となり、使用中の堆積層の可能性がある。

遺物は少なく12号ポリ袋２袋が出土した。そのうち半分は弥生土器の小片であり、そのほかに丹塗り土師器小片、土師質土器小片が僅かに見られた。最下層13層中で、曲物底板（図33－Ｗ１）と側板（同－Ｗ２）が出土した。Ｗ１・２はサイズが異なることから同一個体ではない。そのほか埋土３・４層の土壌より、小型種子20科34種を抽出した（第４章２参照）。



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W1	曲物底板	18.7	18.5	0.8	ヒノキ	柾目	側面10カ所に目釘孔遺存、一枚づくり、表裏面平滑、破損部に目釘穴が近接して穿たれており補修の可能性を示す
W2	曲物タガ	(31.1)	5.2	0.3	ヒノキ	板目	2枚のタガを2カ所で結合、いずれもＳ撚合、樺皮綴じは外4段綴じに復元可能、下部に現状11孔の目釘孔が遺存し本来は14孔程度か、内面に縦方向のケビキ

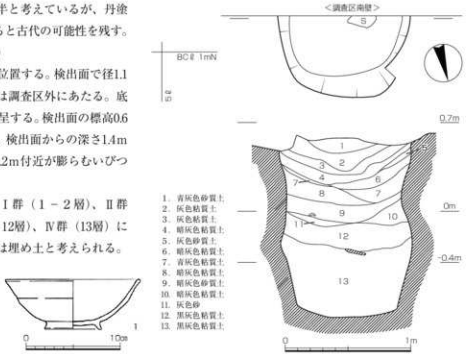
図34　井戸４出土遺物（縮尺1/4）

本遺構の時期は中世前半と考えているが、丹塗り土師器の存在を重視すると古代の可能性を残す。

井戸５（図35　図版12ａ）

調査区南端、BB05区に位置する。検出面で径1.1ｍの半円形を呈し、南半は調査区外にあたる。底面では径0.9ｍの半円形を呈する。検出面の標高0.6ｍ、底面の標高－1.0ｍで、検出面からの深さ1.4ｍを測る。断面形は標高－0.2ｍ付近が膨らむいびつな筒形を呈する。

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１－２層）、Ⅱ群（３－７層）、Ⅲ群（８－12層）、Ⅳ群（13層）にまとめられる。Ⅰ～Ⅳ群は埋め土と考えられる。Ⅰ群は青灰色～灰色を主体とする。Ⅱ群は灰色～暗灰色を主体とする粘質土で、粘土ブロックを多く含む。Ⅲ群は暗灰色を呈する粘質土と砂質土が互層状となる。４群は黒褐色粘土層であり、灰色粘土ブロックを多く含む。



番号	器種	口径（cm）	高台径（cm）	器高（cm）	残存	特徴	色調	胎土
1	土師器　椀	14.0	6.0	5.2	口：3/4 高台：4/5	内：ナデ、外：押圧・ナデ	黄灰白	1～2mm砂礫

図35　井戸５・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

井戸６（図36・37　図版12ｂ・ｃ）

調査区北東部、AX04区に位置する。検出面では南北1.1×東西1.2ｍの楕円形を呈し、底面では径0.8ｍの円形を呈する。検出面の標高0.7ｍ、底面の標高－0.8ｍを測り、検出面からの深さ1.5ｍである。断面形では－0.3ｍ付近が膨らむ円筒形を呈する。

埋土は13層に分けた。Ⅰ群（１～７層）、Ⅱ群（８・９・12層）、Ⅲ群（10・11層）、Ⅳ群（13層）の４群にまとめられる。Ⅰ群は暗褐色を呈する粘質土を主体とし、各層に粘土ブロックを含む。埋め土である。Ⅱ群は灰色を呈する粘質土が主体で、特に８層に有機質を密に含む。Ⅲ群は暗褐色・暗灰色を呈する粘質土層で、縦位に堆積する特徴から、木杭の痕跡の可能性がある。Ⅳ群は暗褐色粘質土層である。

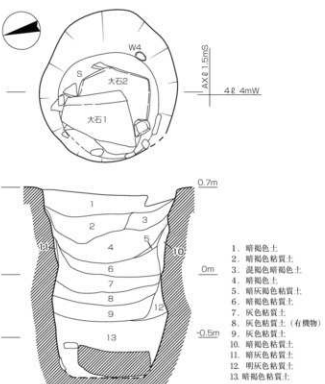
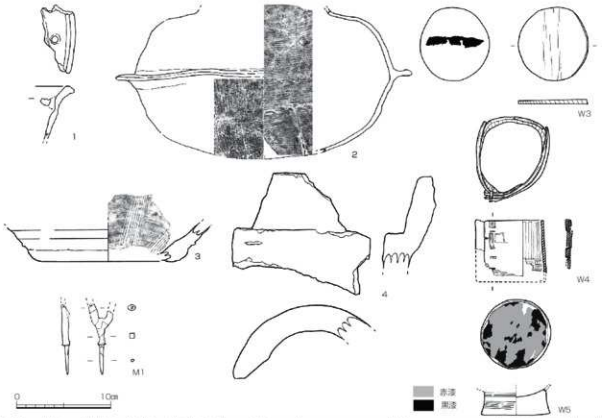


図36　井戸６（縮尺1/30）



番号	器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	残存	特徴	色調	胎土
1	瓦質土器　鍋	－	－	－	1/4以下	内：ナデ・横位ハケメ，外：回転ナデ・押圧・ハケメ	黒色	1～2mm砂粒多
2	瓦質土器　釜	－	－	－	1/2強	内：ナデ・ハケメ，外：ナデ・押圧・ハケメ	黒・褐褐色	緻密
3	備前焼　擂鉢	－	14	－	底部：1/4	内：回転ナデ・櫛目，外：回転ナデ	暗赤褐	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	特徴	色調	胎土
4	桁丸瓦	－	－	－	凹面：布目痕，凸面：ナデ	赤褐色	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W3	柄杓底板	7.7	7.3	0.4	ヒノキ	板目	側面目釘孔なし，一枚づくり，表面に柄杓柄と直交方向の一文字の墨書あり，表裏面平滑
W4	柄杓側板	5.9	7.3	0.3	ヒノキ	柾目	一枚の側板で構成，2接合で樺皮巻には外3段縦にに復元可能，柄の挿入孔は一辺1.0cmの正方形，内面に縦方向のケビキ
W5	漆塗椀	7.2	7.2	3.3	トチノキ		円盤高台，高台高2.0cm，内外面とも黒漆を塗布し，内面にはその後赤漆を塗布

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	特徴
M1	ヤス	7.4	0.5	0.4	7.1	又内部は中空，茎部に木質付着

図37　井戸６出土遺物（縮尺1/4）

遺物はコンテナ（28㌔）１／２箱が出土した。土師質土器、備前焼、瓦質土器のほか瓦、弥生土器片が含まれる。備前焼擂鉢（図37－３）・瓦質土器（同－１・２）、丸瓦（同－４）を図化した。２は釜で、口縁が欠失しているがすほまる形状になると想定され、瓦質土器釜Ｂ類に比定される。Ｗ３・４は柄勺の勺部にあたり同一製品である。Ｗ４の歪みが顕著であり合わせて図化することが難しかった。Ｗ５は漆塗椀の高台部で、トチノキを材とし、内面に赤漆を塗布する。

そのほか底面に大石２点が重なって置かれていた。上部の大石１は50×55cmの台形状で厚さ15cmを測る。下位の大石２は60×65cmの不整形で厚さ20cmを測る。大石２は底面にすっぽりとおさまるように据えられたと考えられる。いずれも最下層の13層中にあたり、大石２の東側に貼りつくように木製品（図37－Ｗ４）が出土した。大石は埋め戻しの過程で遺棄されたものと考えているが、重量的にかなりの労力を要したことが窺える。

埋土のうち13層の土壌サンプルを持ち帰り、小型種子17科31種を描出した（第４章２参照）。そのほかモモ１点も出土した。

本遺構の時期は出土遺物から中世後半、15世紀後半に比定される。

(2) 近世の遺構・遺物

1、井戸

井戸７（図38・39　図版13）

調査区北部、AW05区に位置する。検出面では径0.85mの円形、底面では径0.65mの円形を呈する。検出面の標高0.6m、底面の標高−0.55mを測り、検出面からの深さ1.15mである。断面形は上部が僅かに開く円筒形をなす。本遺構にはマツ杭２本が打ち込まれており、断面にも影響が見られる。

埋土は11層に分けた。Ⅰ群（１～５層）は茶灰色～灰色の砂質土を主体とする１～４層と暗灰色粘質土の５層からなる。炭化物を少量含む。Ⅱ群（６～10層）は灰色～暗灰色の砂質土を主体とする６～９層と暗灰色粘質土の10層からなる。Ⅰ・Ⅱ群の状況からは埋め戻しの段階のまとまりを示すとも考えられる。Ⅲ群（11層）は灰色砂質土で、使用時の堆積の可能性がある。

遺物は12号ポリ袋４袋が出土した。備前焼擂鉢、瓦質土器鍋のほか、瓦の小片が含まれる。最下層11層中からヒノキを材とする桶の部材（図39－Ｗ６・７）が出土した。底板の径17cmを測り、小型の桶である。

本遺構の時期は、出土遺物から中世後半以降、近世と考えられる。

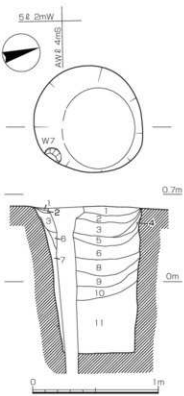
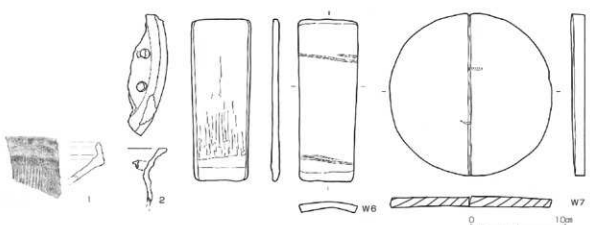


図38　井戸７（縮尺1/30）



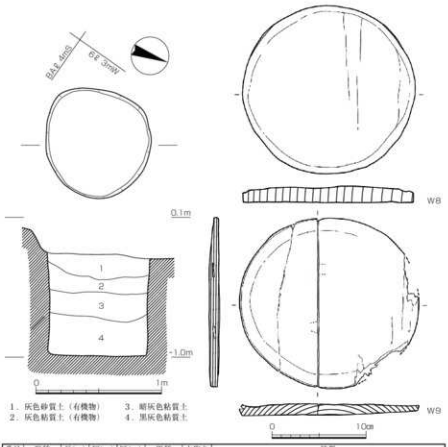
番号	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	特徴	色調（内／外）	胎土
1	備前焼　擂鉢	－	－	－	1/4以下	内：回転ナデ・擂目、外：回転ナデ	暗赤褐／黒	1～5mm砂粒多
2	瓦質土器　鍋	－	－	－	1/4以下	内：ナデ・横位ハケメ、外：回転ナデ・押圧・ハケメ	黒／黒	緻密

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W6	桶側板	17.0	6.0	0.6	ヒノキ	板目	目釘孔なし、外面上下に側板緊縛時に付きたものと思われる２条の痕跡あり、内面下部の底板との結合側所やや窪む
W7	桶底板	17.0	17.0	1.1	ヒノキ	板目	側面目釘孔なし、別材を２カ所のほぞで結合、表裏面平滑、W6と同一個体

図39　井戸７出土遺物（縮尺1/4）

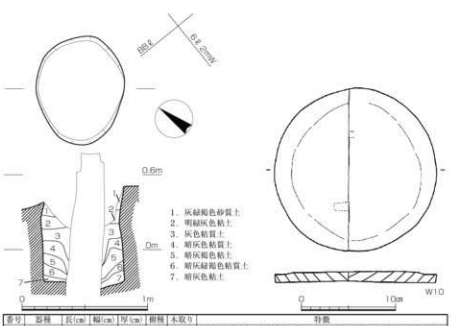
井戸８（図40　図版14）

調査区南部、BA06区に位置する。検出面・底面とも径0.88mの円形を呈し、断面形は円筒形をなす。検出面の



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W8	曲物底板	18.0	17.5	1.7	アスナロ	板目	側面目折孔なし、一枚づくり、縁部をやや窪む、表裏面平滑
W9	曲物底板	17.9	18.9	1.2	スギ	板目	側面目折孔なし、一枚の板材を半截のうえ、2ヵ所のほぞで結合、縁部をやや窪む

図40　井戸８・出土遺物（縮尺1/30・1/4）



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W10	曲物底板	17.2	17.0	1.1	スギ	柾目	側面目折孔なし、別材を2ヵ所のほぞで結合、縁部をやや窪む、表裏面平滑

図41　井戸９・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

標高－0.2m、底面の標高は－1.0mを測る。上面を近代の庭園遺構に削平され、検出面からの深さは0.8mを測る。

埋土は４層に分けた。１層は灰色を呈する砂質土層で、２～４層は灰色～黒灰色を呈する粘質土である。３・４層に粘土ブロックを多く含み、いずれも埋め土と考えられる。

遺物は12号ポリ袋２袋が出土した。土師質土器小片、瓦片、弥生土器の小片のほか、木製品２点が出土した。図40－W８・W９はいずれも曲げ物の底板である。W９は２枚の板の合わせ目の側面にそれぞれ２ヵ所ほぞ穴を施し、木材で繋いだものであるが、繋ぎとなる木材は失われている。２枚は同一個体であり、ほぞつぎは補修の痕跡と考えられる。

本遺構の時期は出土遺物から近世に比定される。

井戸９（図41　図版15）

調査区南部、BB06区に位置する。井戸８の0.8m南に隣接している。検出面では南北0.7m、東西0.8mの楕円形を呈し、底面では南北0.65m、東西0.75mの楕円形状をなす。検出面の標高0.5m、底面の

標高は－0.3mで、検出面からの深さ0.8mを測る。上部を近代遺構により大きく削平され、中央にはマツ杭が打ち込まれており、土層断面にもその影響が顕著である。

埋土は７層に分けた。１層が砂質である以外は、いずれも灰色～暗灰色を呈する粘質土であるが、マツ杭の影響が大きいと考えられる。いずれの土層にも粘土ブロックを多く含み、埋め土であろう。

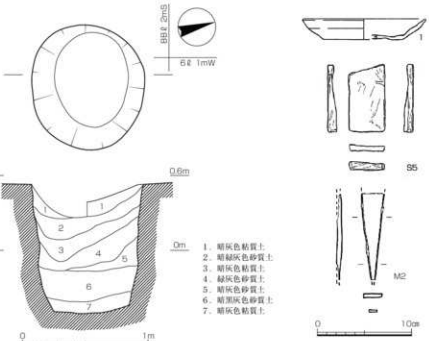
遺物は12号ボリ袋で２袋が出土した。土師質土器、陶磁器、瓦、弥生土器が含まれるがいずれも小片である。図41－W10は曲物底板で、２枚の板を、合わせ目に施した２カ所のほぞ穴で継いでいる。そのほかにモモ１点がある。本遺構の時期は出土遺物から近世に比定される。

井戸10（図42　図版16）

調査区南端、BB06区に位置する。前述の井戸９の南東３ｍの地点である。検出面では南北0.9m、東西1.0mの楕円形、底面では南北0.6m、東西0.7mの楕円形を呈する。検出面の標高0.55m、底面の標高は－0.5mで、検出面からの深さ1.0mが残る。断面形は上部が僅かに開く円筒形である。本遺構にもマツ杭が打ち込まれている。

埋土は７層に分けた。Ⅰ群（１層）、Ⅱ群（２・３層）、Ⅲ群（４～７層）にまとめられる。１・３・７層と各群の最下層は暗灰色を呈する粘質土で、粘土ブロックを多く含む。その間に緑灰色～暗灰色の砂質土層が堆積する状況が繰り返し見られる。いずれも埋め土であろう。

遺物は僅かに土師質土器皿（図42－１）のほか、陶磁器、弥生土器のいずれも小片が10数点出土した。陶磁器には中世青磁片、近世染付の小片が含まれる。Ｓ５は粘板岩製の砥石で、側面４面が使い込まれている。Ｍ２は和釘である。



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴		色調	胎土
1	土師器　皿	12.8	8.0	2.2	1/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：切り離し後、押圧・ナデ		黒褐色～暗褐色	1～2mm砂礫

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	残存	石材	特徴
S5	砥石	7.1	3.8	0.9	29.0	一部欠損	粘板岩	砥面：4面

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	特徴
M2	釘	9.1	2.3	0.4	28.5	和釘、断面方形、上下端とも欠損

図42　井戸10・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

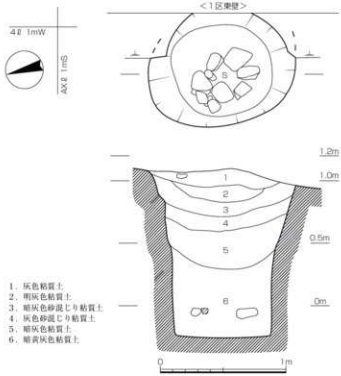


図43　井戸11（縮尺1/30）

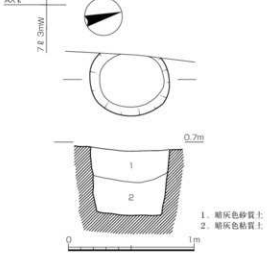


図44　井戸12（縮尺1/30）

本遺構は、出土遺物から近世に比定される。

井戸11（図43　図版17）

調査区北東、AX04区に位置する。検出面では南北1.2m、東西1.0mの南北に長い楕円形、底面では径0.8mの円形を呈する。検出面の標高1.1m、底面の標高－0.25mで、検出面からの深さ1.35mが残る。断面形は底面から標高0.5mまで筒型で、それより上位が広がる形状である。

埋土は6層に分けた。灰色～暗灰色を呈する粘質土が主体である。標高0m付近で5～10cm大の礫12点が認められ、埋め戻す際に一気に遺棄したと思われる。礫にはいずれも加工痕や被熱は認められない。

遺物はコンテナ（28$^{7}_{4}$）1／2箱が出土した。その大半は瓦片であり、そのほかに備前焼、瓦質土器、土師質土器、弥生土器のいずれも小片を含む。このうち備前焼は壺口縁であり、近世前半であろう。

本遺構の時期は出土遺物から、近世に比定される。

井戸12（図44）

調査区北西部、AW07区に位置する。調査区西壁にかかっており、本遺構の西端は調査区外にあたる。検出面では径0.6mの円形、底面で径0.5mの円形を呈する。検出面の標高0.65m、底面の標高0.1mを測り、検出面からの深さは0.5mである。

埋土は暗灰色砂質土層、暗灰色粘質土層の2層であり、出土遺物は見られなかった。

本遺構は小規模で底面レベルが他の井戸に比して高い点から、井戸として機能していたかは疑わしい。水溜等も想定されるが、規模の点では他にも同等の井戸があり、本報告では井戸として掲載する。

本遺構の時期は検出面から近世と比定する。

井戸13（図45　図版19ａ）

調査区北西、AX07区に位置する。検出面では径1.1mの不整円形、底面では径0.8mの円形を呈する。検出面の標高0.85m、底面の標高は－0.9mを測り、検出面からの深さは1.75mである。断面形状は底面から標高0mまで筒形で、それより上位は緩やかに開く。中央付近にマツ杭が打ち込まれており、記録した土層断面にその影響が認められる。

埋土は5層に分けた。いずれも粘質土で、下層に向かうほど粘性が高い。2層には有機質を多く含む。出土遺物は少なく、近世陶磁器、土師質土器、弥生土器のいずれも小片であり、図示できるものはなかった。

本遺構上面は近代以降の遺構によって削平されており、本遺構の時期については層位から近世に比定される。

井戸14（図46　図版18）

調査区中央南寄り、AZ06区に位置する。検出面では径0.6mの円形、底面では径0.55mの円形を呈し、断面は筒型をなしている。検出面の標高0.3m、底面の標高－0.85mで、検出面からの深さ1.15mを測る。本遺構の上半は近代庭園遺構によって大きく削平されている。

埋土は12層に分けた。Ⅰ群（1～8層）、Ⅱ群（9～12層）の2つにまとめられる。Ⅰ群は暗灰色を主体とする土層で、Ⅱ群に比して粘度が低い。いずれの層にも粘土ブロックを多く含む。Ⅱ群は暗灰～暗褐色の粘質土層で粘土ブロックを含む。いずれも埋め土であろう。

出土遺物は非常に少なく、肥前磁器小片と丸瓦（図46－1）のみであった。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と比定される。

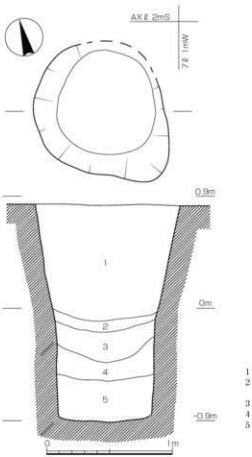


図45　井戸13（縮尺1/30）

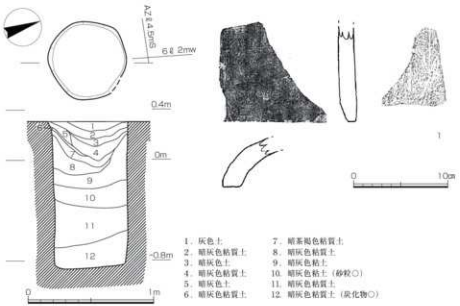
2．土坑

土坑7（図47　図版19 b・c）

調査区北東、AY04区に位置する。本遺構の東端は東壁にかかる。

検出面では南北1.5m、東西1.2mの楕円形、底面では1.0×0.9mの隅丸方形を呈する。

断面形は逆台形をな



番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	特徴	色調	胎土
1	丸瓦	（10.6）	（9.6）	1.6	凹面：布目痕、凸面：ナデ	灰色	緻密

図46　井戸14・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

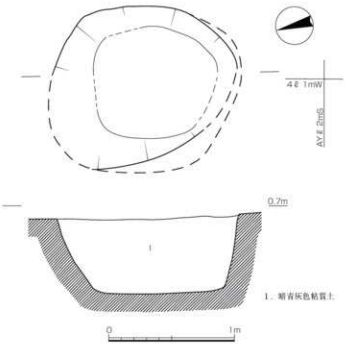


図47　土坑７（縮尺1/30）

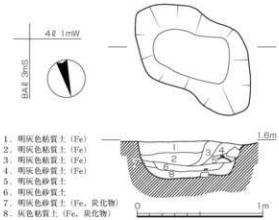


図48　土坑８（縮尺1/30）

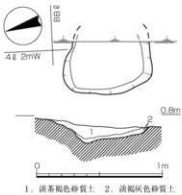


図49　土坑９（縮尺1/30）

す。検出面の標高0.6m、底面の標高０m、検出面からの深さ0.6mを測る。

本遺構は前期調査区１区の東端にかかっており、調査区東側溝により中央部が分断された状況で検出した。１区東壁基礎の下部が調査途中に崩落したため、詳細な分層の記録ができていない。埋土は暗青灰色粘質土で、粘土ブロックを多く含む。また本遺構は前述の土坑１の上部に重複する。

出土遺物は極めて少なく、弥生土器が数点出土した。うち１点は前述の土坑４出土遺物と接合している。

本遺構の機能については限定する材料に欠ける。時期は層位から近世に比定する。

土坑８（図48　図版20ａ）

調査区南東、BA04区に位置する。検出面では長径1.1m、短径0.6mの歪な楕円形、底面では長径0.6m、短径0.3mの隅丸長方形を呈する。検出面の標高1.6m、底面の標高1.3mで、検出面からの深さ0.3mを測る。断面形は逆台形をなす。

埋土は８層に分けた。Ⅰ群（１～３層）、Ⅱ群（４～７層）、Ⅲ群（８層）にまとめられる。Ⅰ群は明灰色粘質土を主体とする。Ⅱ群は明灰褐色砂質土を主体とし、４・５層に土器を多く含む。Ⅲ群は灰色粘質土である。

遺物はコンテナ１／４箱が出土した。弥生土器、古墳時代初頭の土師器の小片が多く、図示できるものはなかった。これらの遺物は下位に重複する土坑４あるいは土坑５に由来する可能性が高い。

本遺構の時期は検出面から近世とする。

土坑９（図49　図版20ｂ）

調査区南東、BB04区に位置する。長径0.7m、短径0.6m程度の楕円形を呈するものと考えられるが、本遺構の東端は前期調査４区の東壁下にあたり確認できていない。検出面の標高0.7m、底面の標高0.55m、深さ0.15mが残る。出土遺物は見られなかった。

本遺構の時期は層位から近世に比定する。

土坑10（図50　図版21）

調査区南東角、BA・BB04区に位置する。上面で南北2.85m、東西2.5mの範囲で検出し、本遺構の東端、南端は調査区外にあたるため、全形・規模は不明である。

検出面の標高は1.0m、底面の標高は－0.1mを測り、検出面からの深さ1.1mである。底面から標高0.1mまでは断面台形状に立ち上がり、標高0.1mより上位へは擂鉢状に広がる。

埋土は7層に分けた。灰色系を呈する粘質土が堆積する。いずれも埋め土と考えられる。

遺物はコンテナ(28/32)1／2箱が出土した。弥生時代～近世の土器小片及び瓦片が含まれる。瓦片は最下層7層中に多く、埋め戻しの際に遺棄されたものと考えられる。そのほかモモ2点が出土した。

本遺構の時期は出土遺物から近世に比定する。

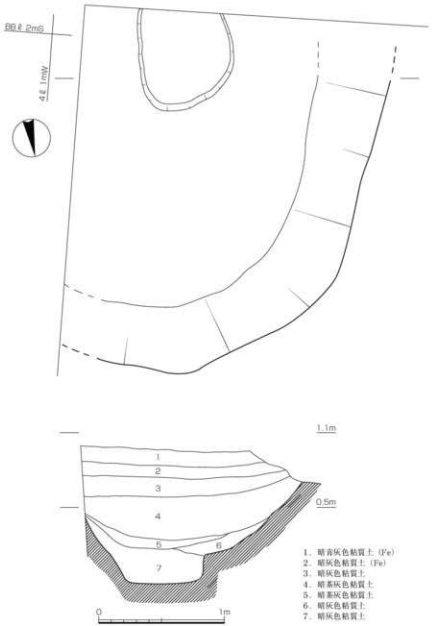


図50　土坑10（縮尺1/30）

また本遺構の機能については形状・規模が不明であり、推定が困難である。

3．溝

溝6（図51・52）

調査区南東部を南北方向に走行する溝の一部をBA04区で検出した。BAライン1m北～4m南の間で、長さ2m程を確認した。中ほどを近代の溝により削平されているうえ、溝の東縁は本調査区内では確認できていない。検出した箇所の北端・南端の断面形状は逆台形状の西半分であり、幅1.05～1.1mを確認した。

埋土はⅠ群（a断面1層・b断面1～6層）とⅡ群（a断面2層・b断面7～10層）の2群にまとめられる。Ⅰ群は淡茶灰色～淡灰黄色を呈する砂質土を主体とし、Ⅱ群は灰褐色～暗灰色を主体とする砂質土である。

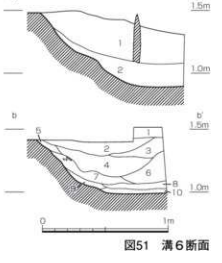
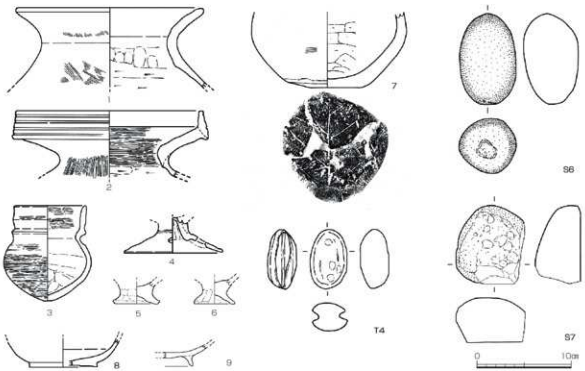


図51　溝６断面

遺物は比較的多くコンテナ（28㌢㌍）２箱が出土した。その大半は弥生時代後期の土器で、甕・壺・高杯のほか、鉢・製塩土器である。これらは本遺構の下位に重複する土坑２・４・５、溝４等に由来するものと考えられる。次いで近世の瓦片が多く出土した。そのほか、古墳時代初頭の土器片や、緑釉陶器碗（図52－８）・内黒の土師器椀（同－９）等の古代の遺物が含まれる。周辺にこれらの時期の遺構の存在が窺える。

本遺構の時期は、出土遺物から近世に比定される。



番号	器種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　壺	19.5	－	－	3/4	口縁：ナデ、内：横ナデ・オサエ・筋ケズリ、外：ハケ目・ナデ、圧痕	橙	細砂
2	弥生土器　壺	－	－	－	1/2	口縁：4条の凹線、内：ナデ・ミガキ・筋ケズリ、外：ナデ・ハケメ	淡橙	微砂
3	土師器　小型壺	7.3	1.8	10.0	1/6	口縁：横ミガキ、内：ナデ・オサエ、外：ミガキ後ナデ、ハケメ後一部ミガキ、全体に磨滅、歪み	淡橙	微砂
4	弥生土器　高杯	－	10.2	－	1/2	内外面磨滅、内：絞り痕、外脚：一部ミガキ、円形の透かし孔3カ所残存	橙	微砂
5	弥生土器　製塩土器	－	4.3	－	1/2	内外：オサエ、外面磨滅	内：暗褐　外：褐	微砂
6	弥生土器　製塩土器	－	3.7	－	1/2	内外：オサエ	内：灰褐　外：赤褐	細砂
7	弥生土器　鉢	－	8.6	－	1/1	内：ナデか筋ケズリ、外：ハケ目・ナデ、外底：木葉痕、黒斑	内：淡橙　外：橙	細砂　白色粒
8	緑釉陶器　椀	－	7.6	－	1/2	内外：ナデ、外底：筋ケズリ	胎：灰　釉：オリーブ	精緻
9	土師器　椀	－	－	－	－	内：ナデ・オサエ、外：ナデ、貼付高台、内面調整不明	内：黒　外：淡橙・橙	微砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	残存	特徴	色調	胎土
T4	有溝土錘	6.2	2.9	3.0	73.2	完	ナデ・オサエ、側縁に溝	淡橙	細砂

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量：g	石材	特徴
S6	敲石	9.5	6.0	5.7	445.7	流紋岩質凝灰岩	敲打痕1カ所
S7	砥	(8.2)	(7.2)	4.8	390.5	安山岩	下面平坦、加工痕なし

図52　溝６出土遺物（縮尺1/4）

第４節　近代の遺構・遺物

近代の遺構は、井戸１基、溝１条、庭園遺構２基である（図53）。このうち溝１条は庭園遺構１の前段階の施設である可能性を考えており、庭園遺構１の項に含めて記載する。

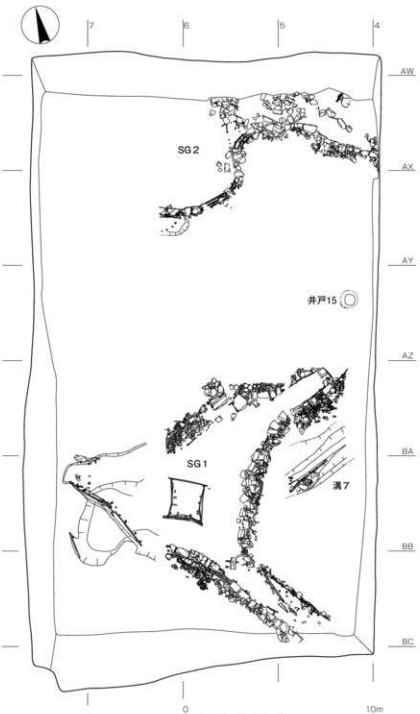


図53　近代遺構全体図（縮尺1/200）

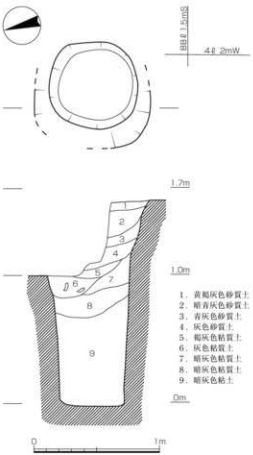


図54　井戸15（縮尺1/30）

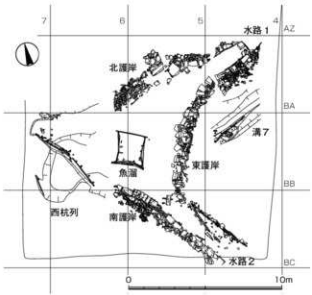


図55　SG1概要（縮尺1/250）

1．井戸

井戸15（図54）

調査区北東、AV04区に位置する。上面では径0.9mの円形、底面では径0.6mの円形を呈する。本遺構の北半分は標高1.0mまで削平されている。検出面の標高1.6m、底面の標高－0.02mで、残りの良い南半部では深さ1.62mを測る。断面の形状は、底面から標高1.0mまで筒形に立ち上がり、それより上位は僅かに開く。

埋土は9層に分層した。Ⅰ群（1～4層）、Ⅱ群（5～7層）、Ⅲ群（8・9層）の3つにまとめて記述する。Ⅰ群は黄灰色～青灰色の砂質土である。炭化物や粘土ブロックを多く含む。Ⅱ群は褐灰色～暗灰色の粘質土である。細砂・粘土ブロックを含む。これらいずれも埋め土であろう。Ⅲ群は黒灰色粘質土の8層と、暗灰色粘土の9層である。いずれもしまりがなく、特に混入物は見られない。

遺物は12号ポリ袋1袋が出土した。弥生土器、須恵器、瓦のいずれも小片のほか、ガラス瓶片が含まれている。

本遺構の時期は出土遺物から近代である。後述する庭園遺構との同時性については判断する材料はなく不明である。

2．庭園遺構

庭園遺構1（SG1）（図55～71　図版22～26）

調査区南半、AZ～BB・04～07区に位置する。北辺19m、東辺17m、南東辺15mの平面三角形を呈する池の北東角と南東角に、取水路（水路1）・排水路（水路2）が取りつく。池の検出面の標高は最も高いところで1.05m、底面の標高は－0.4mを測る。＜2層＞対応であり、本来は標高1.6m近くが上面となるとも考えられる。

既に述べたように調査区の大半がコンクリート基礎に覆われていたことから、前期・後期に分けて調査を実施したため、本遺構は各所で分断した調査・記録採取とならざるを得なかった。以下の記述は、池部分の護岸・杭列と、水路とに分けて行う。

a．池部

前述したように平面三角形状を呈し、北側・東

側・南側には石組護岸が、また西側には石組は認められず、杭と板材による設備を確認した。

北護岸（図56　図版22ｂ・ｃ・25ａ）　AZ05・06区で、北東から南西に約10mの範囲で検出した。西端から３ｍは瓦敷き、中央部に石段、石段から東３ｍの幅に護岸石組の３種で構成される。検出面は前期調査箇所では標高0.8m、後期調査箇所（すなわちコンクリート基礎下面）では標高0.5m前後を測る。北護岸部分は両者にかかっており検出面の標高は0.5～0.8m、最底面の標高は－0.1ｍを測る。標高0.1ｍ地点に傾斜変換点があり、西側瓦敷部ではその地点に0.3m～0.9ｍの不規則な間隔で並ぶ竪杭８本を確認した。瓦敷は竪杭から南に１ｍの範囲に施されている。桟瓦の破片を敷き詰めたものである。竪杭のほかに、横木が数本確認されるが、杭との関連は見いだせなかった。

石段はａ断面にみるように６段が確認される。最上部の標高1.3m、最下段の底面は標高0.1ｍで、傾斜変換点に最下段の石を据え、北に持ち送っている。最下段には幅0.9m、奥行0.5m、厚み0.3ｍの切り石を、下から２段目には幅0.9m、奥行0.4m、厚み0.18mの切り石を用いている。一方下から３段目より上については、0.3～0.5m大の割石を一段に２つずつ積むものであり、後述する東側の石組護岸との共通性が認められる。また前述の瓦敷に打たれた竪杭の最東端は、石段２段目の位置と合致している。

東側の石組護岸はbb'断面にみるように、南面を揃えるように切石・割石を３段積むものである。最上部の標高は0.8mを測り、それより上位は攪乱が及んでいるため本来高さは不明である。石積みの背後にあたる北側には裏込めの小礫が多数確認された。北護岸の東石組では最下段の石下部に胴木は認められない。中央石段の脇にあたる石組の西端部には0.7×0.7mの大石を設置する。大石の上面標高は0.45mを測り、中央石段最下段の上面レベル

図56　SG1北護岸（縮尺1/50）

と近似しており、ここに踊り場状の空間があったことが想定される。

出土遺物についてはまとめて後述するが、１点、石段の脇で石塔の頂部材が出土していることを特記しておく（図65－S10）。

東護岸（図57　図版22ｄ・24ａ～ｃ）　AZ～BA・04～05区に位置する。SG1北東角の水路１から南東角の水路２間の石組護岸を7.5mの長さで検出した。西側にやや湾曲する形状を呈する。堀方は東端の標高0.5m、石組下の標高0.1mで、ここを傾斜変換点として、西側へ傾斜する。標高0.1m地点に、20～50cmの間隔で打ち込まれた径10～15cmの竪杭を合計25本を確認した。これらの竪杭で胴木を固定して石組の基礎としている構造である。東護岸の北端では胴木が４本並んで設置された状況が残り（図版24ｃ）、南端では胴木１本が固定された状況で認められた。胴木は径10～15cm、長さ1.1m前後のものが用いられている（図57右）。東護岸の石組は検出時に既に崩れた状況であり、現代のマツ杭による破壊の影響も大きいものであったため、原位置を留めているものは極めて少な

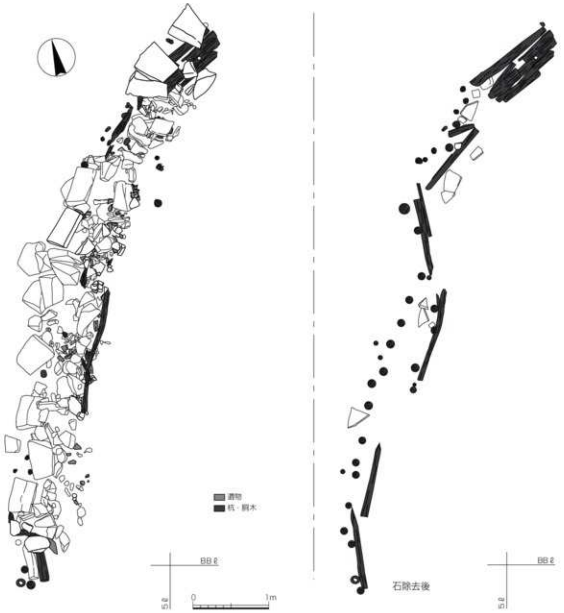


図57　SG1東護岸（縮尺1/50）

いと考えられる。その中で北端の胴木上の３石は原位置に近いものと考えている。0.5m大の切石を積んでいたことが想定され、前述の北護岸東側と同様に、池側の面を揃えて組まれていたものであろう。５～15cm大の礫も多数認められ、石組の背面に込められたものと考えられる。

南護岸（図58　図版25）　BB05区に位置する。SG1南東角から北西方向へ3.5mの長さを検出した。堀方は南端の標高1.0m、底面の標高－0.1mを測り、０m付近が傾斜変換点となる。その０m付近に径５～８cmの杭10本を10～60cm間隔で打ち込み、その南側に胴木を設置する。胴木は径12～18cm、長さ0.8～２mのもの４本を確認した（図58右　図版25ｃ・ｅ）。これらを基礎としてその上部に切石７個を北東側に面を揃えて積む。切石は0.25×0.4m～0.7×0.4mのものが認められ、幅はさまざまであるが奥行を揃えていると考えられる。その背後には径18cm、長さ1.3mを測る胴木を設置して、上位に0.3m大の小ぶりな割石を並べ、さらに５～15cm大の礫を充填する。標高0.2mの付近には径10cmの杭10本を概ね30cm間隔で打ち込み、胴木を設置していたとみられ、本地点では１本が原位置で確認された。径20cm、長さ1.2mを測る。原位置を保つ石材は、上述の切石７石であるが、調査中に周囲で規格が近似する石が10点近く出土しており、少なくとも２段以上の石組護岸が設置されていたと考えられる。堀方の規模および＜２層＞のレベルを考慮すると、３～４段以上の可能性も考えられ、堀方の形状は前述の北護岸東

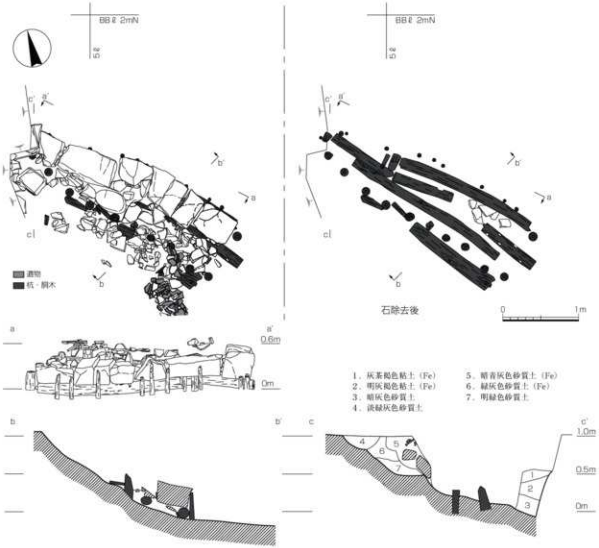


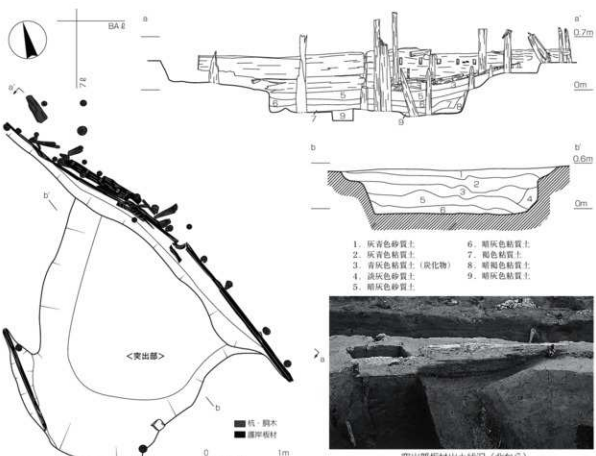
図58　SG1南護岸（縮尺1/50）

側と同様であることを記しておく。

西杭列（図59　図版26）　BA・BB06区に位置する。SG1池部の西角部分と、南西部への突出部からなる。西角部分南辺と突出部南端の２カ所で、竪杭と横板による施設を検出した。これまで述べてきた北・東・南の護岸石組のように本来は石組があったことが想定されるが、本調査地点の西半は、構内座標６ライン西１ｍを境に後世の破壊の程度が大きく、SG1・SG2のいずれも６ライン西１ｍより西の残りが非常に悪い状況である。岡山医科大学敷地として利用する際に石材等はすべて除去したものと考えられる。

突出部と西角部分は切り合い関係にあり、突出部を西角部分が切る。いずれも検出面の標高0.55ｍ、底面最深部の標高は突出部で－0.1ｍ、西角部分で－0.3ｍ、深さは突出部で0.6ｍ、西角部分で0.7ｍを測る。突出部には南西に張り出す南端と南西端の２カ所に竪杭が設置され、南西端の杭により止めるように横板材が設置される。竪杭は径８～10㎝、板材は幅1.4ｍ、高さ0.4ｍ、厚さ４㎝が残る（図59右下）。一方、西角部分の南辺に沿って竪杭を打ち込み、横板材を設置する。杭は径0.2～0.5ｍを測り、0.3～0.8ｍの間隔で打たれた20本余を確認した。うち２本を図示している（図69－W49・50）。横板材は幅1.56ｍ、高さ0.48ｍ、厚み2.8㎝を測る（同－W47）。１枚板ではなく、２枚の板を鎹により繋ぎ併せたものである。

この施設により突出部は遮られ、小規模な池状に滞水したものと考えられる。西角部分南辺の断面形は0.1ｍ地点と－0.3ｍ地点で屈曲する逆凸字形を呈しており、横板材の下位に土層の堆積が認められる。これらの施設は突出部が－0.3ｍから０ｍまで埋まった後に設けられたと考えられる。横板材の構造が類似する点から後述する魚溜施設と関連するものであろう。なお調査時には切り合い関係を重視して、突出部が埋まった後平面三角形状に改

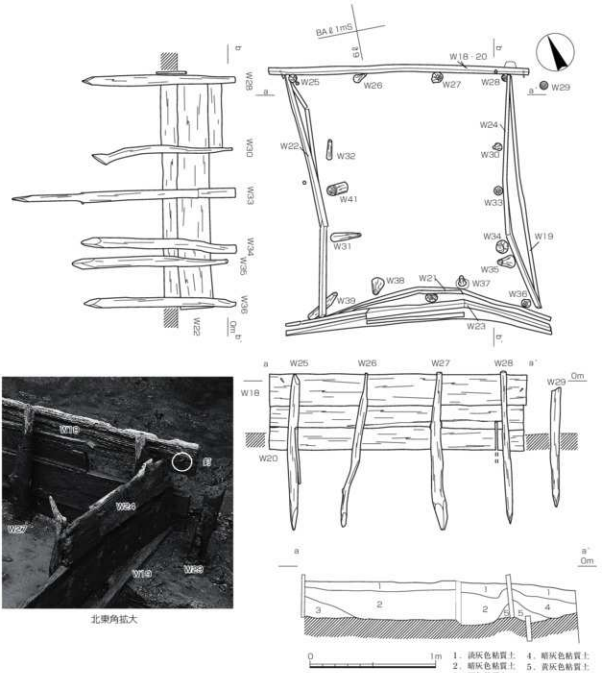


突出部板材出土状況（北から）

図59　SG1西杭列（縮尺1/50）

修したように考えたが、西杭列により仕切った後も突出部は機能しており、その機能としては部材の共通性からこの後述べる魚溜と共通することが想定される。

魚溜（図60　図版24ｆ・ｇ）　BA05・06区に位置する。SG1池の中央最深部に設置される。一辺２ｍの方形を呈する。魚溜の上面の標高は0.2m、底面の標高は－0.4ｍで、深さ0.6ｍを測る。横板材を内側の竪杭で支える構造であり、横板は幅200cm前後、高さ20～25cmの板を３枚積む（図60－aa'）。杭は１辺に４本をほぼ等間隔に打つが、東辺・南辺・西辺の横板はいずれも内側に湾曲しており、竪杭を２～３本打つことで補強したものと考えられる。横板材の最上部の１枚はW18・W24等に見るように上端が風化し（同図写真）、水面から出ていたことが窺



北東角拡大

図60　SG1魚溜（縮尺1/30）

え、その水面レベルは0m付近である。清掃時等にSG1池部の取水を止め、排水しても魚溜内は滞水していたと考えられる。魚溜の底面は湧水砂層に達しており、水が枯れることはなかったであろう。魚溜の構造をみると横板材の角には釘が認められ、釘止めであったことがわかる。水圧により内側に湾曲し、検出時には外れた状態であった。横板材の内側は平滑で、外側（図67参照）には、釘穴が多数穿たれている。中央付近から上向き、下向きの釘穴が等間隔に穿たれるもので、北辺上から1段目のW18をみると上列に上向き11個、下列に下向き10個を20cm間隔で交互に施す。釘穴の多くに釘が残っており、釘の先端が側縁で認められるものあれば、認められないものもある。後者では下の板材を繋いだとは言えず板材の補強のため隠し釘を打ち込んだ可能性も考えられる。こうした釘穴の加工はすべての横板材で確認され、いずれも外面に施されている。釘穴の間隔は狭いものでは10cmを測る（図67－W21：南辺3段目）。釘穴加工のある横板材は、前述の西杭列南辺でも確認される（図69－W47）。W47は北東面に横に一列、下向きの釘穴加工が24cm間隔で6個看取される。W48には18～20cm間隔の5個が認められる。こうした木材の類似した状況を考慮すると、前述の突出部についても魚溜的機能が想定される。

b．水路

水路1（図61　図版27）　AZ04区に位置する。平面三角形を呈するSG1池部分の北東角から北東へ直線的に延びる水路である。本調査地点の東端は鹿田キャンパス敷地東端から西5m程にあたるが、敷地東端に沿って、枝川が南流する。水路1はこの枝川に取りつく取水路である。本調査地点では樋門を挟んで上流側・下流側の護岸施設を検出した。水路の幅1.0～1.1m、検出面の標高は1.0m、水路底面のレベルは樋門を挟んで南北で異なり、上流側（図61－aa'断面）で0.35m、下流側で0.1mを測る。樋門部は幅1.0mを測り、標高0.15mの底面に切石二個が20cmの間隔を開け据えられる。この並列する切石の北面に据えた樋門板材を検出した。樋門板材は幅0.8m、厚み3cmを測り、上縁はU字状にくぼむ（同－bb'断面）。上端の標高は0.5m、切石よりもやや高い。また北東から南西に水圧により傾いていることが認められる。

水路の護岸も樋門の南北で構造が異なる。樋門から上流側は南側護岸のみ検出しており、横板材と杭による板柵護岸である（図版27b）。幅0.7～0.8m、高さ0.2mの横板を4段積み、竪杭で支えとする。下流側は石組護岸であり、基礎には胴木・竪杭が設置される。胴木は径あるいは幅が10cm程度の丸木あるいは割材を使用する。長さは0.6～1.4m、ほぞや角穴などの加工や釘穴が認められ、転用材と考えられる（図69－W52～58）。竪杭の径は5～8cmを測り、北側で3本、南側で8本検出した。南側石組では5本の胴木を隙間なく敷き並べ、二段の石を築く（図61－ee'断面）。石組は少なくとも三段以上であった（同dd'断面）と考えられる。幅20～70cm、奥行30cm、高さ30cm大の切石を用い、内側に面を揃えて積む。北側では原位置を留め（図版27d）、南側は乱れが看取される（図61写真）。切石積みの背面には5～20cm大の礫・瓦を裏込めに用いている。

cc'断面にみるように水路の埋土は13層に分けた（図版27c）。14～16層は裏込めである。水路埋土は上層（1～7層）と下層（8～13層）とに二分され、上層群が砂質土を主体とするのに対し、下層群は黒褐色粘質土を主体とする。下層群のうち8・9層には土器・瓦等の含有物が特に多い。

水路2（図62　図版24）　BB04・05区に位置する。平面三角形を呈するSG1池部の南東角から南東へ直線的に延びる水路である。前述の水路1と同様、キャンパスの敷地東端を南流する枝川に取りつく排水路である。前述の東護岸南端と南護岸東端から連続的に構築された石組護岸を持つ。水路の幅1.5m、検出面の標高は0.45m、水路底面の標高は北西端で－0.06m、南東端で－0.2mを測る。水路の南護岸は石組によるもので比較的残りが良く、竪杭で固定した胴木の上に切石を積み背面に裏込めをする構造で、石組は1段を検出した。北護岸は残りが悪く、南護岸と同様の胴木と石組の大半は残っていない。竪杭18本余の列と0.3～1.5mの長さの胴木5本が散在して検出された。切石は北西端で3石を確認した。杭列の北側0.2～0.7mの位置に竪杭と横板材による板柵護岸が長さ4.7mに渡り確認された。このように北側護岸は板柵と石組の両方の護岸が確認されるが、南護岸では一部で横板材を倒した後石組が施されたことが看取される。板柵護岸と石組護岸が前後関係と考えると、板柵護岸による水路

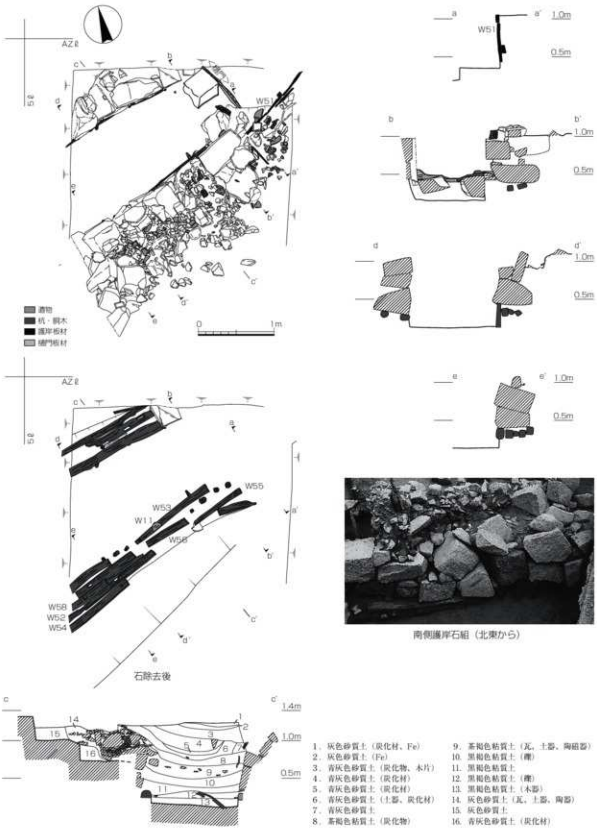


図61　SG1水路1（縮尺1/50）

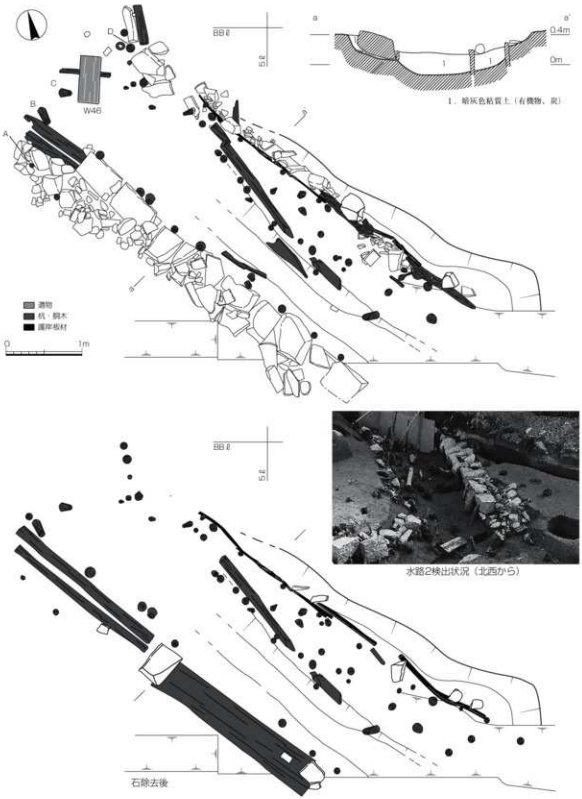
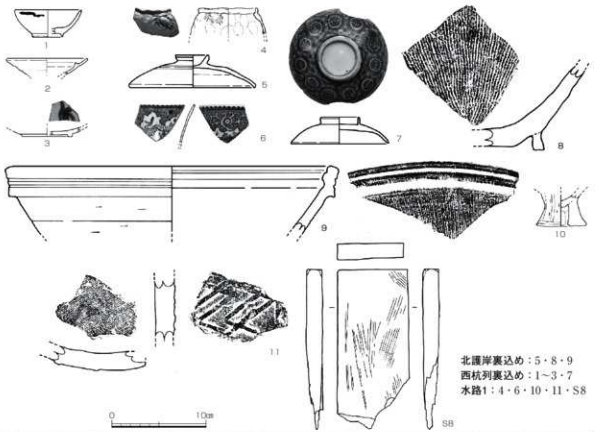


図62　SG1水路２（縮尺1/50）

の幅は1.3m程度、石組護岸時の水路幅は1.0m程度である。後者は水路１の構造・規模と合致するものであることを指摘しておきたい。また池部と水路との取りつき地点では水路に直交して竪杭４本が確認された（図62－A～D）。この位置に樋門等を設置し、排水時には除去したことが想定される。検出時、樋門にあたるものは残っていなかったが、板材（図69－W47）１点が出土しており、その可能性がある。

SG1からはコンテナ（28箱）換算で40箱分の土器・陶磁器・瓦・土製品・金属製品ほかと20箱分の木材・木製品が出土した。これらには護岸石組の石材は含まれない。前者40箱の出土地点の内訳は、池部から９箱、護岸（裏込めも含む）から７箱、水路１から23箱、水路２から１箱であった。水路１では樋門より外側と、石組を覆う埋土からの出土量が顕著であり、取水元となる水路から土砂とともに多くの遺物が流れ込み、樋門周辺に集中したことが想定される。一方、排水側の水路２や、池部からは比較的遺物量は少なく、池を淀えながら利用していたことが窺われる。

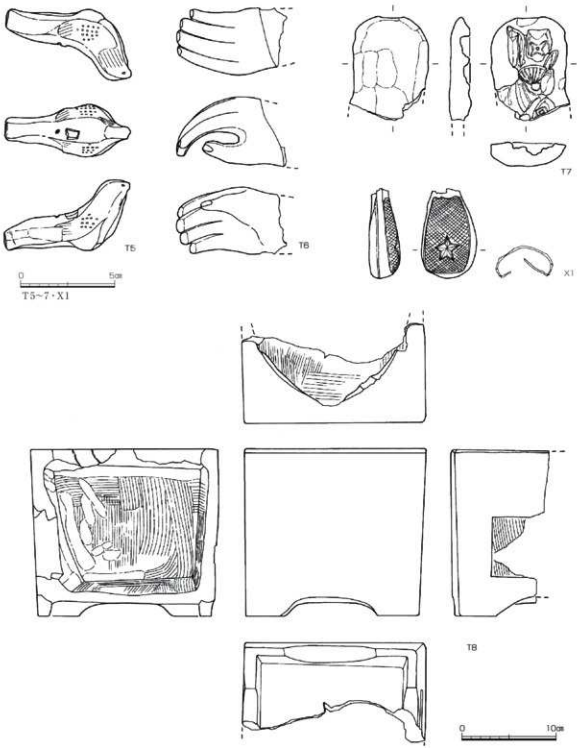


番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	肥前磁器　紅猪口	6.8	3	2.8	底4/9	内外面とも施釉、骨付は露胎、蜜色で文様描く	胎：灰白　釉：灰	緻密
2	鉄釉陶器　灯明皿	8.4	－	－	口1/6	内外面ともナデ	胎：灰　釉：施釉赤褐	緻密
3	灰釉陶器　瓶	－	5	－	底1/2	張り出し高台、高台部は露胎、内底に胎釉で文様。	文様：にぶい褐	緻密
4	土師器　急須	6	－	－	口1/4	外面に蟹の意匠を施付、口縁は受口状、南蛮焙急須。	橙	きめ細かい
5	灰釉陶器　蓋	13	－	3.4	口1/1	外面に2条の凹線、内面頂部のみ露胎。	胎：灰白　釉：灰	密
6	磁器染付　椀	－	－	－	－	内外面染付（型紙刷、合成コバルト）	胎：灰白	緻密
7	磁器染付　蓋	10	3.9	2.7	底1/1、口2/3	内外面染付（型紙刷、合成コバルト）	胎：白　釉：透明	緻密
8	備前焼　擂鉢	－	－	－	－	スリ目密、外面ナデ、高台あり	暗赤褐	径0.5－1mmの長石・石英を2％
9	関西系　擂鉢	34	－	－	口1/6	スリ目密、外面ケズリ、ロクロ時計回り、明石産か	にぶい赤	径1mmの長石・石英を2％
10	弥生土器　甕塩土器	－	5	－	底1/2	内：ナデ、外：指ケズリ、胴内：オサエ	暗褐／黒褐	細砂

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	特徴	色調	胎土
11	平瓦	7.5	10.3	2.1	凹：布目痕、凸：格子目タタキ	凹：灰　凸：灰	微砂

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	石材	特徴
S8	紙石	16.7	7.5	1.7	359.7	結板岩	下端欠損、紙面は1面

図63　SG1出土遺物１－土器・陶磁器・瓦・石器－（縮尺1/4）



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	特徴	色調	胎土
T5	鳩笛	6.6	2.8	3.7	24.3	土製。羽毛表現あり。顔料なし。尾の先端と背中に孔。完形	淺黄橙	きめ細かい
T6	仏像?	(5.8)	(3.6)	3.5	54.7	海獣。石手	極暗褐	緻密
T7	鋳型	5.4	3.9	1.2	22.3	土製。被熱痕なし。扇を持って踊る動物の意匠(猿か)	灰黄	きめ細かい
T8	炉?	10.2	19.2	17.6	1849.5	土製角型炉?。1/2残。上面は五徳等の置しの凹線痕あり。上縁に煤。燃焼部は二重構造になったものか。	橙	きめ細かい
X1	帆貝	4.8	2.8	0.1	6.5	ゴム製。背面にも同様の意匠		

図64　SG1出土遺物2　－土製品ほか－（縮尺1/2・1/4）

番号	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）		石材	特徴
S9	灯籠	（18.6）	（36.2）	9.3	6680	—	豊島石	基部か、上面に漏斗痕あり、内側列り貫き、縁に斜交して平行する浅い溝を作出
S10	灯籠	18.7	34.1	21.7	5640	完残	豊島石	笠部、内部刳り貫き、二つに分割
S11	灯籠	（8.6）	（15.9）	2.2	488	—	豊島石	中央部にスカシ孔
S12	五輪塔	10	11.8	16.6	2110	完残	豊島石	背面はほぼ未加工、塔頂部

図65　SG1出土遺物３－石製品オルソ図－（縮尺1/8）

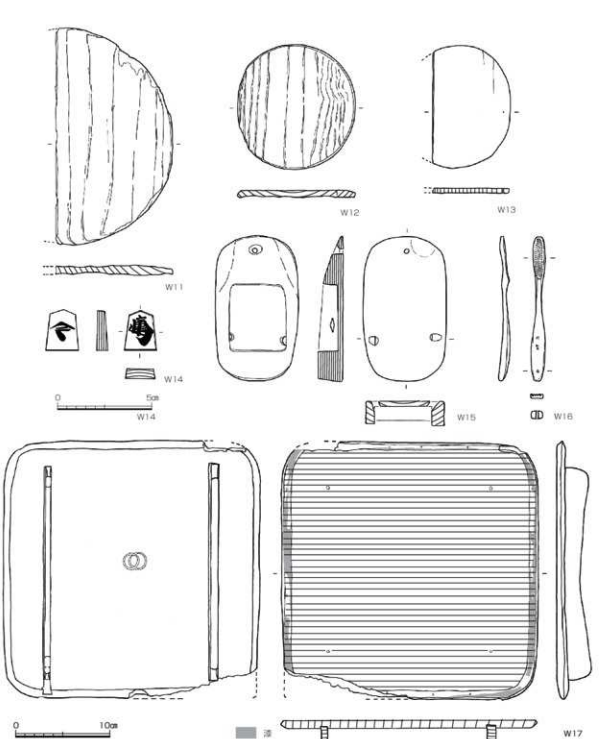
土器・陶磁器（図63）　肥前磁器・陶器・土師器・備前焼等のほか、瓦、弥生土器が含まれる。図63に示した遺物の時期は弥生時代後期～近代まで時期幅がある。弥生時代後期の製塩土器（同－10）、中世の平瓦（同－11）を除くと、江戸時代後期（同－１・５・８・９）あるいは江戸後期～近代（同－２～４、６・７）のものである。なかには肥前磁器紅猪口（同－１）や蟹の意匠のある急須（同－４）など、通常の民家ではみられない化粧道具や茶器が出土している。これらの遺物は造園時期～廃絶時期の幅を示すものであろう。

土製品・その他（図64）　Ｔ５は土製の鳩笛である。鳩の背中に１孔、尾の先に１孔が穿たれ、顔や羽毛が細かく表現される。江戸後期頃か[1]。Ｔ６は陶製で仏像等の右手部である。Ｔ７は土製鋳型で扁平な隅丸方形状を呈する。扇を手にした和装の猿が刻まれており、「三番叟」の意匠と考えられる。Ｔ８は土師質の角形煖炉と考えられる。出土した破片の上面の一部に煤が認められる以外は被熱痕跡がなく、漏斗式の二重構造であるものと思われる。江戸後期以降近代に比定される[2]。Ｘ１はゴム製の柄頭である。大正期以降と考えられる。

石器・石製品（図63・65）　図63－Ｓ８は粘板岩製の砥石で、砥面は一面確認された。東護岸石組の裏込めで検出した。Ｓ９～12はいずれも豊島石を材とする。S10は北護岸の石段の脇で、Ｓ11は瓦敷き中で検出された。Ｓ９と同じく石灯籠の存在を示す。S12は五輪塔の空風輪と考えられる。

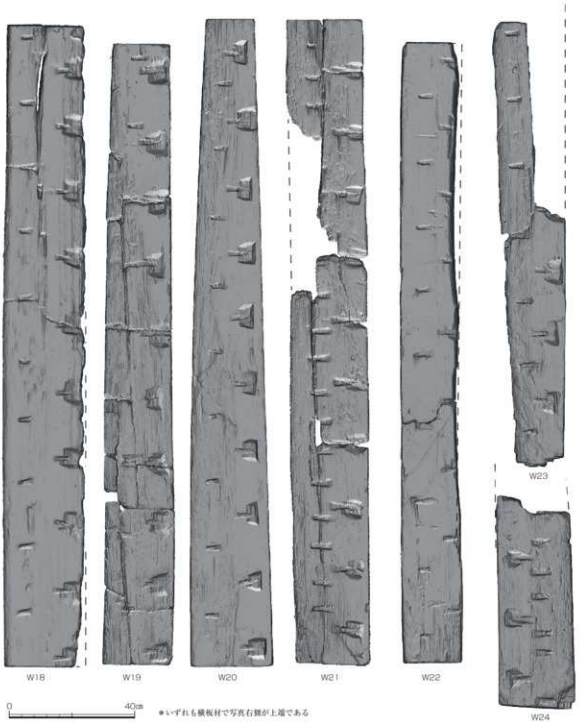
木製品（図66～69）　図66に木製品、図67～69に護岸に用いられた板材・杭・胴木の類を掲載した。曲物は池部でヒノキ製の底板（W12）、水路１でスギ製の底板（W11）・蓋（W13）が出土した。池部からは、将棋の駒（W14）・下駄（W15）・脚付盆（W17）が検出された。W14は「書き駒」で草書体で桂馬を描く。W15は無歯で透かし孔が施される。一部に朱彩が認められる。W17は方形を呈し、表面に朱、裏面及び別つくりの脚部には黒漆が施される。表面の縁部が欠失しているが、懐石膳と考えられる。W16は北護岸の検出中に出土した竹製の歯ブラシである。

図67－W18～24および図68－W25～41はいずれも魚溜を構成する木材である（図60参照）。W18～18は横板材で、前述したように図示している表面が魚溜の外側にあたり、右側が上端である。すべてアカマツを用い、図の裏面、つまり魚溜の内側には影響がないように、釘穴を上下２列に多数穿つ。W19・20のように下端側が狭まる形状の材があり、転用材を用いた可能性も考えられる。W25～41は丸木の先端を加工した杭である。W29・33・



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W11	曲物底板	22.8	12.2	0.8	スギ	板目	側面目釘孔なし、表裏面凹凸著しい
W12	曲物底板	13.1	12.3	0.7	ヒノキ	板目	側面目釘孔なし、側面上下は面取りにより先端がとがる、一枚づくり、表裏面凹凸著しい
W13	曲物蓋	12.9	8	0.5	スギ	板目	側面目釘孔なし、径0.1cmの綿通し孔あり、一枚づくり、表裏面平滑
W14	将棋駒	2.1	1.7	0.6	エゴノキ属	割材	表面「将棋」、裏面「金」、いずれも草書体、木地の表面に直接墨で文字を描いた「書き駒」
W15	下駄	15.2	8.7	2.6	スギ	板目	無歯、両側面にはそれぞれ楕形の透孔が穿たれる、透孔部分に朱彩残存、鼻緒孔のうち前壺は中軸やや右に位置することから左足用と判断
W16	歯ブラシ	15.2	1.5	0.9	タケ		竹製、ブラシ部は欠損、柄に「特製」の刻書
W17	蓋	27.1	26.9	0.8	ヒノキ	柾目	表面には縁部が接合されていたとみられるが欠損、縁部は各辺4カ所の木製目釘で固定、表面は縁部接合以前に浅いケビキ状の溝を施した後全面朱彩を施し、縁部接合後に裏面もあわせて黒漆を塗布、脚部は別づくりで、それぞれ2カ所の鉄目釘で蓋に固定、刻切側にアタリ痕、裏面中央には幅違い板の側目
	脚部				ヒノキ	板目	

図66　SG1出土遺物4 － 木製品 －（縮尺1/2・1/4）

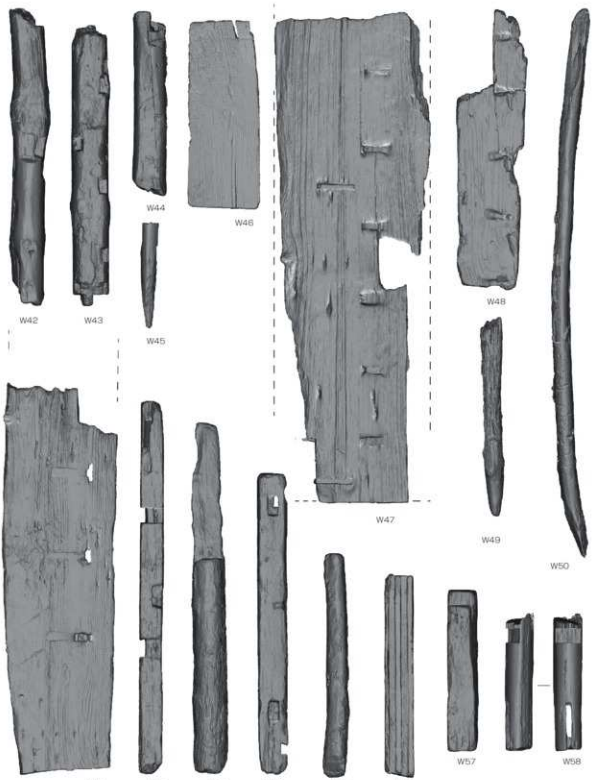


＊いずれも横板材で写真右側が上端である

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W18	板材	203.3	25.6	2.4	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘。
W19	板材	197.3	21.2	3.3	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘。他個体からの貰入なし。先端に向かって片側がすぼまる形態(転用か)。16点接合
W20	板材	205.4	23	4.1	アカマツ	板目	完形。上下方向に釘。他個体からの貰入なし。先端に向かって片側がすぼまる形態(転用か)
W21	板材	203	24.2	2.2	アカマツ	板目	木枠南辺上から1枚目の西端の破片。略完形。上下方向に釘。他個体からの貰入なし
W22	板材	196.6	17.8	3	アカマツ	板目	上下方向に釘。他個体からの貰入なし。片側のみ他個体に直接打ち付けが
W23	板材	141.3	19.2	2.8	アカマツ	板目	上下方向に釘。他個体からの貰入なし
W24	板材	70.3	23.2	2.6	アカマツ	板目	上下方向に釘。他個体からの貰入なし

図67　SG1出土遺物5－木製品オルソ図－（縮尺1/8）

図68　SG1出土遺物6 －木製品オルソ図－（縮尺1/8）



W42～45：南護岸　W46：水路2　W47～50：西杭列　W51～58：水路1

図69　SG1出土遺物７－木製品オルソ図－（縮尺1/8）

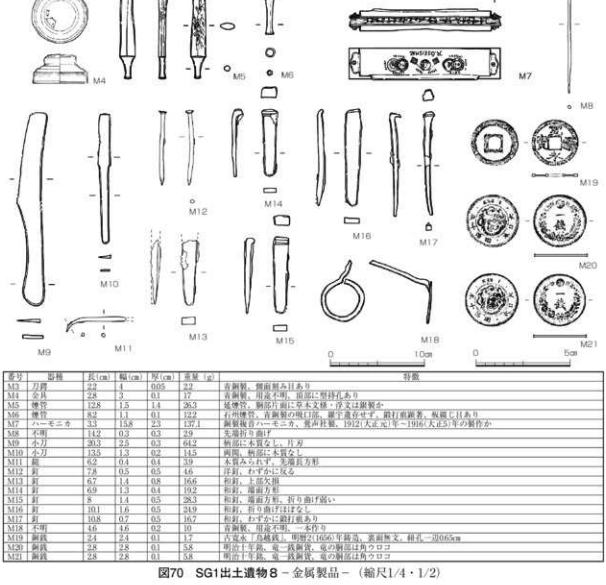
図68・69観察表

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W25	杭	123.0	6.0	5.3	クリ	丸木	先端3面
W26	杭	122.0	3.8	4.4	クリ	丸木	先端3面ケズリで面残し。計4面
W27	杭	124.9	8.7	8.2	クリ	丸木	先端3面。ただし面ケズリ残しで4面
W28	杭	118.6	6.2	6.6	クリ	丸木	先端3面
W29	杭	94.3	6.0	5.5	アカマツ	丸木	先端4面。節残る
W30	杭	114.1	4.6	4.4	クリ	丸木	先端1面。ただし面ケズリ残しで2面
W31	杭	114.7	4.6	4.1	クリ	丸木	先端2面
W32	杭	131.0	6.6	5.4	クリ	丸木	先端3面
W33	杭	177.4	5.6	5.8	アカマツ	丸木	先端3面
W34	杭	130.2	7.7	7.3	アカマツ	丸木	先端4面。専用杭。節残る
W35	杭	118.7	7.9	6.5	クリ	丸木	先端3面
W36	杭	125.5	5.8	5.6	クリ	丸木	先端3面
W37	杭	123.2	4.8	4.8	クリ	丸木	先端3面
W38	杭	131.5	7.5	7.7	クリ	丸木	先端3面
W39	杭	122.0	6.5	7.2	クリ	丸木	先端3面
W40	杭	87.7	6.9	7.8	クリ	丸木	先端3面。転用
W41	杭	71.5	7.5	6.9	クリ	丸木	形態的に胴木の可能性高い。杭だとすれば胴木の転用か
W42	胴木	94.0	11.5	9.7	アカマツ	丸木	上下とも欠損。浅いほぞ状の加工あり
W43	胴木	88.8	11.3	11.4	アカマツ	丸木	上下とも欠損。ほぞ状の加工あり
W44	胴木	56.6	10.2	7.0	アカマツ	丸木	転用。ほぞ加工あり
W45	杭	33.2	4.6	4.8	アカマツ	丸木	先端3面
W46	板材	59.9	22.2	0.93	スギ	板目	板材。両面とも平滑
W47	板材	155.6	47.9	2.8	スギ	追柾目	一方向から釘をうち、鎹により2枚の板(別材)を連結。釘打ち側所には一文字の木製鎹せ。反対側に釘貫入なし
W48	板材	88.9	21.1	2.1	アカマツ	板目	1方向にのみ釘。上下端か、他個体からの貫入なし
W49	杭	62.7	6.0	4.9	クリ	丸木	先端丸く成形
W50	杭	173.8	5.5	4.8	クリ	丸木	先端3面
W51	板材	123.1	35.3	3.5	スギ	板目	樋門東側南側板の一部。一方向から釘、鎹遺存。鎹は両面に存在。釘打ち側所には一文字の木製鎹せ。反対側に釘貫入なし
W52	胴木	118.1	7.2	8.6	クリ	丸木	転用
W53	胴木	111.1	10.2	8.4	クリ	丸木	転用か。1カ所切り欠き
W54	胴木	94.0	9.0	6.0	クリ	丸木	転用
W55	胴木	70.9	6.8	5.9	コナラ属アカガシ亜属	丸木	形状は杭。杭を転用か
W56	胴木	64.5	8.8	4.4	アカマツ	割材	樋の敷居部を転用
W57	胴木	51.0	9.4	10.0	アカマツ	割材	転用。各所に釘孔あり
W58	胴木	43.4	8.3	7.5	スギ	半割材	転用

34がアカマツである以外はクリを用いている。杭は魚溜の一辺に対し原則４本を打って留めたもので、W33・34は東辺に変則的に打たれた杭と考えられる。構築時はクリ杭を使用していたが、補強等のため、加えて打った杭はアカマツであったとみられる。同様に西辺中央のW41も変則的な位置にあり、こちらは他の多くの杭と同じくクリを用いてはいるが、ほぞ穴加工が認められるなど明らかに転用材であり、これも補強のために後から加えられた杭と考えられる。

図69には魚溜以外の地点の材を掲載した。W42～44は南護岸の石組基礎の胴木、W45は杭である。いずれもアカマツを材とする。W47～50は西杭列を構成する横板材（W47・48）とそれらを留める杭（W49・50）である。W47・48に見られる釘穴を上下２列に穿つ点、図の裏面は平滑で釘の痕跡が認められない特徴は、前述の魚溜横板材と同様である。ただW47はスギの板を２枚、鎹で連結して繋いだもので、W48および魚溜の横板材がいずれもアカマツである点で異なる。W47は水路２で検出した。池部と水路２との連結地点で出土し、樋門材の可能性が考えられる。W51～58は水路１で検出した横板材（W51）と杭（W52～58）である。W51は水路１樋門より上流側の護岸横板材で、スギを材とし片面に釘穴を施す点、鎹を用いる点は上述のW47と類似する。W52～58は水路１南側護岸基礎の胴木である。丸木・割材・半割材が見られ、樹種もクリ・アカマツ・スギ等が混在する。胴木の形状も様々であり、転用材と考えられる。

金属製品（図70）　用途不明も含め19点を掲載した。池部より刀鍔（M３）・煙管（M５）・釘（M13・17）・銅銭（M19～21）が出土した。M５は刀豆型延煙管で完形である。胴部に草花文様が施される。銅銭は２種あり、寛永通宝（M19）と竜一銭銅貨（M20・21）である。前者は1656（明暦２）年鋳造、後者は「明治10年」銘が認められ、1877（明治10）年鋳造である。石組護岸から煙管（M６）・小刀（M９）・鎹（M11）・釘（M12）・不明金具（M４）が出土した。M６は石州煙管の吸い口である。水路１からハーモニカ（M７）・小刀（M10）・釘（M14～16）・不明製品（M８）が出土した。M７は鶯声社製ハーモニカで、裏面に社名と1912・1916の銘、表面の「The clarion」は製品名であろう。鶯声社によるハーモニカ製造は1910（明治43）年以降1917（大正６）年である。M



番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量（g）	特徴
M3	刀鐔	22	4	0.05	22	青銅製。側面無み目あり
M4	金具	28	3	0.1	17	青銅製。用途不明。面部に型持孔あり
M5	煙管	12.8	1.5	1.4	36.3	延煙管。側部片面に草木文様・浮文は銀製か
M6	煙管	8.2	1.1	0.1	12.2	石州煙管。青銅製の吸口部。雁手遺存せず。殺打痕跡著。板縁じ目あり
M7	ハーモニカ	33	15.8	2.3	137.1	鋼製複音ハーモニカ。発声枠製。1912(大正元)年～1916(大正5)年の製作か
M8	不明	142	0.3	0.3	29	先端折り曲げ
M9	小刀	20.3	2.5	0.3	64.2	物部に木質なし。片刃
M10	小刀	13.5	1.3	0.2	14.5	両関。柄部に木質なし
M11	鏃	6.2	0.4	0.4	3.9	本質みられず。先端長方形
M12	釘	7.8	0.5	0.5	4.6	洋釘。わずかに反る
M13	釘	6.7	1.4	0.8	16.6	和釘。上部欠損
M14	釘	6.9	1.3	0.4	19.2	和釘。端面方形
M15	釘	8	1.4	0.5	28.3	和釘。端面方形。折り曲げ弱い
M16	釘	10.1	1.6	0.5	34.9	和釘。折り曲げほぼなし
M17	釘	10.8	0.7	0.5	16.7	和釘。わずかに殺打痕あり
M18	不明	4.6	4.6	0.2	10	青銅製。用途不明。一本作り
M19	銅銭	2.4	2.4	0.1	1.7	古寛永「島越銭」。明暦2(1656)年鋳造。裏面無文。穿孔一辺0.65cm
M20	銅銭	2.8	2.8	0.1	5.8	明治7年銭。是一銭銅貨。竜の胴部は角ウロコ
M21	銅銭	2.8	2.8	0.1	5.8	明治7年銭。是一銭銅貨。竜の胴部は角ウロコ

図70　SG1出土遺物８－金属製品－（縮尺1/4・1/2）

６は銘より1912（大正元）年～1916（大正５）年頃製造と考えられる。

以上、本遺構の出土遺物について記した。時期が判明する遺物では江戸後期～近代（大正５年）の幅が示される。池部と護岸には確実に江戸後期のものがある一方、水路１では1916年を下限とする状況である。本遺構の下限については写真資料の存在から1925（大正14）年に岡山医科大学へ土地が移管され、その後、1929（昭和４）年には消滅したことが明らかである。上限、つまり庭園の造園時期については江戸後期以降であり詳細については出土遺物からは判然としない。本遺構の時期に関しては第５章でも検討する。

註

1）岡山県教育委員会2005『入田堀ノ内遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192）、墓83から２点の出土がある。18～19世紀の幼児埋葬墓の副葬品とされる。

2）小林謙一　2003「近世瓦質土師質火鉢・焜炉類の生産と使用－東日本を中心に－」『四国と周辺の土器Ⅱ－火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態－』四国城下町研究会、㈶京都市埋蔵文化財研究所2007『長岡京跡・淀城跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－23）

溝７（図71～74　図版27）

調査区南半、AZ・BA04区に位置する。北東から南西に走行する溝で、幅2.0～2.4m、長さ４mを検出した。前述した庭園遺構SG1の水路１の南５mを並走する。本遺構の東端は調査区外、西端は庭園遺構SG1に切られる。検出面の標高は1.35m、底面の標高は東端で0.5m、西端で0.45mで、検出面からの深さは0.85mを測る。断面形は、下部が幅0.4mの平底から0.2mほど立ち上がる逆台形状をなし、それより上位は緩やかに広がる椀型となる２段掘りである。西端では下部のみ確認している。

西端部には南側に板柵護岸が設置される。ちょうど断面下部の壁の護岸となる（図71－bb'断面）。幅0.5m、高さ0.05～0.1mの横板材４枚を２本の竪杭で留める構造である。板の厚みは１cm、杭は径４cmを測る。最上部の１枚は破損する。この板柵護岸の背後には径10cm、長さ2.6mの丸木を４本の杭で留める胴木構造が認められた。胴木の設置レベルは標高0.75～0.9mを測る。竪杭４本は0.7～1.0m間隔で胴木を留める。胴木周辺では５～20cm大の礫が散在していたが、庭園遺構の護岸の状況から本来石組があった可能性が考えられる。しかし竪杭は検出した４本以外になく、抜き取り痕も認められなかったことから、板柵護岸、石組護岸とも部分的に採用されていたのかもしれない。

埋土はaa'断面で17層、bb'断面で７層に分層した。aa'断面では１～９層が黒灰色～灰色砂質土、10層暗灰色粘質土、11～17層が暗灰色砂質土でいずれも埋め土であろう。bb'断面では１～４層が茶灰色粘質土で埋め土であり、５～７層は板柵護岸の裏込め土にあたる。

溝７からはコンテナ（28/24）17箱の遺物が出土した。その大半は弥生時代後期の土器類であり、図示したように接合するものが多い特徴を有する。本遺構を埋め戻す際に混入したと考えられ、前述の土坑４や土坑５あるいは未知の遺構に由来する可能性がある。本来の溝の時期を示す遺物としては下駄（図73－W59）１点がある。左足用途考えられる差歯下駄である。近世以降に比定される。

本遺構の西端はSG1に切られ不明である。底面レベルがSG1より高いことから西の行方は定かでない。ただ方向や、護岸の方法など水路１との類似点を重視するならば、SG1の前身の池等への取水機能が想定される。本遺構の時期については近世以降とし、詳細は不明である。

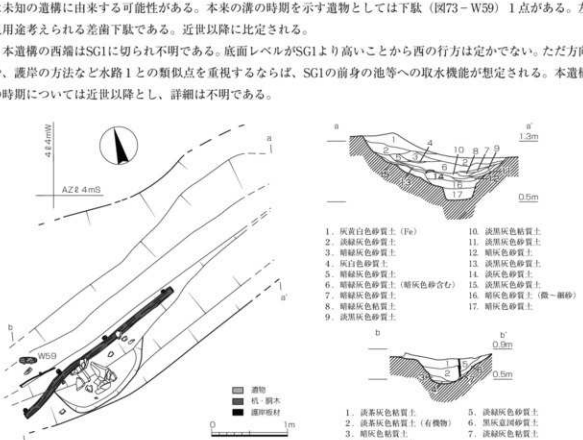
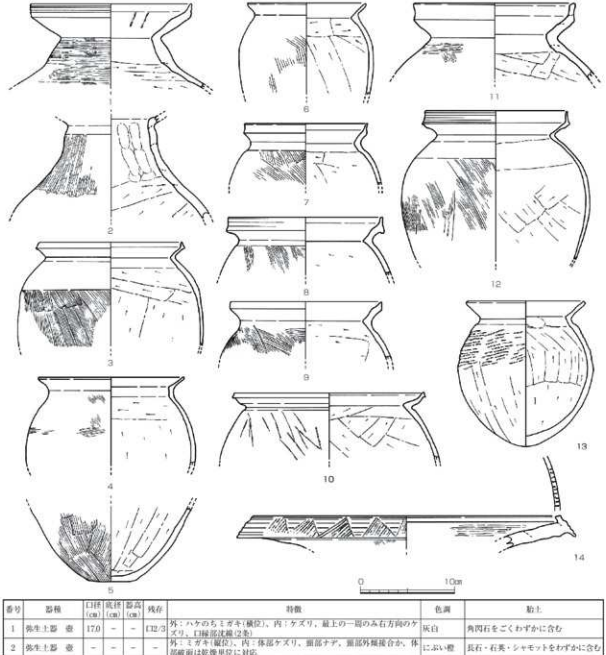
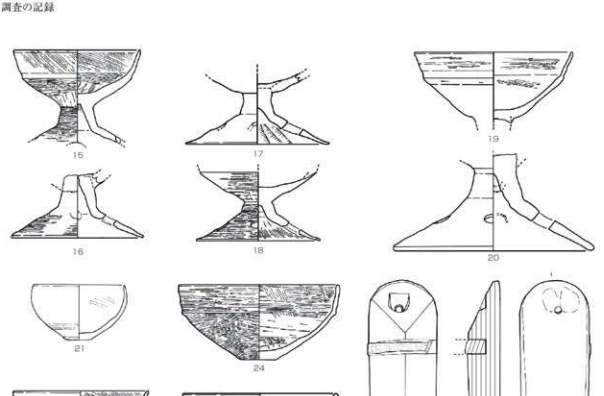


図71　溝７（縮尺1/50）



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　壺	17.0	－	－	口2/3	外：ハケのち ミガキ(横位)、内：ケズリ、最上の一周のみ石方向のケズリ、口縁部沈線(2条)	灰白	角閃石をごくわずかに含む
2	弥生土器　壺	－	－	－	－	外：ミガキ(縦位)、内：体部ケズリ、頸部ナデ、頸部外端接合か、体部破面は乾燥早位に対応	にぶい橙	長石・石英・シャモットをわずかに含む
3	弥生土器　甕	15.0	－	－	口2/3	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左上がりのケズリ、口縁部上方へつまみ上げ、外面に煤付着	にぶい黄橙	1mmほどの長石・石英を2%
4	弥生土器　甕	15.4	－	－	口1/4	外：ハケ(ヌテハケのち短部付近ヨコハケ)、摩滅顕著、内：ケズリ、口：煤付着	浅黄	1mmほどの長石・石英を3%
5	弥生土器　甕	－	5	－	底1/2	外：ハケ、内：ケズリ、底：ハケ、平底、外面・底部とも煤付着、黒斑付着	褐灰	1mmほどの長石を1%
6	弥生土器　甕	12.7	－	－	口1/4	外：ハケ、摩滅顕著、内：ケズリ	橙	0.5mm以どの長石・石英をわずかに含む
7	弥生土器　甕	13.0	－	－	口2/3	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左方向へのケズリ、口縁部・外面に煤付着	にぶい橙	角閃石をごくわずかに含む
8	弥生土器　甕	16.2	－	－	口5/6	外：ハケ、内：ケズリ、頸部付近は左方向へのケズリ、口縁部下方へも及ぶ	灰白	1mmほどの砂礫、シャモットを3%
9	弥生土器　甕	16.0	－	－	口1/2	外：ハケ、内：ケズリ、左上がりのケズリ、外面のハケはアトランダム	黄灰	0.5～1mm以どの長石・石英を2%
10	弥生土器　甕	20.0	－	－	－	外：板ナデ、内：ケズリ、頸部付近は右上がりのケズリ	灰白	0.5～1mm以どの長石・石英を2%
11	弥生土器　甕	17.0	－	－	口2/3	外：ミガキ(縦位のち横位)、内：体部ケズリ(左上がり)、口：文様なし、重ケなし	灰黄	長石・石英を2%
12	土師器　甕	15.0	－	－	口1/4	外：ハケのち ミガキ(まばら)、内：ケズリ、頸部付近は右方向へ、口縁部沈線、体部黒斑付着	黄灰	角閃石をわずかに含む
13	弥生土器　甕	12.6	－	15.2	－	外：下手ケズリ(下→上)、上手タタキ(右上がり)、内：ケズリ、底部に煤付着、体部に黒斑付着	黄灰	0.5mm以どの長石・石英を2%
14	弥生土器　器台	32.2	－	－	－	外：ハケのちナデ、内：ミガキ(横位)、端部に凹線文ののち刺画文、端部上面に半截竹管文	にぶい黄橙	角閃石をわずかに含む

図72　溝7出土遺物1（縮尺1/4）



番号	器種		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	特徴	色調	胎土
15	弥生土器	高杯	13.2	－	－	口1/2	外：脚部ミガキ、杯部ミガキ・ケズリ、口縁部ハケ、内：杯部ミガキ・ケズリ、口縁部ハケ	橙	角閃石をごくわずかに含む
16	弥生土器	高杯	－	13.8	－	底3/9	外：ミガキ(横位)、内：ナデ、円形スカシ孔4方向、脚部広い範囲に黒斑付着	にぶい黄	角閃石をごくわずかに含む
17	弥生土器	高杯	－	15	－	－	外：摩滅、内：端部付近ハケ、柱部ナデ、円形スカシ孔4方向	橙	植良、顕著な紋物含まず
18	弥生土器	高杯	－	13	－	底1/2	外：ミガキ(横位)、杯部下面のみケズリ、内：脚部ハケ、杯部摩滅、円形スカシ孔4方向	橙	シャモット
19	弥生土器	高杯	16.6	－	－	口1/5	外：ミガキ(横位)、内：ミガキ(横位)、内外面とも摩滅著しい	橙	シャモット
20	弥生土器	高杯	－	11	－	底1/2	外：摩滅、内：ナデ、円形スカシ孔4方向、脚部上面のうち杯部接合箇所に刺み目あり、黒斑付着	にぶい橙	シャモットをごくわずかに含む
21	弥生土器	鉢	－	2.8	5.7	底1/1	外：ミガキ(横位)、内：ハケのちナデ、底：ケズリ、平底	橙	シャモットわずかに含む
22	弥生土器	鉢	14.0	4.8	7	口1/3	外：ナデ、内：ハケ、体部黒斑付着、台付	にぶい黄橙	植良、顕著な紋物含まず
23	弥生土器	鉢	14.8	4	9.3	口2/3	外：ハケのちミガキ(まばら)、内：ケズリ、平底、口縁端部摩滅、体部黒斑付着	橙	シャモットをごくわずかに含む
24	弥生土器	鉢	16.5	3.6	7.9	口1/2	外：ハケのちミガキ(底面も含めてミガキを充足)、内：ハケのちミガキ、中位のみケズリ	橙	シャモットをごくわずかに含む
25	弥生土器	鉢	16.4	3.6	8.8	口3/4	外：下半ミガキ(横位)、上半ケズリ、内：ミガキ(横位)、先行して板状工具で調整、底部黒斑付着	橙	角閃石をわずかに含む
26	土師器	鉢	10.5	－	5.9	口2/3	外：オサエ(指の圧痕顕著)、内：ナデ、底部付近指オサエ痕顕著、粗製、底部丸底、体部黒斑付着	にぶい褐	1mm以上の長石・石英を含む。角閃石

番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	樹種		木取り	特徴
W59	下駄（本体） 下駄（歯）	22.4	7.2	3.3	スギ ハンノキ属ハンノキ節		柾目 板目	差歯下駄、裏面は横断面三角形を呈し、底面手前には円形の彫り込みを有する、鼻緒孔のうち前歯は中軸やや右に位置することから左足用と判断、前歯周辺はやや摩滅

図73　溝7出土遺物2（縮尺1/4）

庭園遺構２（SG2）（図74～79　図版28・29）

調査区北端、AW04・05～AX05・06区に位置する。調査区東端から直線的に西へ延びる水路と、水路取りつき部から南側に向かい弧を描く平面形を呈する池部からなる。水路の北岸及び池部の北側は調査区外にあたり、また６ライン西２ｍより以西についても破壊され残っておらず、SG2の全形は不明である。水路及び池部には石組護岸が採用されており、水路とくびれ部までの東半と、弧状の池部である西半とに分けて、以下に記載する。

東半（図75・76）　調査区東端から５ライン１ｍ西までを東半として記す。水路は南

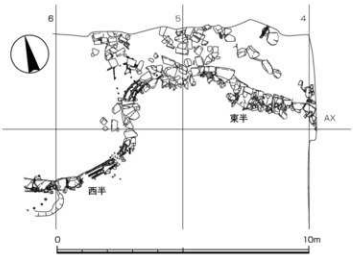


図74　SG2概要（縮尺1/150）

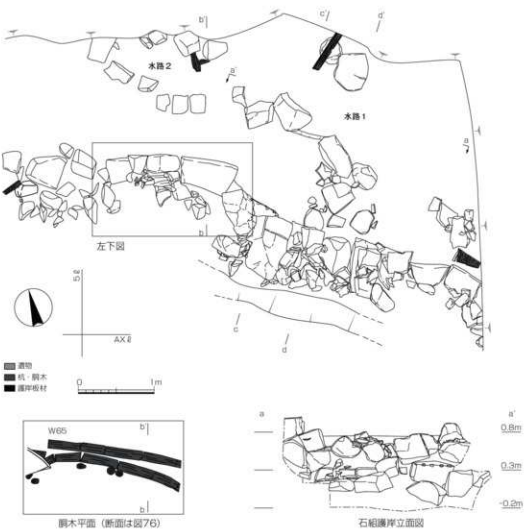


図75　SG2東半（縮尺1/50）

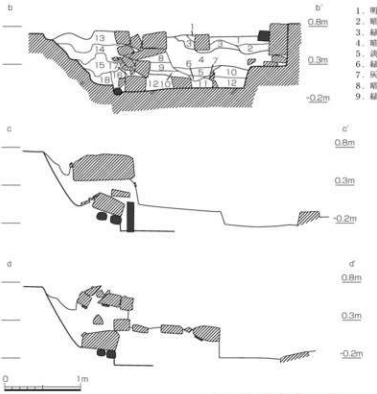


図76　SG2東半断面（縮尺1/50）

側の護岸の状況がよく残り、北岸についてはbb'断面で示されるわずかな情報を手掛かりにその構造について記述する。

水路の検出面の標高は0.8m、流水部の底面標高はbb'断面で－0.1m、dd'断面で－0.2mと東へ傾斜する。石組護岸の内法幅で1.2mを測る。bb'断面は池部と水路の取りつき部にあたり、ここで観察される埋土は、1～3層、4～7層および8～11層が水路内埋土で、新旧に分けられる。まず古段階の状況は、12～18層が石組護岸に伴う埋土および裏込め土である。堀方は北側が不明であるが、底面で幅2.1m、上面で3.2m以上、深さ0.8m以上を測る。古段階の水路（水路1）の形状は堀方底面から2段石組を設置し、その際の裏込め土が15～18層である。石組から0.3m北側に1石を設置し、その間を12層で充填する。南側護岸は上記のように復元され、石組の北側にテラスを設ける形状である。cc'断面・dd'断面はこの最古段階の水路を示したもので、テラス面の上面標高は0～0.2mを測る。

次にbb'断面で観察されるのが新段階の水路（水路2）である。新段階の水路2は石組護岸をさらに上位へ2段積み、その位置はやや北側へせり出している。その際の裏込め土が13・14層、水路埋土は4～7層である。ここではさらに新段階の改修が認められ、最新段階の水路は幅0.7m、深さ0.25mの小規模な形状となる。その埋土は1～3層である。

石組護岸の構造は胴木を設置し杭で留めたうえに石を積むもので、東半については胴木は径10cm、長さ1.6～1.8mの丸木を2本用いている。このうち、取りつき部の胴木は、0.4m間隔で切れ目をいれ、カーブを創出する形状である（図75左下）。石組を構成する石は幅0.4～0.6m、高さ0.2～0.3m、奥行0.2～0.3mの切石が主体で、立面図にみるように矢穴が認められるものもある。

西半（図77・78）　5ライン西1m地点から南へ弧状に張りだす池部を西半として記す。検出面の標高は1.1m、底面の標高は0.6mで、検出面からの深さ0.5mを測る。S字状にカーブし、6ライン西2m地点までの石組護岸を検出した。以西は不明である。石組護岸の堀方は幅0.9m、深さ0.1mの溝状を呈するもので、底面の標高は0.5m

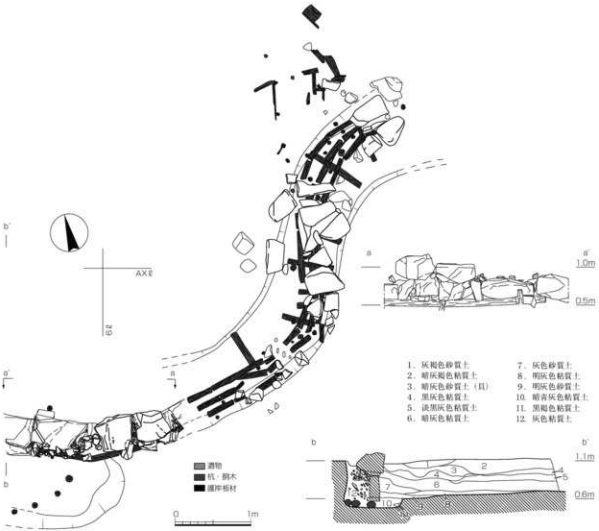


図77　SG2西半（縮尺1/50）

を測る。S字状をなす箇所は、長さ0.4～0.9mの枕木を0.2～0.8mの間隔で設置し、その上部に胴木３本並べるものである。枕木は径８～10cmの丸木である（図78　図版29ｄ）。胴木は径10cmの丸木に0.4m間隔で切れ目をいれ、カーブにあわせて弧状に設置するものである（図78　図版29ｃ）。枕木と胴木の間を縫うように、30本以上の杭が確認される。こうした木材による基礎構造は、石組の重量で沈下することを防ぐものと考えられる。西端では直線状に近い形状をなすためか、枕木は検出されていない。胴木については、同様に切れ目の入るものを３本並べる構造である。

石組についてはS字状部では攪乱され、原位置を留めるものは極めて少なかった。西端の状況から、北面あるいは北西側に面を揃えて、幅0.3～0.55m、高さ0.25～0.3m、奥行0.35～0.4mの切石を２段積む（図77－aa'見通し図版28ｅ）。隙間に0.1～0.2mの石を充填する箇所もあり、不揃いである。背後に裏込めである５～10cm大の礫が散在する。東北端では護岸堀方に直交する方向で２列の杭列が確認された。東側の列は径８cm程の杭を25cm間隔で打たれた３本からなる。西側の列は径８cmの杭４本から構成され、その間隔は20～40cmで不揃いである。どちらの列も北側に継続するか不明であり、断定は難しいが、杭列の方向と位置を考慮すると、樋門を構成する可能性が考えられる。

SG2の構造を総合すると、石組護岸を有する池とそれに取りつく水路から構成される。水路は東へ傾斜が見ら

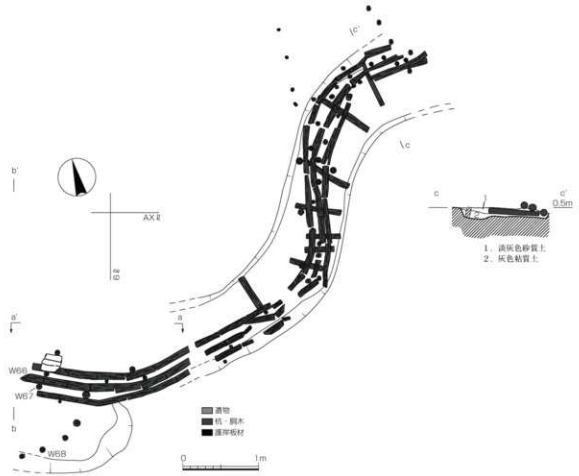
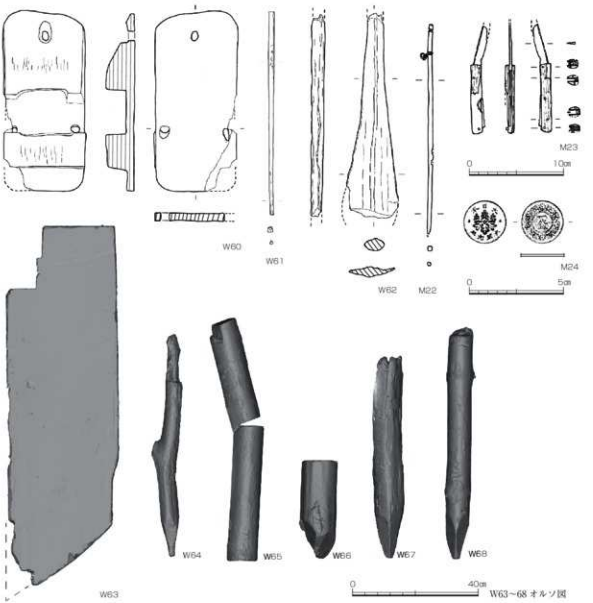


図78　SG2西半（石除去後）（縮尺1/50）

れ、排水路の可能性が高い。

SG2からはコンテナ（28$^{\frac{\text{ヨ}}{\text{ヲ}}}$）７箱の遺物が出土した。これには石組石材は含まない。陶磁器、瓦、木製品のほか金属製品が含まれ、うち12点を掲載した（図79）。陶磁器・瓦は近世以降のものであり、図化可能なものはみられない。木製品のうちW51はケヤキ製の下駄である。池部から出土した。W61はスギの箸で東端水路から、W62はヒノキ製のしゃもじで石組護岸の西端の胴木付近で確認した。W63～65は東半水路で、W66～68は西半西端の石組護岸で出土した。W65は胴木の一部であり、切れ目の部分で図の上下とも欠損する。胴木はいずれもアカマツを用いる。W64・67・68は胴木を留める杭である。アカマツ・クリが認められる。下端の加工は４面施される。金属製品３点のうちM22は火箸、M23はナイフである。M23は折りたたみ式で柄部は青銅製の芯に木製鞘を貼り合わせる。図の裏面では木製部分が一部欠損する。刃部も先端が欠損し、一部刃こぼれも認められる。また柄部下方（dd'断面）に欠損した刃部が挟まったままで残る。東端の古段階水路理土から出土した。M24は桐一銭銅貨で「大正九年」銘を有する。東端の水路１から出土した。このほか水路２からは「岡山大学病院」銘のある陶器が確認されている。

本遺構の時期は近代とし、造園年代は確定できないが水路１は一銭銅貨を、水路２は病院銘のある遺物を手掛かりに埋没時期を押さえることができよう。本遺構の位置する敷地は1928（昭和３）年に岡山医科大学の所有となっており、その年が一つの下限となる。水路部分は改修を経つつ大正年間にわたり機能しており、昭和の早い段階に廃棄されたものと考えられる。



W63～68 オルソ図

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W60	下駄	28.8	8.5	0.8	ケヤキ	柾目	歯面下駄。鼻緒孔のうち前壁は中軸上に穿たれる。左側先端のみ摩滅著しい
W61	箸	21.3	0.5	0.5	スギ	柾目	断の断面形状は四角形、先端断面形状は七角形、柄上部に墨書あり、判読不可
W62	しゃもじ	21.4	3.2	1.2	ヒノキ	板目	表裏面凹凸著しい、両端欠損
W63	板材	113.9	34.7	2	アカマツ	板目	表面平滑、片側小口に方形の刳り込み（釘1点あり）、反対側小口は斜めにカット。転用か
W64	杭	70.4	5.4	4.9	クリ	丸木	先端4面。樹皮あり、枝最跡痕
W65	側木	76.8	9.3	8.4	アカマツ	丸木	専用。もう一方の面はさらに伸びる
W66	側木	30.9	10.7	9.3	アカマツ	丸木	転用か
W67	杭	63.5	8.8	9	クリ	丸木	先端4面
W68	杭	73.2	7.3	7	アカマツ	丸木	先端4面

番号	器種	長	幅	厚	重量（g）	特徴
M22	火箸	22.1	0.4	0.4	23.4	2箇所で2本を連結。連結金具は銅製
M23	折り畳み式ナイフ	11.3	1.3	1	13.8	鉄製刃部、断面「コ」字形の青銅製鉄具の両面に木製装具を目釘で固定
M24	青銅銭	2.3	2.3	0.1	3.3	大正九年鉛、銅一銭青銅貨

図79　SG2出土遺物（縮尺1/2・1/4・1/8）

第5節　包含層ほかの出土遺物

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した遺物はコンテナ（28㎝）37箱を数える。その中で注目される

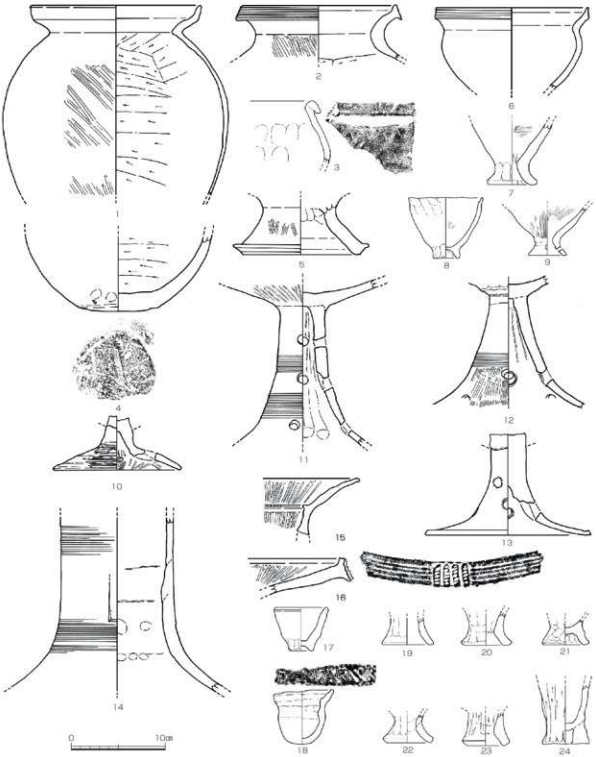


図80　包含層ほか出土遺物1（縮尺1/4）

番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(1/6以下は−)	特徴	色調	胎土
1	弥生土器　甕	17.8	−	−	1/3	内：ナデ・オサエ・筋ケズリ，外：ナデ・ミガキ，内面に植物痕	灰白	細砂　2～5mm大の礫
2	弥生土器　甕	16×16.3	−	−	1/1	内：筋ケズリ・横ナデ，外：斜ミガキ・横ナデ，口縁部に5条の波状文を施す	内：淺黄橙 外：淺黄橙・明橙	細砂　白色粒
3	弥生土器　甕	−	−	−	−	内：ナデ・オサエ，外：ナデ・ミガキ，口縁部・体部に3段の波状文を配す	灰黄	細砂・白色粒・赤色粒
4	弥生土器　壺	−	8.8	−	1/3	内：筋ケズリ，外：ナデ・オサエ，外底：ナデ，種子圧痕	淡橙	細砂　白色粒
5	弥生土器　台付壺	−	12.2	−	1/1	内：ナデ・オサエ，外：ハケ目，内外面磨滅，脚部3条の沈線，端部2条の沈線	灰白	細砂　白色粒
6	弥生土器　鉢	15.9	−	−	1/3	内：ミガキ，外：ナデ・オサエ・筋ケズリ，口縁部3条の沈線，内外面磨滅，煤	明橙	微砂　白色粒
7	弥生土器　台付鉢	−	4.8	−	1/3	台内：ナデ・オサエ，体内：ハケ目・絞り痕，外：ナデ，内面に調整痕あり，磨滅	内：淺黄橙・淡橙 外：淺黄橙	微砂・白色粒
8	弥生土器　台付鉢	−	3×31	6.1	1/1	内：横ハケメ→部残存，外：オサエ・ナデ，内面磨滅，内外面煤	内：にぶい橙	微砂　2～4mm大の礫を含む
9	弥生土器　台付鉢	−	3.9	−	1/3	内：ミガキ，内底：ナデ，外：ハケ目，底部欠損調整，脚部円孔1カ所残存(径4mm)	内：にぶい黄橙， 外：淺黄橙	微砂・白色粒・黒色粒
10	弥生土器　高杯	−	13.2	−	1/1	内：ナデ，ミガキ・絞り痕，外：ミガキ，円形透かし孔(径1.2cm)対角線上に4カ所，内外面磨滅，煤	内：にぶい橙 外：橙	微砂　水通胎土
11	弥生土器　高杯	−	−	−		杯外：ミガキ，脚内：絞り痕・オサエ，脚外：ナデ，1段目透かし孔は4方向円孔に帯の対角線上，3カ所貫通，2段目4方向円孔に帯の対角線上，4カ所貫通，3段目は5カ所のみ残存(円孔貫通)，残り2カ所は土部のみ残存，透かし孔間に2段の沈線がある，1段目は赤，2段目は10色	内：淡橙 外：橙～淡橙	微砂　白色粒
12	弥生土器　高杯	−	−	−		杯外：オサエ，脚内：絞り痕，脚外：ハケ目・ミガキ，脚部中央に8条の沈線，沈線の下に円形の透かし穴(上段2カ所残存・下段円孔2カ所残存)，内外面磨滅	内：淡橙 外：明橙	微砂　2～4mm大の礫
13	弥生土器　高杯	−	−	−		1段目円孔3カ所(貫通1カ所，未貫通2カ所)，2段目円孔4カ所(貫通4カ所)，内外面磨滅	淡橙	細砂
14	弥生土器　器台	−	−	−		内：オサエ，外面に2段の沈線，長方形透かし1カ所残存(幅1.8cm，残存高4.6cm)	明橙	微砂　2mm大の白色礫
15	弥生土器　器台					内：ミガキ・ナデ，外：ナデ・ミガキ・オサエ，内面に3条の突帯があり6カ所の穿孔は残存，内外面磨滅	内：にぶい黄橙 外：淺黄橙	細砂　白色粒
16	弥生土器　器台	−	−	−		内外：ナデ・ミガキ，口縁部裾面又4カ所，棒状浮又4カ所，口縁端部2条の沈線	黄橙	細砂　白色粒
17	弥生土器　ミニチュア土器	−	2.4×2.7	−	1/1	内外：ナデ・オサエ，内底：オサエ，内外面磨滅	淡橙	微砂・白色粒・白色礫
18	弥生土器　ミニチュア土器	5.9×6	1.9	5.5	1/1	内外：ナデ・オサエ，頸部に5条1範の単位の文様，内外面磨滅	橙	微砂
19	弥生土器　製塩土器	−	5.1×5.4	−	1/1	外：オサエ，内外面被熱，ヒビ	暗褐	細砂・白色粒・2mm大の白色礫
20	弥生土器　製塩土器	−	4.5	−	1/3	内：オサエ，外：オサエ・ナデ，調整，被熱	内：暗褐 外：にぶい橙・橙	細砂・白色粒・2mm大の白色礫
21	弥生土器　製塩土器	−	4.8×4.6	−	1/1	内：ナデ・オサエ，外：ナデ・オサエ，外面煤付着	内：淡黄，外：橙	細砂　白色粒　黒色粒
22	弥生土器　製塩土器	−	4.4	−	1/1	外：ナデ，内外面被熱，調整	暗褐	細砂・白色粒・2mm大の白色礫
23	弥生土器　製塩土器	3.6	−	−	1/1	内：ナデ，外：オサエ，被熱による劣化	暗褐	細砂　2mm大の白色礫　白色粒
24	弥生土器　製塩土器	−	4.7	−	1/2	内：ナデ，外：ナデ・オサエ・筋ケズリ	内：黒褐， 外：暗灰	細砂　白色粒　赤色粒
25	土師器　杯	12.7	−	−	1/6	内外：ナデ，外底一部ケガ目残存，内外面磨滅，丹塗りの可能性，種子圧痕	淡橙	細砂　白色粒
26	椀面鏡　漆	−	−	−		内外：ナデ，外面に文字(「人」の可能性)	内：暗赤 外：暗赤褐	細砂　白色粒
27	椀面鏡　漆	−	−	−		内：ナデ・当て具痕，外：格子目	暗褐	微砂

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	色調	胎土
T9	土錘	2.9	2.1	1.9	10.6	ナデ，孔(4.4×0.5cm)の穿孔	灰～暗灰	微砂

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存	石材	特徴
S13	石錘?	3.8	4.2	1.0	19.1	一部	サヌカイト	連続調整による調整
S14	石錘?	2.5	4.6	0.4	9.5	一部	サヌカイト	端部を連続調整による調整
S15	紡錘	8.1	4.5	1.5	60.8	一部	流紋岩	紡錘車
S16	石鏃	5.2	3.1	3.1	115.5	完形	安山岩	中心に擦痕
S17	円錘	10.9	6.6	3.8	310.0	一部	頁岩	側縁を面四縁切　上下面平滑，一部縁石面の可能性

図81　包含層ほか出土遺物2（縮尺1/4）

遺物を掲載した（図80・81）。土器27点、土製品１点、石器５点である。

図80－２・３・５・９・16・17・19・20・22・23および図81－S14・15・17は＜10層＞出土、図80－８・10・12・18は＜９層＞・＜10層＞出土、そのほかはいずれも＜１層＞および攪乱出土である。大半が弥生時代後期の土器であり、造成土や攪乱からも比較的大き目の破片、あるいは接合する資料が多いことが特徴的である。４の壺外底部には２個の種子圧痕が認められた。図81－25は丹塗りの可能性がある土師質土器椀である。同－26・27は備前焼甕の胴部で、26には外面に「入」の文字が刻まれる。S13・14は石包丁の可能性が考えられる。いずれもサヌカイト製。S15は流紋岩製の砥石で４面がよく使われている。S16は安山岩製の石錘、S17は敲石の可能性のある円礫である。

第４章　自然科学的分析

１．鹿田遺跡第22次調査地点出土木製品樹種同定

能城　修一（明治大学黒耀石研究センター）

１．はじめに

鹿田遺跡第22次調査で出土した明治時代～大正時代を主体とし、弥生時代と中世、近世の資料を少数含む木製品類の樹種を報告する。

２．方　　法

樹種同定用のプレパラート標本は、木製品類および自然木から横断面、接線断面、放射断面の切片を片刃カミソリで切りとり、ガムクロラール（抱水クロラール50ｇ、アラビアゴム粉末40ｇ、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-2228～2325の番号を付して標本番号とした。プレパラート標本は明治大学黒耀石研究センターに保管されている。

３．結　　果

資料98点には針葉樹５分類群、広葉樹９分類群が認められた（表１、図１）。以下には、木材組織学的な記載を行い、光学顕微鏡写真を提示して同定の根拠を記す。

１．トウヒ属　枝・幹材　Picea　図１：１ｂ－１ｃ（マツ科、OKUF-2315）

水平樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やか。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔はごく小型のトウヒ型で１分野に２～３個、放射仮道管の有縁壁孔は角張っていて、孔口は狭い。

２．アカマツ　枝・幹材　Pinus densiflora Siebold et Zucc.　図１：２ａ－２ｃ（マツ科、OKUF-2242）

垂直・水平樹脂道をともに持つ針葉樹材。晩材の量はひじょうに多く、早材から晩材への移行は緩やか。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔はごく大型の窓状で１分野に普通１個、放射仮道管の上下壁には重鋸歯がある。

３．スギ　枝・幹材　Cryptomeria japonica（L.f.）D.Don　図１：３ａ－３ｃ（ヒノキ科、OKUF-2243）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。晩材の量はやや多く、早材から晩材への移行は緩やか。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はごく大型のスギ型で１分野に２個。

４．ヒノキ　枝・幹材　Chamaecyparis obtusa（Siebold et Zucc.）Endl.　図１：４ａ－４ｃ（ヒノキ科、OKUF-2294）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。晩材の量は少なく、早材から晩材への移行は緩やか。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ型～トウヒ型で１分野に２個。

５．アスナロ　枝・幹材　Thujopsis dolabrata（L.f.）Siebold et Zucc.　図１：５ｃ（ヒノキ科、OKUF-2284）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。晩材の量は少なく、早材から晩材への移行は緩やか。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、しばしば樹脂をもち、分野壁孔はごく小型のスギ型で１分野に２～４個。

６．ケヤキ　枝・幹材　Zelkova serrata（Thunb.）Makino　図１：６ａ－６ｃ（ニレ科、OKUF-2287）

ごく大径で丸い道管がほぼ単独で年輪のはじめに１列に断続的に配列し、晩材では急に小型化した道管が接線

方向に伸びる塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の１列が直立する異性で７細胞幅位。

7．クリ　枝・幹材　Castanea crenata Siebold et Zucc.　図１、２：７ａ－７ｃ（ブナ科、OKUF-2234）

大径で丸い孤立道管が年輪のはじめに３列ほど配列し、晩材では徐々に小径化した丸い孤立道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

8．コナラ属アカガシ亜属　枝・幹材　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　図２：８ａ－８ｃ（ブナ科、OKUF-2274）

やや大径～やや小径で厚壁の丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと大型で集合状～複合状のものとからなる。

9．ハンノキ属ハンノキ節　枝・幹材　Alnus sect. Gymnothyrsus　図２：９ａ－９ｃ（カバノキ科、OKUF-2297）

小径で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は30段ほどの階段状。放射組織は同性で、単列の小型のものと大型の集合状のものとからなる。

10．ヤナギ属　枝・幹材　Salix　図２：10ａ－10ｃ（ヤナギ科、OKUF-2320）

小径で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性、直立細胞と道管との壁孔は大きく密に配列する。

11．サカキ　枝・幹材　Cleyera japonica Thunb.　図２：11ａ、11ｃ（モッコク科、OKUF-2277）

ごく小径で角張った孤立道管が密に散在する散孔材。道管の穿孔は30段ほどの階段状。放射組織は単列異性。

12．エゴノキ属　枝・幹材　Styrax　図２：12ａ－12ｃ（エゴノキ科、OKUF-2290）

小径で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の径は年輪の終わりでごく小さくなる。道管の穿孔は10段ほどの階段状。木部柔組織は晩材で短接線状。放射組織は上下端１～数列が直立する異性で２細胞幅位。

13．イボタノキ属　枝・幹材　Ligustrum　図３：13ａ－13ｃ（モクセイ科、OKUF-2298）

やや大径の孤立道管が年輪のはじめに断続的に１列に配列し、その後は小径で丸い道管がときに２～３個放射方向に複合してやや疎ら～密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の１～５列ほどが直立する異性で２細胞幅。

14．モチノキ属　枝・幹材　Ilex　図３：14ａ－14ｃ（モチノキ科、OKUF-2314）

ごく小径で丸い道管が単独あるいは２～５個ほど放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は30段ほどの階段状、道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は短接線状。放射組織は上下端の１～３列ほどが直立する異性で10細胞幅位。

４．考　　察

明治時代～大正時代の魚溜の構築材や胴木にはアカマツが多用され、スギが補助的に用いられていた（表１）。またクリが杭に多用されていたほか、胴木にもアカマツについで用いられていた。江戸時代から近世には、群馬県楽山園や棟高辻久保遺跡および東京都東京駅八重洲北口遺跡などではアカマツと想定されるマツ属複維管束亜属が井戸や導水施設といった水回りで多用されており（伊東・山田、2012）、当遺跡における魚溜での利用も水湿に強い木材を活用した例である。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学：出土木製品用材データベース』海青社

表1　鹿田遺跡第22次調査で出土した木製品一覧

樹種名	弥生後半			中世		近世					明治～大正														総計
	板	加工本	杭	曲物	柄杓	曲物	桶	下駄	箸	しゃもじ	曲物	盆	机	将棋	下駄	魚溜枡	魚溜枡	門	胴木	杭	板		
トウヒ属	1																						1
アカマツ																18	3		9	7	1		38
スギ						3	1		1		2				2	2		1	1		2		15
ヒノキ				3	2		2			1	2	1	1										12
アスナロ							1																1
ケヤキ								1															1
クリ																			4	18			22
コナラ属アカガシ亜属																			1				1
ハンノキ属ハンノキ節															1								1
ヤナギ属																				1			1
サカキ		1																					1
エゴノキ属														1									1
イボタノキ属																				1			1
モチノキ属			2																				2
総計	1	1	2	3	2	4	3	1	1	1	4	1	1	1	3	20	3	1	15	27	3		98

表2　鹿田遺跡第22次調査地点出土木製品の樹種

標本	No	樹種名	SR	製品名	本取り	遺構	時代
OKUF-	2228	アカマツ	S		板目	SG2	明治～大正
OKUF-	2229	スギ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2230	クリ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2231	スギ	S		追柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2232	スギ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2233	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2234	クリ	S	杭	丸木	SG2	明治～大正
OKUF-	2235	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2236	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2237	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2238	アカマツ	S	胴木	割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2239	アカマツ	S		丸木	溝7	明治～大正
OKUF-	2240	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2241	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2242	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2243	スギ	S	胴木	半割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2244	アカマツ	S	杭	丸木	SG2	明治～大正
OKUF-	2245	クリ	S	杭	丸木	SG2	明治～大正
OKUF-	2246	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2247	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2248	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2249	アカマツ	S	板材	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2250	クリ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2251	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2252	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2253	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2254	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2255	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2256	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2257	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2258	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2259	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2260	アカマツ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2261	アカマツ	S		柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2262	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2263	アカマツ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2264	クリ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2265	アカマツ	S	胴木	丸木	SG2	明治～大正
OKUF-	2266	アカマツ	S	胴木	丸木	SG2	明治～大正
OKUF-	2267	アカマツ	S		柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2268	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2269	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2270	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2271	クリ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2272	アカマツ	S	胴木	割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2273	アカマツ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2274	コナラ属アカガシ亜属	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2275	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2276	スギ	S	柚囲板	板目	井戸13	近世
OKUF-	2277	サカキ	S	切片	木でない可能性	井戸2	弥生後期
OKUF-	2278	スギ	S		柾目	井戸9	近世
OKUF-	2279	ヒノキ	S	曲物	柾目	井戸4	中世
OKUF-	2280	ヒノキ	S	曲物底板	柾目	井戸4	中世
OKUF-	2281	ヒノキ	S	曲物タガ	板目	井戸4	中世
OKUF-	2282	スギ	S		板目	井戸8	近世
OKUF-	2283	スギ	S		板目	井戸8	近世
OKUF-	2284	アスナロ	S	曲物蓋	板目	井戸8	近世
OKUF-	2285	ヒノキ	S	おけ底板	板目	井戸7	近世
OKUF-	2286	ヒノキ	S	おけ側板	板目	井戸7	近世
OKUF-	2287	ケヤキ	S	下駄	割材	SG2	近世
OKUF-	2288	ヒノキ	S	柄杓底板	板目	井戸6	中世後半
OKUF-	2289	ヒノキ	S	柄杓側板	柾目	井戸6	中世後半
OKUF-	2290	エゴノキ属	S	将棋駒	割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2291	スギ	S	箸	割材	SG2	明治～大正
OKUF-	2292	スギ	S	曲物底板	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2293	ヒノキ	S	机	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2294	ヒノキ	S	曲物側板	割り箸3	SG1	明治～大正
OKUF-	2295	スギ	S	下駄？	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2296	スギ	S	下駄(本体)	割材	溝7	明治～大正
OKUF-	2297	ハンノキ属ハンノキ節	S	下駄（歯）	柾目	溝7	明治～大正
OKUF-	2298	イボタノキ属	S	杭	丸木	溝7	明治～大正
OKUF-	2299	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2300	アカマツ	S	杭	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2301	ヒノキ	S	曲物底板	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2302	ヒノキ	S	しゃもじ？	板目	SG2	明治～大正
OKUF-	2303	スギ	S	曲物	柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2304	スギ	S	板材	柾目	3区不明	
OKUF-	2305	ヒノキ	S		柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2306	アカマツ	S		板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2307	アカマツ	S	板材	半割材・面取	SG2	明治～大正
OKUF-	2308	アカマツ	S	板材	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2309	アカマツ	S	板材	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2310	アカマツ	S		板目	SG2	明治～大正
OKUF-	2311	アカマツ	S	板材	割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2312	アカマツ	S	板材	柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2313	アカマツ	S	板材	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2314	モチノキ属	S	杭？	丸木	井戸2	弥生後期
OKUF-	2315	モミ属	S	板材	板目	1-地3	弥生後期
OKUF-	2316	アカマツ	S	木枠	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2317	クリ	S	胴木	割材	SG1	明治～大正
OKUF-	2318	アカマツ	S	木枠	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2319	アカマツ	S	胴木	丸木	SG1	明治～大正
OKUF-	2320	ヤナギ属	S		丸木	3区不明	
OKUF-	2321	アカマツ	S	木枠	板目	SG1	明治～大正
OKUF-	2322	モチノキ属	S		丸木	井戸2	弥生後期
OKUF-	2323	スギ	S	板材	追柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2324	アカマツ	S	板材	柾目	SG1	明治～大正
OKUF-	2325	アカマツ	S	板材	板目	SG1	明治～大正

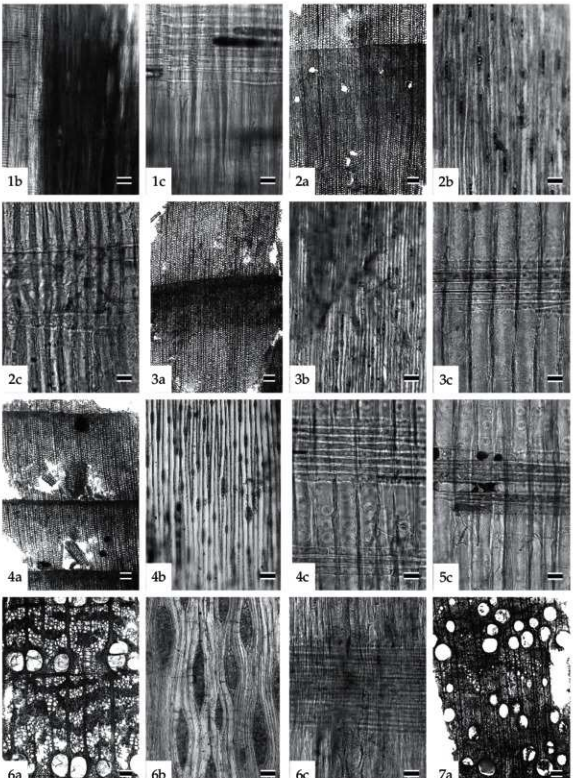


図1　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(1)

1b-1c：トウヒ属（マツ科、OKUF-2315）、2a-2c：アカマツ（マツ科、OKUF-2242）、3a-3c：スギ（ヒノキ科、OKUF-2243）、4a-4c：ヒノキ（ヒノキ科、OKUF-2294）、5c：アスナロ（ヒノキ科、OKUF-2284）、6a-6c：ケヤキ（ニレ科、OKUF-2287）、7a：クリ（ブナ科、OKUF-2234）．a：横断面（スケール＝200μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝25（1c、2c、3c、4c、5c）、50（6c）μm）．

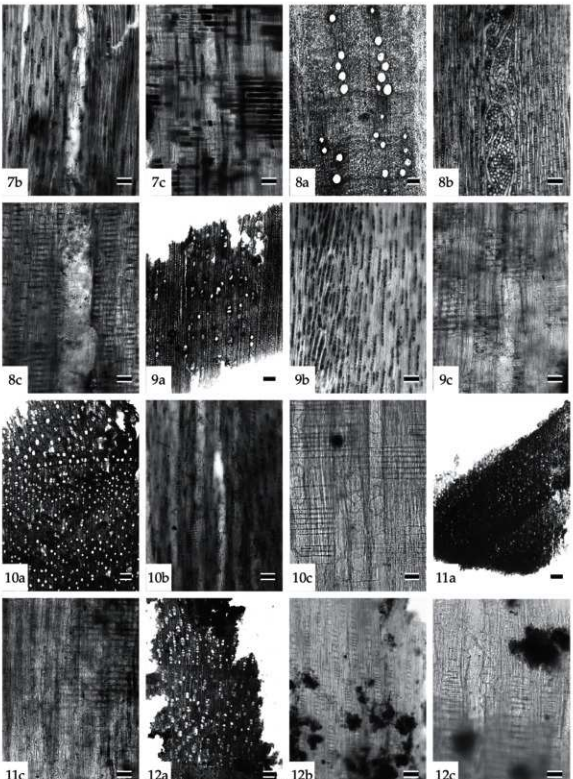


図２　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(2)

7b-7c：クリ（ブナ科、OKUF-2234）、8a-8c：コナラ属アカガシ亜属（ブナ科、OKUF-2274）、9a-9c：ハンノキ属ハンノキ節（カバノキ科、OKUF-2297）、10a-10c：ヤナギ属（ヤナギ科、OKUF-2320）、11a、11c：サカキ（モッコク科、OKUF-2277）、12a-12c：エゴノキ属（エゴノキ科、OKUF-2290）．a：横断面（スケール＝200μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝50μm）．

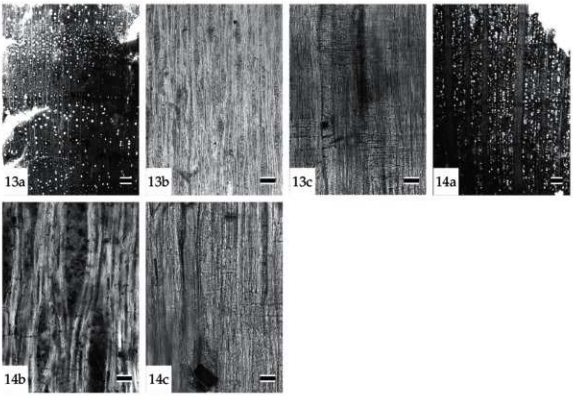


図３　鹿田遺跡第22次調査出土木製品類の顕微鏡写真(3)

13a-13c：イボタノキ属（モクセイ科、OKUF-2298）、14a-14c：モチノキ属（モチノキ科、OKUF-2314）．a：横断面（スケール＝200μm）、b：接線断面（スケール＝100μm）、c：放射断面（スケール＝50μm）．

2．鹿田遺跡第22次調査地点出土種子と土器圧痕同定

木村　理（岡山大学文明動態学研究所）
沖　陽子（岡山県立大学）

a．遺構出土種子の同定

⑴　分析資料と方法

弥生時代後期に位置づけられる井戸２、中世に位置づけられる井戸４、中世後半に位置づけられる井戸６、近代に位置づけられるSG1魚溜について土壌を持ち帰り、フローテーション法（0.5㎜メッシュ）により種子の検出を行った。種子の抽出・洗浄後に選別を行い、実体顕微鏡撮影と種の同定作業を実施した。

⑵　同定結果

種が同定できたものは32科76種である（表１、図１・２）。弥生時代後期の遺構である井戸１では３科３種、中世の遺構である井戸４では20科34種、中世後半の遺構である井戸６では17科31種、近代の遺構であるSG1魚溜では16科27種の種子を確認した。そのほか、近代の溝（溝７）から出土した弥生時代後期の壺・鉢の内側に残されていた土壌についてもフローテーションを行っている。当土器からは８科11種の種子が確認された。

各遺構において特定の種子が量的に卓越するわけでない点が特徴である。例えば、井戸４では47点を確認しているが、複数点が出土しているものとしてはイヌホウズキ（２点）、カンガレイ（２点）、ゴウソ（２点）、コハコベ（２点）、タカサブロウ（３点）、ヒレアザミ（２点）、イネ（６点）が挙げられるにすぎず、多くが２点のみにとどまる。同様に、40点が出土した井戸６でも複数点が確認できるのは、イブキジャコウソウ（２点）、キンエノコロ（３点）、クマツヅラ（２点）、コハコベ（３点）、タカサブロウ（２点）、ホタルイ（２点）、ミドリハコベ（２点）である。SG1魚溜では35点が出土し、複数点が確認されるのはイブキジャコウソウ（２点）、ウツボグサ（２点）、エノキグサ（２点）、スベリヒユ（２点）、スミレ（２点）、ヤエムグラ（２点）といった内訳である。このように、第22次調査で検出された種子はそれぞれの遺構において種類別の偏りを見せるわけでなく、むしろ複数種がまんべんなく認められるといえる。

また、時期の異なる遺構の相互でも共通した種子が存在する場合も多い。井戸６と９の間では８例（ハママツナ、スズメノヒエ、カンガレイ、ホタルイ、タカサブロウ、イブキジャコウソウ、イヌホウズキ、コハコベ）、井戸４とSG1魚溜では７例（ホソバノヨツバムグラ、オトギリソウ、カタバミ、カヤツリグサ、ホタルイ、タカサブロウ、ザクロソウ、イブキジャコウソウ、イヌホウズキ、ノミノフスマ、イヌビユ）が共通する。これら各遺構で共通して認められる種子は、スズメノヒエ、カンガレイやホタルイ、タカサブロウなど水田や湿地帯、通有の場所などに生えるものであり、通時的に環境が大きく変動することがなかったことを示しているとみられる。

なお、イネは井戸４では６点が出土するなど、一つの遺構内で比較的まとまって認められる一方で、ほかの遺構では検出されていない。

b．土器圧痕の種子同定

⑴　分析資料と方法

本分析では鹿田遺跡第22次調査において出土した土器を実見し、圧痕の残された資料15点を対象としてレプリカ法（丑野・田川1991）を用いて17の圧痕レプリカを採取した。その特徴を表２に掲載している。圧痕土器の内訳は、弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられる土坑５の１点、弥生時代後期に位置づけられる土坑２・４、土器集中から出土した10点に加えて、包含層や造成土、近世の溝６から出土した弥生時代後期～古墳時代初頭に

表 1　出土種子一覧

種子				遺構				
番号	科	属	種	井戸1	井戸4	井戸6	溝7	SG1魚廻
1	アオツヅラフジ	アオツヅラフジ	アオツヅラフジ					○
2	アカザ	アカザ	アカザ	○	○			
3	アカザ	マツナ	ハマママツナ		○	○	○	
4	アカネ	アカネ	アカネ		○			
5	アカネ	ヤエムグラ	ホソバノヨツバムグラ			○		○
6	アカネ	ヤエムグラ	ヤエムグラ					○
7	アカバナ	アカバナ	ヒメアカバナ			○		
8	イネ	イネ	イネ		○			
9	イネ	エノコログサ	エノコログサ				○	
10	イネ	エノコログサ	キンエノコロ			○		
11	イネ	オヒシバ	オヒシバ				○	
12	イネ	コメガヤ	コメガヤ		○			
13	イネ	ジュズダマ	ジュズダマ			○		
14	イネ	スズメノヒエ	スズメノヒエ		○	○		
15	イネ	ヌマガヤ	ヌマガヤ		○			
16	イネ	メヒシバ	アキメヒシバ		○			
17	イネ	イタチガヤ	イタチガヤ		○			
18	ウリ	カラスウリ	キカラスウリの実				○	
19	ウリ	ヒョウタン	ヒョウタン				○	
20	オトギリソウ	オトギリソウ	オトギリソウ			○		○
21	カキノキ	カキノキ	トキワガキ/リュウキュウマメガキ		○			
22	カタバミ	カタバミ	カタバミ	○		○	○	○
23	カヤツリグサ	カヤツリグサ	ウシタグ					○
24	カヤツリグサ	カヤツリグサ	カヤツリグサ			○		○
25	カヤツリグサ	カヤツリグサ	ヒメタグ		○			○
26	カヤツリグサ	カヤツリグサ	ミズガヤツリ					
27	カヤツリグサ	スゲ	アゼナルコスゲ				○	○
28	カヤツリグサ	スゲ	ゴウソ		○			
29	カヤツリグサ	スゲ	ナルコスゲ			○		
30	カヤツリグサ	チンツキ	クロチンツキ					○
31	カヤツリグサ	ホソガタホタルイ	カンガレイ		○	○		
32	カヤツリグサ	ホソガタホタルイ	ホタルイ		○	○		○
33	カヤツリグサ	ホタルイ	ゴウソ		○			
34	カヤツリグサ	ホタルイ	フトイ		○			○
35	キク	アザミ	ヒレアザミ		○			
36	キク	ゴボウ	ゴボウ			○		
37	キク	タカサブロウ	タカサブロウ		○	○		○
38	キク	ニガナ	オオジシバリ			○		
39	キク	ニガナ	ジシバリ			○	○	
40	キク	メナモミ	コメナモミ			○		
41	キク	ヤブタビラコ	ヤブタビラコ					○
42	キンポウゲ	オダマキ	ミヤマオダマキ		○			
43	クスノキ	ニッケイ	クスノキ花托			○	○	
44	クスノキ	ニッケイ	ニッケイ		○			
45	クマツヅラ	クマツヅラ	クマツヅラ			○		
46	クワ	クワ	ヤマグワ		○			
47	ザクロソウ	ザクロソウ	ザクロソウ			○		○
48	シソ	イヌコウジュ	イヌコウジュ			○		
49	シソ	イブキジャコウソウ	イブキジャコウソウ		○	○		○
50	シソ	ウツボグサ	ウツボグサ					○
51	シソ	シソ	シソ					○
52	スイカズラ	ガマズミ	ガマズミ					○
53	スベリヒユ	スベリヒユ	スベリヒユ		○			○
54	スミレ	スミレ	スミレ					○
55	タデ	イヌタデ	オオケタデ					○
56	タデ	イヌタデ	サデクサ		○			
57	タデ	タデ	サナエタデ			○		
58	タデ	イヌタデ	ウナギツカミ果実		○			
59	トウダイグサ	アカメガシワ	アカメガシワ				○	
60	トウダイグサ	エノキグサ	エノキグサ				○	○
61	トチカガミ	イバラモ	ホッスモ		○			
62	ナス	ナス	イヌホウズキ		○	○		○
63	ナス	ナス	ヒヨドリジョウゴ			○		
64	ナス	ホオズキ	ホオズキ		○	○		
65	ナス	ホオズキ	センナリホオズキ					○
66	ナデシコ	ハコベ	コハコベ		○	○		
67	ナデシコ	ハコベ	ノミノフスマ			○		○
68	ナデシコ	ハコベ	ミドリハコベ			○		
69	バラ	キイチゴ	キイチゴ属			○		
70	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ		○			
71	ヒユ	ヒユ	イヌビユ			○		○
72	ブドウ	ノブドウ	ノブドウ		○			
73	ブドウ	ブドウ	ブドウ	○				
74	ブナ	コナラ	コナラ殻果		○			
75	マタタビ	マタタビ	サルナシ		○			
76	ミカン	キハダ	キハダ		○			

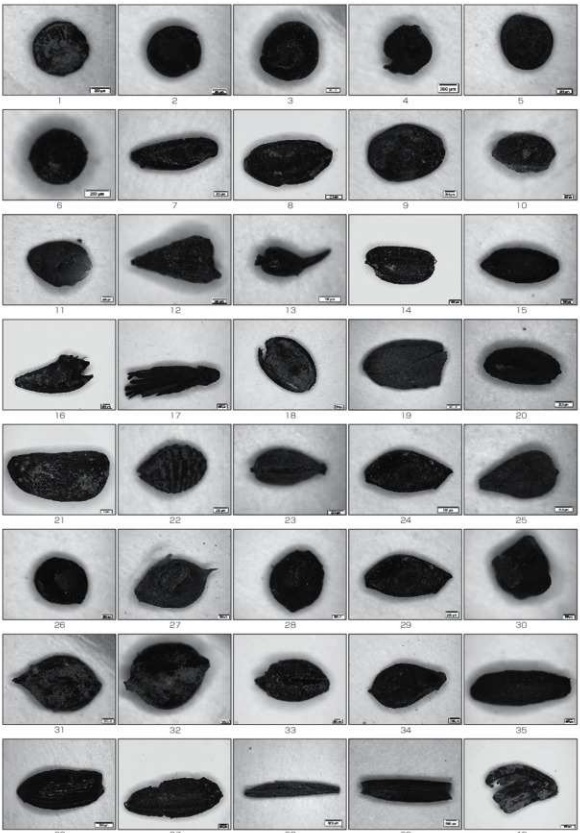

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

図1　出土種子写真1

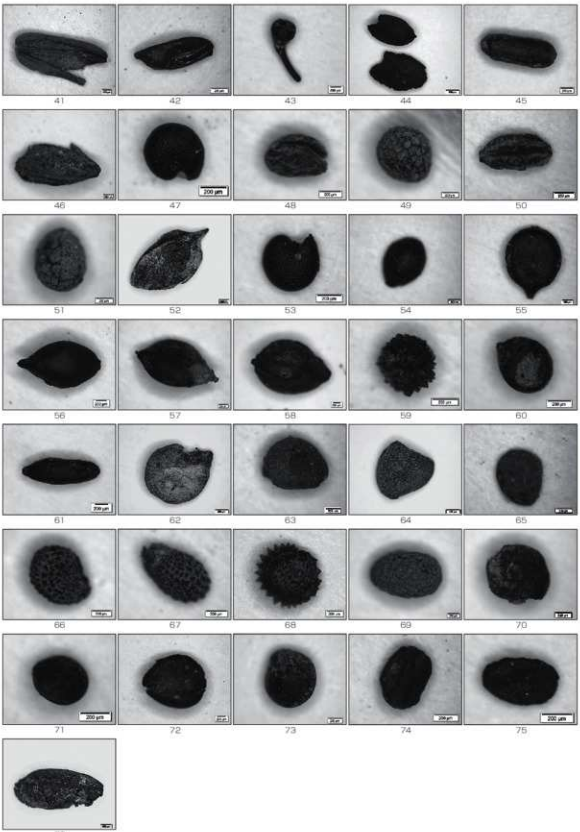

41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

図２　出土種子写真２

位置づけられる土器４点である。器種は甕が卓越し、中でも内面に圧痕が残されるものが多い。

圧痕レプリカの作成と同定作業は以下の①～⑨の工程で実施した。

①圧痕土器の選定、②圧痕部の洗浄、③土器の全体写真撮影・実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影、④離型剤（パラロイドB72　５％アセトン溶液）を圧痕部とその周辺に塗布、⑤シリコーン・ゴム（モメンティブ・シリコーンTSE350）を圧着部に充填、⑥乾燥後、シリコーン・ゴムを土器から離脱、⑦圧痕レプリカをオスミウムによって蒸着後、走査型電子顕微鏡（日立Ｓ－4800）を用いて表面観察・撮影１）、⑧圧痕レプリカの法量を計測、⑨種子の同定。

(2)　同定結果

同定ができた圧痕は12点であり、イネ科、キク科のもので約８割が占められる。イネ科のものはイネ属と共に、エノコログサ属が土坑５及び造成土における鉢や甕に、さらに土坑２で出土した甕にはオオムギ属に分類される種子圧痕が残されていた。

本分析における種子・種子圧痕の同定は沖がおこない、それに基づいて木村が資料をまとめた。文章は両者協議のうえ木村が執筆し、全体を両者で調整したものである。また、機器の使用にあたっては、岡山大学医学部共同実験室の協力を得た。

丑野毅・田川裕美1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　日本文化財科学会

表２　土器圧痕の種子同定結果一覧

	同定結果			圧痕土器関連情報				
	種	長さ(mm)	幅 (mm)	整理番号	器種	圧痕付着部	時期	出土遺構
1	イネ科エノコログサ属（アワ）	4.7	2.1	－	鉢	底面	弥生後期～古墳初頭	土坑５
2	キク科ヤブタビラコ属	5.8	3.7	図17-4	甕	頸部内面	弥生後期	土坑２
3	キク科タカサブロウ属	1.4	6.1	図17-6	高杯	口縁部内面	弥生後期	土坑２
4	イネ科オオムギ属	8.6	3.2	－	甕	体部外面	弥生後期	土坑２
5	－	5.8	4.8	－	甕	口縁部内面	弥生後期	土坑４
6	イネ科イネ属	7.7	4.0	－	甕	体部内面	弥生後期	土坑４
7	－	8.4	4.6	－	甕	底部内面	弥生後期	土器集中１
8	イネ科メヒシバ属	8.3	3.1	－	甕	底部内面	弥生後期	土器集中１
9	－	8.3	3.7	－	甕	底部付近外面	弥生後期	土器集中１
10	イネ科イネ属穎果（イネ）	8.4	3.2	－	甕	底部付近外面	弥生後期	土器集中１
11	－	9.3	3.7	図29-4	高杯	杯部外面	弥生後期～古墳初頭	土器集中２
12	－	7.8	1.6	図29-4	高杯	杯部杯部内面	弥生後期～古墳初頭	土器集中２
13	カヤツリグサ科ホタルイ属	6.5	5.6	図32-1	甕	頸部内面	弥生後期	溝６
14	バラ科キイチゴ属	7.4	1.6	－	甕	底部外面	弥生後期	溝１～３
15	キク科タカサブロウ属（タカサブロウ）	6.4	2.4	－	甕	口縁部内面	弥生後期	包含層
16	イネ科エノコログサ属（アワ）	7.8	4.2	図80-4	壺	底部外面	弥生後期	造成土
17	イネ科イネ属	5.7	4.7	図80-4	壺	底部外面	弥生後期～古墳初頭	造成土

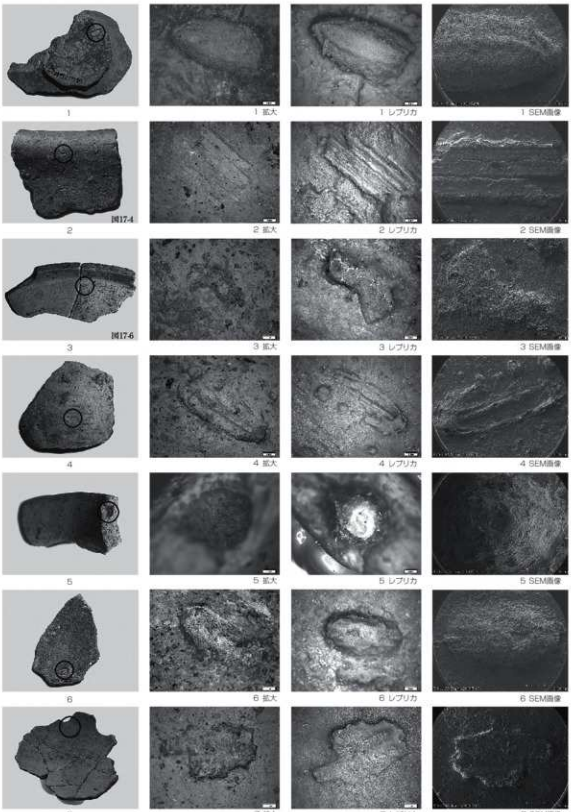

1
1 拡大
1 レプリカ
1 SEM画像
図17-4
2
2 拡大
2 レプリカ
2 SEM画像
図17-6
3
3 拡大
3 レプリカ
3 SEM画像
4
4 拡大
4 レプリカ
4 SEM画像
5
5 拡大
5 レプリカ
5 SEM画像
6
6 拡大
6 レプリカ
6 SEM画像
7
7 拡大
7 レプリカ
7 SEM画像

図3　土器圧痕写真1

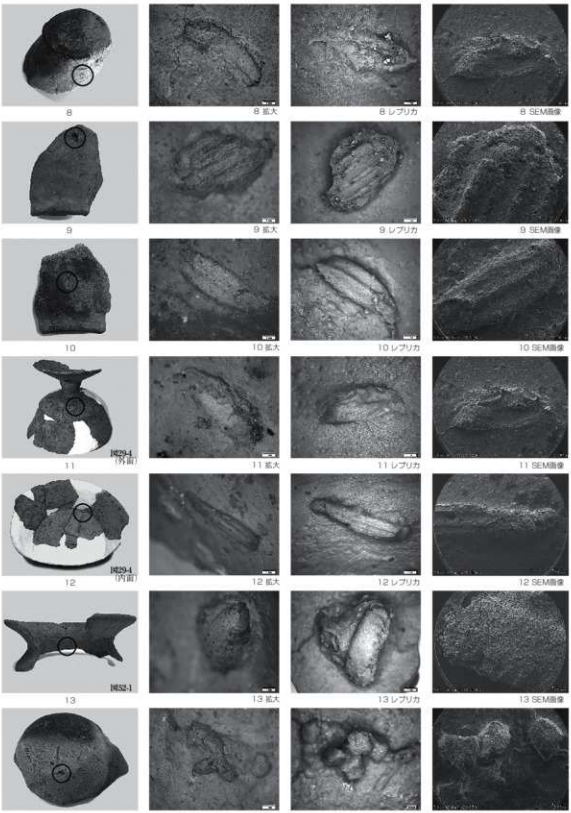

8
8 拡大
8 レプリカ
8 SEM画像
9
9 拡大
9 レプリカ
9 SEM画像
10
10 拡大
10 レプリカ
10 SEM画像
H829-4
(外面)
11
11 拡大
11 レプリカ
11 SEM画像
H829-4
(内面)
12
12 拡大
12 レプリカ
12 SEM画像
H832-1
13
13 拡大
13 レプリカ
13 SEM画像
14
14 拡大
14 レプリカ
14 SEM画像

図４　土器圧痕写真２

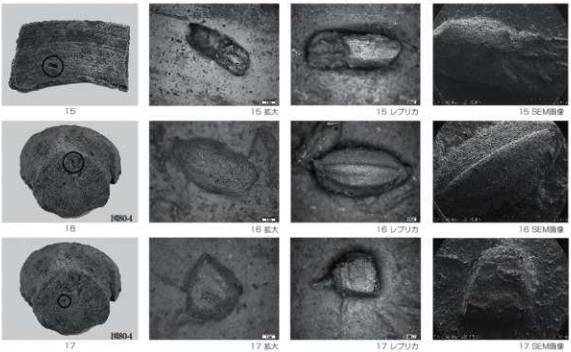

15
15 拡大
15 レプリカ
15 SEM画像
H8804
16
16 拡大
16 レプリカ
16 SEM画像
H8804
17
17 拡大
17 レプリカ
17 SEM画像

図５　土器圧痕写真３

3．鹿田遺跡第22次調査出土貝類の同定

第22次調査では表１に示した８点の貝類が出土している。攪乱などを除けばいずれも近代の層位から出土しており、当該期に食用されたものとみられる。種類が識別できるものの内訳は、サトウガイ、ハイガイ、ヤミノニシキ、マツカサガイ、イシガイ科、ヤマトシジミ、マルタニシ、アカニシである。

なお、貝類の同定は福田宏氏（岡山大学環境生命自然科学学域）による。（木村）

表１　出土貝類一覧

番号	綱	目	科	種	出土遺構
1	二枚貝綱 Bivalvia	フネガイ目 Arcida	フネガイ科 Arcidae	サトウガイ Anadara satowi	SG1
2	二枚貝綱 Bivalvia	フネガイ目 Arcida	フネガイ科 Arcidae	ハイガイ Tegillarca granosa	表採
3	二枚貝綱 Bivalvia	イタヤガイ目 Pectinida	イタヤガイ科 Pectinidae	ヤミノニシキ Volachlamys hirasei	包含層
4	二枚貝綱 Bivalvia	イシガイ目 Unionida	イシガイ科 Unionidae	マツカサガイ Pronodularia japanensis	包含層
5	二枚貝綱 Bivalvia	イシガイ目 Unionida	イシガイ科 Unionidae		包含層
6	二枚貝綱 Bivalvia	マルスダレガイ目 Venerida	シジミ科 Cyrenidae	ヤマトシジミ Corbicula japonica	包含層
7	腹足綱 Gastropoda	タニシ目 Viviparida	タニシ科 Viviparidae	マルタニシ Cipangopaludina laeta	包含層
8・9	腹足綱 Gastropoda	新腹足目 Neogastropoda	アッキガイ科 Muricidae	アカニシ Rapana venosa	SG1・造成土

図１　出土貝類

4．鹿田遺跡第22次調査地点出土動物遺存体の同定

出土した動物遺存体は、全８点である。出土層位は近世に位置づけられる溝６が１点、ほか６点は近代の遺構に帰属する。種類が識別できるものの内訳は、サメ類が２点、ヤマドリが１点、二ホンジカが４点で、うちヤマドリの上腕骨には切創が認められる。

なお、動物遺存体の同定は宮岡直人氏（岡山理科大学）による。（木村）

表１　出土動物遺存体一覧

番号	大分類	小分類	部位	LRM	部分	破損	所見	出土遺構	時期
1	哺乳綱		骨端部					溝6	近世
2	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M				SG1水路2	近代
3	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	M				SG1水路2	近代
4	鳥綱	ヤマドリ	上腕骨	R		切創あり		SG1	近代
5	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	R	遠位端		unfused	溝7	近代
6	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	LR？	遠位端破片			溝7	近代
7	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨～橈骨	L			成長度prox unfused、dist f	SG1	近代
8	哺乳綱	ニホンジカ	距骨	R	完形	一部欠損		造成土	

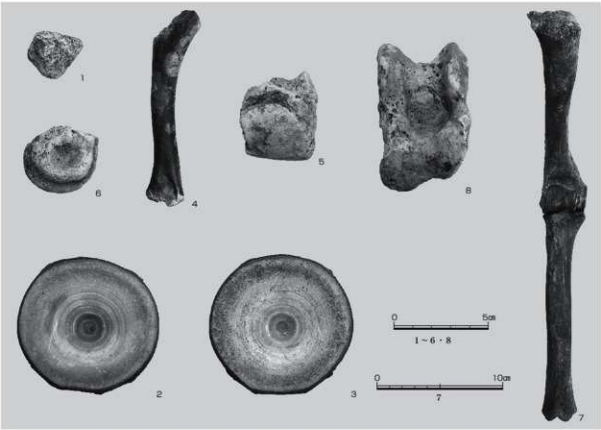


図１　出土動物遺存体

5．鹿田遺跡第22次調査地点出土漆碗の樹種同定・塗膜構造分析

㈱吉田生物研究所

(1) 樹種同定

1．試料　試料は鹿田遺跡から出土した漆椀１点（井戸６：図37－Ｗ５）である。

2．観察方法　剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3．結果　樹種同定結果について顕微鏡写真（図１）を示し、以下に主な解剖学的特徴を記す。

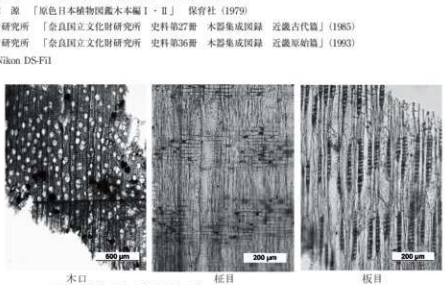
1）トチノキ科トチノキ属トチノキ（Aesculus turbinata Blume）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～80μm）が単独かあるいは２～４個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は１～３細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている（上下縁辺の１～２列の柔細胞に限られる）。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様（リップルマーク）として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

参考文献

林　昭三　「日本産木材顕微鏡写真集」　京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫　「日本産広葉樹材の解剖学的記載１～Ⅴ」　京都大学木質科学研究所（1999）
島地　謙・伊東隆夫　「日本の遺跡出土木製品総覧」　雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田　源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡　Nikon DS-Fi1



木口　　柾目　　板目
トチノキ科トチノキ属トチノキ

図１　顕微鏡写真

(2) 塗膜構造分析

1．はじめに

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡から出土した漆製品について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2．調査資料

調査した資料は、中世後半の漆椀（井戸６：図37－Ｗ５）１点である（表１）。

表１　調査資料

番号	品名	樹種	概要
1	漆椀	トチノキ	内面は赤色、外面黒色が残る椀。

3．調査方法

表１の資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包理し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4．断面観察

塗膜断面の観察結果を、表２と以下の文章に示す。

表２　塗膜構造

番号	品名	部位	塗膜構造（下層から）					
			布着せ	下地		漆層構造	顔料
				膠着剤	混和剤		
1	漆椀	内面	－	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	ベンガラ
		外面	－	柿渋	木炭粉	透明漆1層	－

塗膜構造：下層から、木胎、下地、漆層が観察された。

下地：濃褐色を呈する柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地が見られた。

布着せ：見られなかった。

漆層：内面には、下地の上に透明漆１層と赤色漆１層が、外面には下地の上に透明漆１層が見られた。

顔料：内面の赤色漆層には顔料が見られた。赤色漆層に混和されていたのは、それほど透明ではなく粒子形状が明確ではない微細なベンガラであった。

5．摘要

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡から出土した中世後半の漆椀の塗膜構造分析を行った。

資料は木胎に炭粉渋下地を施し、内面には透明漆１層の上にベンガラを混和した赤色漆１層、外面には透明漆１層が塗布されていた。

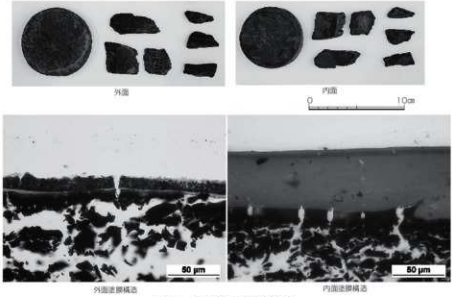


図２　塗膜構造顕微鏡写真

第５章　考　　察

１．鹿田遺跡における近世の土地利用

はじめに

鹿田遺跡第22次調査地点では近世に属する井戸８基を確認し、その分布は調査地点内に偏りなく見られる。同地点では近代庭園遺構が重複している影響で、深度のある井戸は検出できたが、柱穴等は見つかっておらず、屋敷の規模やまとまりを検討し難い状況であった。一方、既調査地点では従来、近世には耕作地が広がると考えられていたが、第20次・18次調査において近世の居住域が初めて確認され、キャンパス内の限定的な範囲に集落が営まれていたことが判明した[1]。

そうした中、前述の庭園遺構の検討を進めていく過程で、岡山大学で保管されている鹿田キャンパス用地の地籍資料を確認することができた[2]。もとより本部門では、構内遺跡に関連して土地利用状況を把握する目的で、切り図をひろく集成しており、今回得た地籍情報は切り図の内容を補強し、その土地の用途やさらに区画毎の所有者の詳細が判明するものと言える。本稿では地籍情報を手がかりに、発掘調査成果と併せて近世の集落のありかたや土地所有について考えてみたい。

(1)　第22次調査地点を主とした地籍情報

切り図および鹿田キャンパス用地資料により、キャンパス敷地は旧字名で岡（五番～八番）・東古松（一番・二番）・大供にあたり、詳細地番としては203区画が認められる（図１）。登記日として古くは1883（明治16）年の記載が認められ、107区画（53％）が明治年間の登記であり、19世紀におけるキャンパス敷地のおよそ半分の状況がわかることとなる。203区画のうち154区画は1916（大正５）年～1917（大正６）年に岡山県が購入後文部省に寄付、最終的に1925（大正14）年までに184区画が文部省所有となっている。1916（大正５）年以前の登記内容が判明するのは139区画あり、全体の68％にあたる。

これらのうち、後述する近世遺構との関係を見るため、岡五番・六番の土地所有状況を、抜粋して示した（図２・表１）。図表ではＡ～Ｆの６家の所有する区画を抜粋している。所有者別でみると、Ａ家ではＡ氏が岡五番～八番の16区画を1891（明治24）年～1905（同38）年にかけて購入し、うち157－１・157－２・158番地の３区画については1920

図１　鹿田キャンパスと切り図

（大正９）年にＢ氏へ相続されている。このうち158番地が第22次調査地点南半にあたる。Ｂ家は岡六番・七番の３区画を所有しており、明治30年代にＢ家Ａ氏が相続、その中の160番地１区画を1928（昭和３）年にＢ氏が相続したことがわかる。この160番地が第22次調査地点北半にあたる。Ｃ家では岡五番～八番の12区画を所有しており、1890（明治23）～1892（同25）年にＢ氏に譲与、その際に５区画をさらに購入している。

また初登記年がいずれも1916（大正５）年である181番地（所有者Ｄ家Ｂ氏）、133・147・175・176・176－１番地（同Ｅ家Ｂ氏）およびＦ氏所有の10区画（122番地ほか）等からは、同年岡山県が購入するにあたり、所有者を確認した際に所有権が明確化され登記に至った状況が窺える。

抜粋した状況であるが、このように見てくると、明治期の土地区画は細かく区切られており、所有関係が想像以上にモザイク状を呈していたことが判明した。上述のＣ・Ｄ家のように継続的に所有される区画もあれば、売買により所有者が次々変更する様相も認められる。その地番に居住していたか、

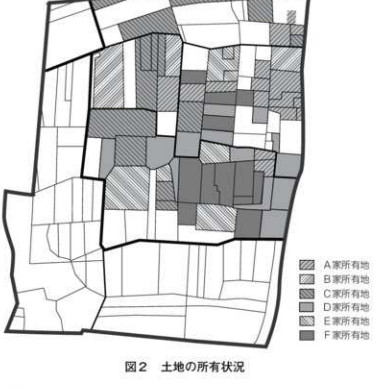


図２　土地の所有状況

表１　鹿田キャンパスの土地所有状況（抜粋）[21]

図	大字	小字	地番	登記簿記載					備考
				前所有者	新所有者	登記年	事由		
A	岡	5番	120	○	A家A氏	明治27年	売買	159番地に変更	大正5年
	岡	5番	121	○	A家A氏	明治27年	売買	159番地に変更	大正5年
	岡	6番	156-1	○	A家A氏	明治25年	売買		
	岡	6番	156-2	○	A家A氏	明治25年	売買		
	岡	6番	157-2	○	A家A氏	明治38年	売買	A家B氏	大正9年 相続
	岡	6番	157-1	○	A家A氏	明治38年	売買	A家B氏	大正9年 相続
	岡	6番	158	○	A家A氏	明治38年	売買	A家B氏	大正9年 相続
	岡	6番	162	○	A家A氏	明治24年	売買		
	岡	6番	166	○	A家A氏	明治二年	売買		
	岡	6番	167	○	A家A氏	明治二年	売買		
	岡	6番	174	○	A家A氏	明治二年	売買		
	岡	6番	179	○	A家A氏	明治31年	売買		
	岡	7番	183	○	A家A氏	明治31年	売買		
	岡	8番	201	○	A家A氏	明治24年	売買		
	岡	7番	203	○	A家A氏	明治25年	売買		
	岡	8番	205	○	A家A氏	明治25年	売買		
B	岡	6番	160		B家A氏	明治27年	相続	B家B氏	昭和3年 相続
	岡	7番	184		B家A氏	明治31年		○	明治42年 売買
	岡	7番	190	○	B家A氏	明治31年	相続	○	明治42年 売買
C	岡	5番	131	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	5番	132	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	5番	140	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	5番	141	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	6番	180	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	7番	185	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	7番	186	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	7番	187	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	7番	188	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	8番	193	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	8番	195-1	C家A氏	C家B氏	明治23年	譲与		
	岡	8番	197	○	C家B氏	明治二年	売買		
	岡	8番	202		C家B氏	明治25年	売買		
	岡	8番	207	○	C家B氏	明治24年	売買		
	岡	8番	210	C家A氏	C家B氏	明治二年			
	岡	8番	211-1	○	C家B氏	明治24年	売買		
	岡	8番	212-1	○	C家B氏	明治24年	売買		

図	大字	小字	地番	登記簿記載					備考
				前所有者	新所有者	登記年	事由		
D	岡	5番	117	○	D家B氏	明治27年	売買		
	岡	5番	118	D家A氏	D家C氏	明治二年	譲与		
	岡	5番	119	D家A氏	D家C氏	明治24年	譲与		
	岡	5番	125	D家A氏	D家D氏	明治二年	譲与		
	岡	5番	136	D家A氏	D家C氏	明治二年			
	岡	5番	142	D家A氏	D家C氏	明治二年			
	岡	5番	143	D家A氏	D家C氏	明治二年			
	岡	5番	148	D家A氏	D家C氏	明治二年			
	岡	6番	152	D家A氏	D家C氏	明治二年			
	岡	6番	170	D家A氏	D家D氏	明治二年	譲与		
	岡	6番	172	D家A氏	D家D氏	明治二年	譲与		
	岡	6番	181		D家B氏	大正5年			
	岡	6番	168	○	D家B氏	明治44年	相続		
E	岡	5番	127	E家A氏	E家B氏	大正5年	相続		
	岡	5番	137	E家A氏	E家B氏	大正5年	相続		
	岡	5番	133		E家B氏	大正5年			
	岡	5番	147		E家B氏	大正5年			
	岡	6番	176		E家B氏	大正5年			
	岡	6番	176-1		E家B氏	大正5年			
	岡	6番	175	○	E家B氏	大正5年			
F	岡	5番	145	○	F	明治31年	売買		
	岡	5番	146	○	F	明治31年	売買		
	岡	5番	122		F	大正5年			
	岡	5番	123		F	大正5年			
	岡	5番	124		F	大正5年			
	岡	5番	126		F	大正5年			
	岡	5番	129		F	大正5年			
	岡	5番	144		F	大正5年			
	岡	6番	165		F	大正5年			
	岡	6番	171		F	大正5年			
	岡	6番	173		F	大正5年			
	岡	6番	178		F	大正5年			

耕作地として利用していたかは、発掘調査の成果が如実に示している。

(2) 鹿田遺跡における近世以降の発掘調査成果

既調査地点で検出された近世の遺構を井戸・土坑・溝に分けて示した（図３）。切り図に準じた小字境界線を加筆している。まず井戸についてはキャンパスの中央西半～北東部でのみ限定的に確認されている点を指摘する。また溝の位置が字の境界線と近似する点も重要である。特に太線で示している大字の境界線、具体的には岡と東古松を区切るラインは、東西・南北方向とも発掘調査で近代・現代にまで継続する溝が検出されており、古くから現代まで重要な境界であることが改めて確認される。

次に土坑には、その機能として野壺や水溜等耕作に関わるもの、あるいは墓、貯蔵庫、穴蔵などが想定される

図３　近世の検出遺構

表２　鹿田遺跡の近世井戸

時期	S25	S20B	S22	S18
17世紀前半	井戸7	井戸22	井戸7～14	井戸11基＊
17世紀後半				
18世紀前半		井戸23・24		
18世紀後半				
19世紀前半		井戸25		
19世紀後半				

＊詳細は整理中のため、時期は大枠で示した。

が、耕作に関わる機能を有した土坑は、水路や畦畔の脇に並んで検出される点が一つの特徴として捉えられる。図３ではキャンパス西半および南端で検出した土坑の多くが溝あるいは番地境界線に沿っている。

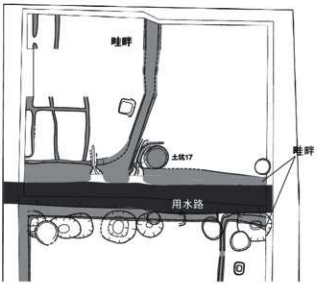
居住域と耕作地との様相をみてみよう。

①居住域

初めに述べたように、本遺跡で近世の井戸が検出された調査地点は、第18次地点・第20次Ｂ地点・第22次調査地点・第25次調査地点の４地点に限られる。井戸は計13基である（表２）。第20次調査Ｂ地点と第25次調査地点では、近世の間に２基程度が位置をかえて構築・利用された状況が窺える。第18次調査地点では詳細は整理中であり、第22次調査地点では、井戸から詳細年代の判明する遺物が出土しなかったため、井戸の継続時期についての検討は今後の課題としておく。

これに続く近代の状況として、第20次Ｂ地点・25次地点で居住域を区画する溝（20次Ｂ－溝21・22）が19世紀初頭に廃絶した後に、一帯が耕作地に転換したことが判明しており、19世紀前半以降は耕作地として利用される。一方、第22次調査地点では近代の道構として井戸１基と庭園道構２基を確認しており、居住域としての利用が継続していたことが明らかである。つまり井戸の配置からは近世にキャンパス中央部西半～北東部に広がる居住域は、近代にはさらに北東部に限定された範囲となっていることが示される。

またこうした住居域では井戸に隣接して土坑が数基確認されているが、これらは形状から野壺ではなく、穴倉等の可能性が想定される。例えば第20次Ｄ地点の土坑７は18世紀前半頃に比定されるが、ウリ種子が大量に確認されるといった特徴から、居住空間での貯蔵庫的機能が想定できる遺構である。



近世の土坑：白抜き
近代の用水路・畦畔・野壺：トーン

図４　耕作地のようす（第17次調査地点）

近世の居住域の実態については岡山城下にあたる南方遺跡の内容が参考となる[4]。岡山法務総合庁舎新営に伴う調査において、侍屋敷の一画が確認されている。この調査では絵図の町割りと遺構の照合が可能となる貴重な成果が得られている。ここで検出された屋敷内の遺構には井戸と多数の土坑があり、土坑の機能として穴蔵が想定されている。

このような例から、居住域に伴う土坑と、耕作域に伴う土坑とはその立地および形状や他の特徴から分けて捉えることができそうである。鹿田遺跡の既調査地点では、近世・近代について積極的に取り上げていなかった時期もあるため、この点も今後検討の余地がある。

②耕作域

耕作域の状況をみてみよう。これまでに調査において土坑・溝・畦畔が耕作域を示す遺構として確認されている。第17次調査地点では近世の土坑14基、近世～近代の溝（用水路）、近代の畦畔・土坑が確認された（図４）[3]。近世の土坑の大半は野壺として報告されており、図に示されるように、溝の南脇に並んで構築される。重複関係も見られ、同時期には３～４基が機能していたと考えられる。近代の野壺は畦畔のコーナーに１基（土坑17）が確認される。内部に桶が設置されるものである。耕作域の土坑配置も近世・近代で変化が認められる[4]。

こうした溝脇に並ぶ土坑の状況は、図３に示した多くの調査地点で確認される（第１・７・９・11～13・17・24・28次調査等）。キャンパスの西半・南端では、近世以降広く耕作地利用が行われていたことを示唆するものである。

おわりに

最後に、今回判明した地籍情報と発掘成果を併せて若干の検討を行いたい（図１）。

近世・近代のいずれの時期も居住域と考えられる第22次調査地点は、先にみたように岡五番160地番と158地番にまたがる地点である。明治期にＡ家・Ｂ家により取得され、北側の160地番は1928（昭和３）年までＢ家所有、南側の158番地は1925（大正14）年までＡ家所有であった（その後の推移は第５章２参照）。

近世の井戸が確認される第20次Ｂ・25次地点一帯は、17世紀前半～19世紀初頭まで居住域であったことが明らかであり、その後耕作地に転じる。これらの井戸の分布範囲は146地番（Ｆ家所有）にあたる。その東隣にあたる第18次調査地点では多数の近世の井戸が確認されているが、詳細は未整理である。分布範囲は121・122・123地番にあたり、このうち121地番は先のＡ家所有地であり、地籍情報から居住域と考えられる場所であることから、近代（明治27年頃～）に居住域となっていた可能性が高い。今後検討を進めたい。

耕作域と判明する地点では、第１次調査地点が177・178・179地番にあたり、178地番はＦ家、179地番はＡ家所有である。第13次調査地点は141地番にあたりＣ家所有である。Ａ家の居宅は157・158地番に存在していたことが第22次調査地点の成果から明らかであり、地籍情報から一時期120・121地番に居住していた可能性もある。とすると、179地番は耕作地として所有していたと考えられる。

以下はやや拡大的な解釈であるが、発掘成果から示される近世以降の居住域は、繰り返すが限定的であり、その他は広く耕作地として利用されていた。図２にみるようにモザイク状に所有者が異なる状況から考えると、耕作地については、地主－小作人の関係が想定されよう。

発掘調査成果と明治期の切り図をはじめとする地籍情報との照合から、鹿田遺跡における近世の土地利用状況を検討した。第22次調査地点で近代の庭園遺構の整理に取り組んだことから派生し、近世・近代の土地利用について考える機会となった。文献史料の取り扱いおよび、近世以降の遺構・遺物の検討にはいまだ不十分な点が多くあり、今後も継続して検討したい。

（岩崎　志保）

註

(1) 岩崎志保2022「鹿田遺跡16」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第38冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岩崎志保2022「鹿田遺跡の中世～近世における集落の様相」「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2021」岡山大学文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門
山本悦世2008「鹿田遺跡第18次調査」「岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(2) 当該地籍情報は岡山大学で保管されている鹿田キャンパス用地図に付随する登記情報であり、概ね1883（明治16）年～1925（大正14）年に作成された文書である。本稿中では実名の記載は行わないこととする。
また記述に際しては下記を参照している。
https://www.archives.go.jp/information/pdf/riyoushinsa_2011_00.pdf

(3) 表1では所有者欄の○は所有者が判明することを示す。A家～E家では最初に記載される人物をA氏とし、相続や譲与などで次の所有者と記載される人をB氏と記した。各家内では同一姓である。また備考欄にトーンで示した4区画は大正14年以降も民有地となっていたことが明らかな区画である。

(4) 氏平昭則2012『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234　岡山県教育委員会

(5) 山本悅世2020『鹿田遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(6) 岩崎志保2021『江戸時代の鹿田遺跡』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報65号』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

挿図出典

図1～3　筆者作成

図4　山本2020図867を元に筆者作成

2．鹿田遺跡における近代邸宅

はじめに

鹿田遺跡第22次調査の特筆すべき成果の一つに、近代に位置づけられる邸宅の検出が挙げられる。当邸宅は、現在の鹿田キャンパスの北東の一角を占め、大正～昭和初期にかけて、岡山大学医学部の前身にあたる岡山医学専門学校～岡山医科大学と併存していたことがわかっている。その後、これらは大正末～昭和初期にかけて段階的に岡山医科大学に移管され、1929（昭和４）～1930（同５）年には現在の鹿田キャンパスに相当する土地のすべてが大学敷地となった。

このように、岡山大学鹿田キャンパスは、大正～昭和初期にかけて周辺の民有地を買収しながら段階的に現在の姿へ拡大していったことが記録からうかがえるが、その民有地の詳細については岡山大学の公式記録に一切残されていない。その意味でも、第22次調査で検出された邸宅関連遺構・遺物は現在の鹿田キャンパス成立直前の土地利用や、当該期における邸宅、居住のあり方を示す貴重な資料であるといえる。

そうした目的意識から、筆者らは検出された邸宅の敷地復元に取り組んできたが、幸運にも当邸宅に住んでいた方のご子孫が判明し、同時に邸宅を写したものと思われる古写真について提供いただくことができた。以下では、検出された遺構と古写真を用いて、鹿田キャンパス成立期における土地利用の一端について検討してみたい。

(1) 構内図にみる鹿田キャンパスの変遷

検討に移る前に、鹿田キャンパスの変遷について概観しておこう。岡山大学医学部の前身である岡山医学専門学校は、1917（大正６）年１月に内山下から鹿田村へ移築となり、当時は県立であった病院も1921（大正10）年には岡山医学専門学校附属病院として、鹿田村に移されたことが構内図からうかがえる。

さて、その際の構内図の北東に「民家」と記載された一角が存在する。これが第22次調査で検出された邸宅を含むエリアである。その推移をみると、1921（大正10）年～1924（同13）年の間は「民家」の敷地面積は変わらず、北東部分の比較的大きな範囲を占めていたことがわかる（図１左上）。一方、状況が変わるのが1925（大正14）年11月１日時点の構内図である。

当図では、民家のエリアが南北に分割され、南半には岡山医科大学付属病院の所有物と思われる建物が描かれている（図１右上）。ただし、使用用途や名称はこの時点では付されていない。また、1924（大正13）年以前の土地の境界に沿って板塀が依然として残されており、移管を受けての新たな土地の造成や建物の建築は本格化していなかった可能性が高い。なお、南北に分割された北側のエリアはいまだ民有地としての利用が続いていたものとみられる。

以後、南側のエリアには新たに機関室が設けられるなど土地利用も始まるが、1928（昭和３）年11月１日時点での構内図をみる限り、北側は引き続き民有地として使用され、南側にも板塀が残されていたようである。また、産婆看護婦養成科が1928（昭和３）年に作成した図によれば、南側に移管当初から存在する建物は看護婦寄宿舎として利用されていたらしい（図１左下）。

状況が再び一変するのは1929（昭和４）年である。同年12月１日の構内図を見ると、北側の民有地との間に設けられていた土地境界線は削除され、空白地となっている（図１右下）。この段階において、北側の民有地も大学へと移管されたものと思われる。また、続く1930（昭和５）年12月１日の構内図には、かつての「民家」の範囲を南北に貫くように大学付属病院の調理部・食堂が建設されている。この段に至って、現・鹿田キャンパスの北東の一角を占めていた「民家」はすべて大学へと移管され、大規模な造成により完全に消滅したと考えられる。

以上、大正～昭和初期における岡山医学専門学校、岡山医科大学の敷地の変遷と、併存していた「民家」の移

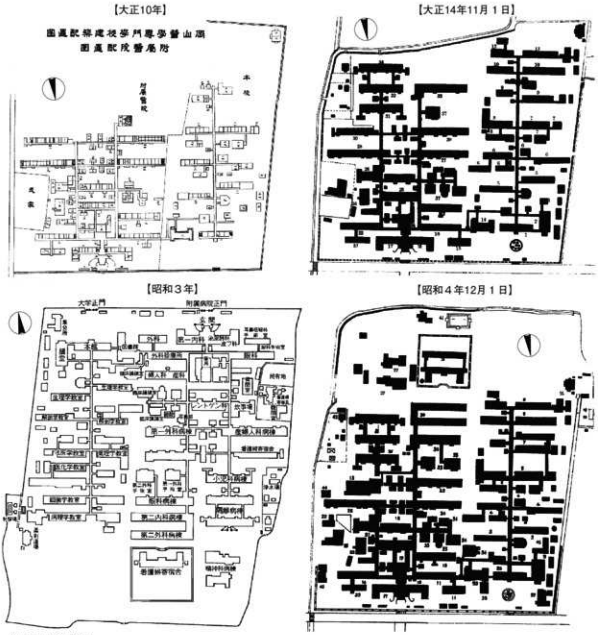


図１　岡山医科大学の構内図の変遷

管への流れを概観した。改めて要約すると、民有地は少なくとも二つのエリアからなり、南側は1925（大正14）年10月の間に、北側は1928（昭和３）年の間に岡山医科大学付属病院へ移管されたようである。

(2)　検出遺構の概要

第22次調査では、調査区の南半と北辺で２基の池が検出された。両者はともに調査区外で東接する枝川を取・排水口としたものと考えられ、石組による護岸を有し、下部には胴木が配される点で共通する。以下、南半の池SG1と北辺の池SG2について、それぞれ構造の詳細を述べる。

SG1　各辺が直線をなす平面三角形を呈し、池の南北には直線的な取水路と排水路が取り付く（図２）。池の西端

では少なくとも１度の改修が想定され、改修を経て当初位置の北側に突出部が設けられる。ただし、後述の通り古写真から判断する限り、当初存在していた南側の突出部も埋められることなく引き続き存在していたようである。池の西端は改修ののち、二又を呈するような形態を呈していた可能性が高い。なお、改修時にあたかも南側をふさぐように新設された板材は形状や規格、樹種ともに池中央の魚溜の構築材と一致する。池西端の改修と魚溜の設置は同じタイミングで実施されたものと想定されよう。そのほか、杭が多数検出された排水路の北辺など、改修が見込まれる箇所も一部には存在するが、それ以外では後述の通り胴木や杭も整然と配されており、大規模な改修は想定しえない。

石組の下に配される胴木は、いずれもほぞ穴が穿たれており、転用材であったと判断できる。実際、胴木はクリ、スギ、アカマツ、コナラ属アカガシ亜属など多様な材で構成される。幅20cm程度の板材が選択的に用いられるが、長さは不揃いで、胴木としての転用にあたり二次加工した形跡は認められない。各部とも４点程度の板材

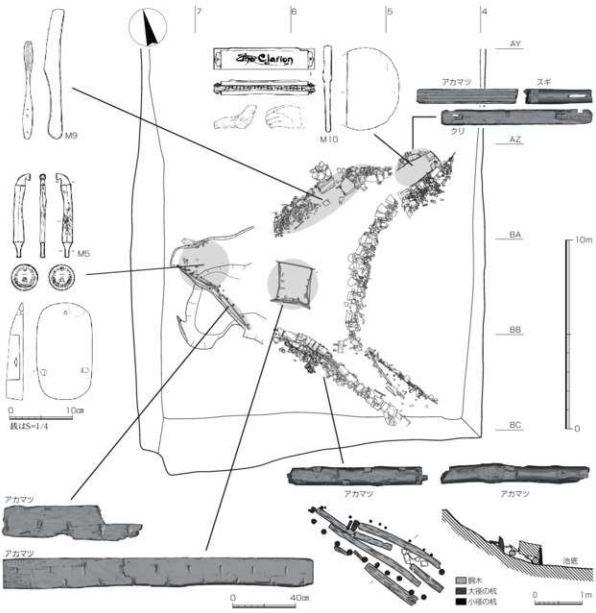


図２　SG1の各部構造と出土遺物

を横方向に配して上部の石組を支える。

胴木を固定する杭は、太さ・配置において２種に分類できる。一つは、直径10㎝程度を測る太い杭で、胴木列中の中ほどに打ち込まれる。石組設置時には完全に覆われてしまうなど、地上への「出」は小さい。今一つは、直径３～５㎝程度を測る細い杭で、胴木列中の内法に打ち込まれる。胴木が内側にずれないように固定するとともに、池南岸の例を踏まえると「出」を大きくして石組の基底石を固定する役割も果たしていたようである。このように、サイズや打ち込む場所の異なる２種の杭をたくみに使い分けながら、護岸基底を構築していることが特徴的といえる。

掘方にかんして、SG1では胴木や杭、石組を配するための独立した掘方は設けられない。池の斜面のうち底面付近の緩斜を緩める、あるいは斜面を階段状に成形して、緩傾斜の部分に胴木・杭・石組を設置している。

最後に、出土遺物には釘や鎹などの部材、曲物や盆、小刀、歯ブラシ、下駄、銭、煙管、将棋駒、ハーモニカ、鳴笛などの日用品、玩具が含まれる。前者は池の全体で出土するのに対し、後者は北側の取水路、石組、あるいは池の西端で出土するなど、池の西～北側に限定される。取水路から出土したハーモニカは鶯声社製で、1912～1916（大正元～５）年の製作とみられる。また、池西端の南では明治10年銘の竜一銭銅貨も出土している。

SG2　調査区の北辺において南半が検出されたSG2は、直線的に取り付く水路からくびれたのち、南側にむかって大きく弧を描く平面形を呈する（図３）。遺存状態により改修の詳細は不明だが、水路は１～２度の改修が行われており、部分的ながら何度かの改修を経ながら維持されていたものとみられる。

胴木は、長さ1.5～２ｍ程度の一木材に30～40㎝ごとに切り込みを入れて、曲線を作り出す独特な手法を用いる。一部に先端が鋭利であるなど、杭の転用材とみられるものを含むものの、基本的には専用材であったと判断して差し支えない。これらを横方向に３本ならべて、上部の石組を支える。また、SG2の場合、上記の胴木の下に、それと直交して枕木が置かれる点を特徴とする。枕木は長さ60～70㎝、太さ10㎝前後に統一されており、専用材であったとみられる。

杭は、直径７～10㎝程度を測る均質な材が多用され、胴木の切り込み付近において屈曲部を固定するように打ち込まれる。内法に配されるものも一定数存在するが、池底からの「出」は小さく、あくまでも胴木の屈曲部を

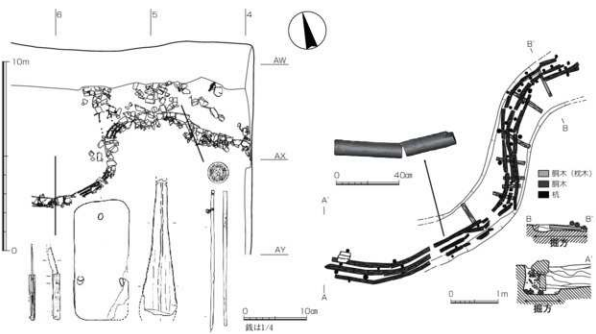


図３　SG2の各部構造と出土遺物

表１　鹿田遺跡第22次調査で検出された池の構造比較

	平面形	胴本			杭	掘方		特徴的な遺物
		材	横本数	枕木	種類	有無	底面	
SG1	直線的・三角形	転用材	4本	×	2種	×	礫類斜	1銭銅貨（M10年鋳）、ハーモニカ（T0～T5年製作）
SG2	曲線的・円形？	専用材	3本	○	1種	○	水平	1銭青銅貨（T9年鋳）

固定する目的として敷設されていたようである。

掘方にかんして、池の掘り込みとは別に、胴木や杭、石組を配するための独立した布掘の掘方を有し、底面は水平をなす。池の掘削→掘方の掘削→枕木の配置→胴木（横木）の配置→杭の設置→石組構築といった構築手順が復元できよう。出土遺物には、火箸や小刀、しゃもじ、銭などが含まれ、銭は大正九年銘の桐一銭青銅貨である。

以上、本調査で検出された２基の池について検討した。両者は東接する枝川を取水源とする点、胴木と石組を用いた護岸構造を有する点では共通するが、それらを除けば大きく異なっていることがわかる（表１）。こうした様相差について、一つには造営時期差が想定される。その場合、専用材を用いた胴木の使用、枕木の敷設、掘方の掘削などからより入念な造営がなされるSG2が先行してつくられたという理解が可能であろう。とりわけ、SG1では襖の敷居など建築部材と思われる材を胴木として転用しており、居住の開始以後、廃材が発生するまでの一定の期間を経て池が造営された可能性も見込まれる。

他方、双方で異なる構造をもつ池が造営された要因として、今一つには作庭主体の相違が想定される。SG1とSG2は平面形や石組基底部構造など、諸要素にわたって懸隔が著しく、多少の造営時期差を見込んでもなおその違いは大きい。そこで、改めて第22次調査区と岡山医科大学構内図を重ねてみると、両者は隣接しながらもSG1は「民家」の中でも南側のエリアに、SG2は北側エリアに位置していることがわかる。「民家」中の南北のエリアは、移管時期の違いや土地所有権の違い（第５章１）から、異なる所有者に属していたものとみられ、したがってSG1とSG2もそれぞれ異なる家に伴うものであった可能性が高い。このように理解した場合、２基の池の様相差について発注者あるいは作庭集団の違いを反映したものと捉えることも可能である。水門の設置や石組の敷設など、技術や知識、労働力を必要とする作庭にあたっては専門の作庭集団が関与していたものとみられるが、隣接する両家はそれぞれ異なる集団に発注したのではなかろうか。岡山市内において、直線的な平面形と比較的簡素な基部構造の石組を特徴とする作庭集団と、曲線的な平面形と入念な基部構造をもつ石組を特徴とする作庭集団の２者を抽出しうるのである。各集団の系譜や活動範囲などについて、今後の類例の増加を待ちたい。

(3)　古写真にみる邸宅のレイアウト

第22次調査で検出された上記の池、および邸宅敷地について幸運にも実際に住んでいた方のご子孫が判明し、同時に邸宅を写した古写真について実見する機会を得た。写真は、「民家」のうち南側に位置していた邸宅を写したものと思われ、後述の通り検出された池の形状と写真の照合を経てもその可能性がきわめて高い。以下、南側の邸宅を対象として建物と庭のレイアウトを復元してみよう。

南側の邸宅を写し込んだと思われる写真は全13点で、そのうちほぼ同一カットのものや詳細が不明なものを除いた６点について検討する。

まず、写真ＡとＢは樹木における花の有無などから異なる季節に撮影されたものとみられるが、各部のレイアウトは同じであることから照合が可能である（図４）。その中で、両写真に写る石橋１は縁の部分に細長い石材を縦づかいに配置する点で同様のものとみて間違いない。また、石橋の右手に築山が存在する点や、その対岸における建物の存在、①～⑤の樹木や石材の形状・配置からみても、写真ＡとＢは、ほぼ同じ地点を異なる方向から写したものであったとみなせる。なお、写真Ａは裏書に「大正拾四年　裏山庭宅ヲ鹿田病院ヘユズリ渡スニ付記

念撮影ス」とある。

このように、写真A・Bからは、池にかかる石橋と、池を隔てて存在する築山と建物の存在をうかがうことができる。また、築山前面の池護岸が緩やかに奥手へ湾曲している点、石橋直下では池がすぼまっている点を考慮すると、写真Aは池の西側からSG1の東岸を撮影したものと判断できる。同時に、写真Bはほぼ正面に石橋が、右手に築山が写されることから、南西寄りから撮影されたものということになろう。これは、写真Bの人物の背後に写る池の護岸が右手前から左奥へ伸びる点とも矛盾しない。このように考えた場合、写真Aには軒先のみが、写真Bには側辺が写る建物1は池の北側、やや西よりに建てられていたと想定される。なお、建物1は写真Bによる限り、軒の出を減じつつ、奥手へも伸びる。また、建物1からは写真手前に向かって石畳が敷設されており、通路として使用されていたようである。①と④の樹木の間の石のみやや浮いているように見える点も留意される。

上記を総合すると、図4右のような復元が可能である。築山の奥（東側）には、東西棟の入母屋造り建物の妻付近が写されるが、これは敷地外、道をはさんだ東側の建物である可能性が高い。

次に写真Cを検討する（図5）。写真AとCは、築山や築山手前の石組の石材、背後に写る民家の形状や位置関係の同一性から、ほぼ同じ地点から撮影した写真であると断定しうる。ただ、築山手前の石組や背後の家の写り

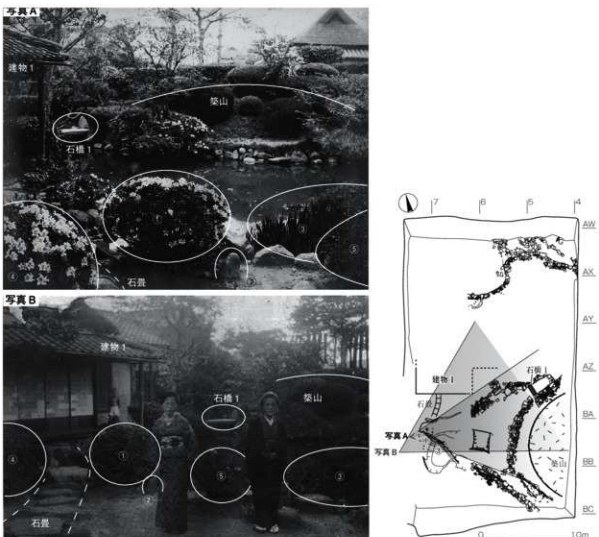


図4　邸宅復元にかかる古写真と復元案(1)

方から判断する限り、写真Cは写真Aのやや右手（南）を撮影したもののようである。したがって、写真Cは池の南側の様子をうかがううえで重要といえる。

そこで写真Cを概観すると、対岸の池の護岸は幅を減じながら緩やかに右手奥へと伸びていくことように見える。上の復元によれば当該部は池南東に設けられた排水路の位置にあたるが、右手奥へと伸びるやや幅の狭い水路はこの状況に見事に整合する。上で復元した復元案は検出遺構との対応関係もとれるため、一定程度の確からしさをもっているとみてよかろう。

さて、写真Cで注目されるのは、写真右手（南）において突き出すような形状を呈した石組である。写真右手が南であると想定すると、石組は排水路から北西へ伸びたのち、池内部で南西方向に屈曲するような形であったと推定されるわけだが、これは二又に分かれた池西岸のうち、当初造営に伴う南側の部分への屈曲を捉えたものと理解可能である。このように理解した際、池の西側にも護岸の石組が配されていたことがわかる。これらは調査時には検出されなかったが、実際には池の全面に石組がめぐらされていたと復元できるのである。第22次調査では6ラインやや西を境にして、その西側が全面的に攪乱されている点も踏まえれば、池西岸の石が検出されなかったことについては、後世の造成時に抜き取られた可能性を考えるのが適切である。以上を総合すると、図5右のような復元が可能である。

ここまで、SG1の北辺・東辺の状況について検討してきた。続いては、西端について詳しく見ていこう。写真Dは、樹木や石①～④の同一性から写真Aのほぼ反対（東）から西向きに撮影したカットであるとみられる（図6）。写真奥には建物2が写されるなど、池の西端の状況をうかがいしる貴重な写真である。同様に、写真Eも写真Dの左斜め上（南東）から撮影した写真であることが確実視されるものである。

両写真は上述の通り、樹木や石の配置より東から撮影したものと考えられ、やや湾曲する石組ラインはSG1西端の二又に分かれた箇所のうち、南側部分の西辺に相当する可能性が高い。写真Dは、裏書から岡山医科大学に移管する直前の1925（大正14）年に撮影されたことが判明しており、邸宅利用の最終段階において二又に分かれたうちの南側部分も埋め立てられずに池として利用されていたことを有力視させる写真といえる。その場合、第

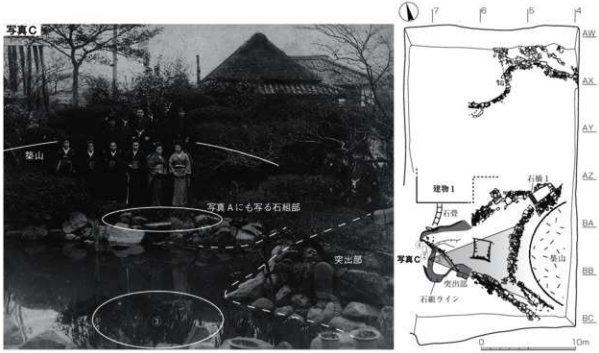


図5　邸宅復元にかかる古写真と復元案(2)

22次調査で検出された板列が認められない点は留意されるが、同時に設置された可能性のあるSG1中央部の魚溜もこれら写真に一切写っておらず、ともに池の使用時には水面下にあったものと想定される。

さて、湾曲しながら北に向かう西端ラインは樹木①の付近でくびれ、写真右手奥（北西）へ伸びていく。石組のうち湾曲部を二又に分かれた南側部分の西辺と理解した際、屈曲部より右手奥は新設された北側部分の西辺にあたるとみて差し支えない。一方、注目されるのはその上に架構される石橋である。一見すると、写真A・Bに写る石橋1と同様のものであるようにも思われるが、位置が合わないことに加えて、縁の部分に配される石材の形態も大きく異なることからそれとは別物と捉えざるをえない。

以上を踏まえると、1925（大正14）年の時点で池西端は二又に分かれ、そのうち北側には石橋がかけられていたと復元できる。また、写真D・Eに写る石畳は建物2を発して石橋2に至るが、さらにこの石畳は樹木①・④や石②を手がかりにすると、写真Bに写る石畳と一連のものであったとみられる。改めて写真Bを確認すると、写真Bに写る石畳は樹木①・④の間の石のみやや浮いているように見えるが、これが石橋2として捉えられる可能性も高い。以上を総合すると図6右のような復元が可能である。

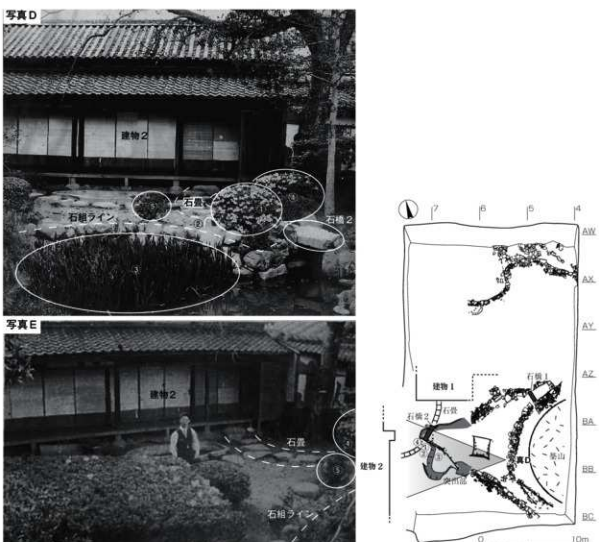


図6　邸宅復元にかかる古写真と復元案(3)

ここまで、古写真をもとに敷地の復元を試みた。最後に、写真に写る二つの建物について、構造を今一度確認しておく。まず、建物１について、写真Ｂを補足するのが写真Ｆである（図７）。写真Ｆに写る建物は樹木や石の配置・形状に加えて、障子の張替え箇所の一致から写真Ｂに写る建物１と同じものとみなせる。中でも障子の張替え箇所の同定から、写真Ｂの建物１における右（東）から３枚目の障子が、写真Ｆの建物１における右から２枚目の障子にあたることが確実視できるため、建物１のおおよそのサイズが復元可能である。これに基づけば、建物１は南面の中央に４枚の障子がはめられ、左（西）にのみほぼ同じ幅の壁がめぐる構造であったといえる。障子１枚あたりの横幅が、近世～近代の西日本で広く使用された京間畳の横幅３尺１寸５分（95.5cm）であるとすれば、建物１の南辺は約4.8mに復元しうる[3]。そのほか、建物１は妻側を南に向ける南北棟で、外縁を有していたこともうかがえる。

図７　邸宅復元にかかる古写真と復元案(4)

続いて、建物２について写真Ｄ・Ｅを参照すると、当建物は少なくとも３間以上の長さを有する南北棟で、庇・棟ともに瓦葺き、雁振瓦を有する総瓦葺きである。１間あたりの障子の枚数は、右手（北）から２枚・３枚・４枚を数え、上と同様に障子１枚あたりの横幅を３尺１寸５分程度と仮定すれば、南北の長さは9.6m以上に復元しうる。柱間は右から2.86m（≒１間半）・2.86m（≒１間半）・3.82m（≒２間）程度であろうか。それ以外では、建物１と同じく外縁を有するほか、右手（北）の目隠しのつく突出部は類例からみて厠である可能性が考えられる。また、縁側に面して大型の手水鉢が設置される。

両建物は、写真Ｆや写真Ｄ・Ｅをみる限り、建物１は西側に、建物２は北側にそれぞれ梁間の狭い建物（廊下？）を付設していたようであり、北西において互いに連接していたことが想定される。また、上でも述べたように石畳および石橋２を通じて、庭園からも互いにアクセスが可能であったようである。上記の検討を踏まえると、第22次調査で検出された敷地の全体は図８の通りに復元できる。

また、こうした復元を裏づけるかのように、生活雑具も主に池の北～西側に分布する。例えば、本書でも報告した小刀やハーモニカ、鳴笛、仏像片、行火、歯ブラシ、下駄はすべて池北辺～西端での出土品である。このように、生活時の廃棄品の多くが当該地点に分布することは、池の北側および西側に主たる生活圏があったことを暗示していよう。

興味深いのは、上記を通じて復元された建物配置が、1925（大正14）年に岡山医科大学病院へ移管された際の構内図に記載されている建物配置に類似する点である（図１右上）。既に述べたように、『民家』の南半は1925（大正14）年に大学病院へ移管されるが、この時点では1924（大正13）年以前の土地の境界に沿って板塀が依然として設けられており、新たな造成や建物の建築は本格化していなかった可能性が高い。このように想定した場合、1925（大正14）年の構内図に記載された南側の建物は、上で復元した邸宅が移管を経て引き続き使用されていたことを示している可能性も考えられる。実際、『岡山医科大学二十周年誌』中には「看病婦の宿舎に充つる爲義に買収したる民家を修繕し約四十人を収容し得る設備を施す」（p.136）とあることに加えて、1928（昭和３）年に作成された構内図には、南側の建物に対して「看護婦寄宿舎」と注記がなされている。上で復元した建物は、1925

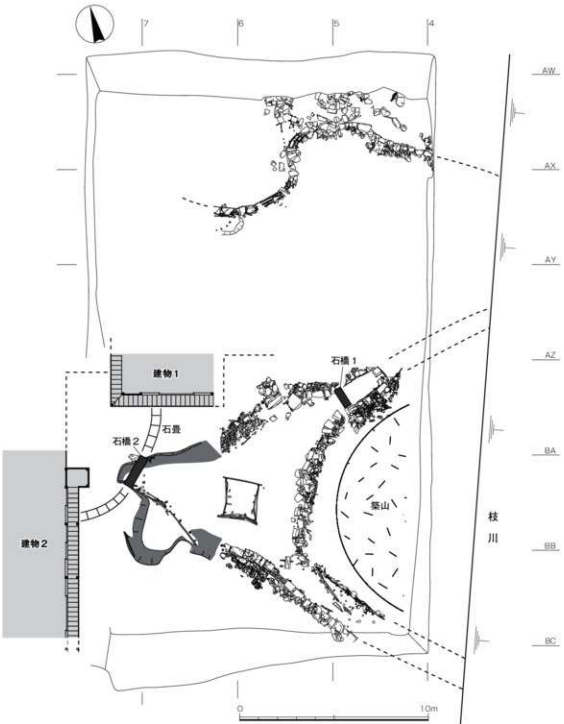


図8　鹿田遺跡第22次調査で検出された邸宅復元案

（大正14）年における大学病院への移管以降も改修を経ながら再利用されたとみて差し支えなかろう。

(4)　岡山県南部における近代邸宅と鹿田遺跡

検出遺構、古写真、構内図などを用いて第22次調査で検出された邸宅敷地について復元してきた。最後に復元

された邸宅の位置づけをめぐって、岡山県南部における近代邸宅との比較検討を行いたい。

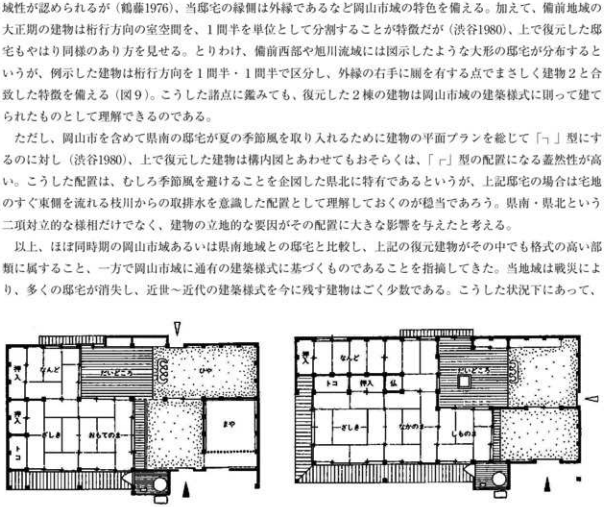
まず、指摘しうるのは当邸宅の家構の良さである。敷地面積の広さは述べるまでもなく、築山庭園を有し、建物も庇・棟ともに瓦葺きである点は注目されよう。既存の研究によれば、近世～近代における岡山市域は瓦製造の先進地域でありながらも、家屋全体を瓦葺きすることは城下の武士邸宅、町屋でさえも少なかったという（鵜藤1976）。そうした中で、上で復元した邸宅は建物１・２ともに総瓦葺きであるなど、同時期における岡山市域でも高い格式を備えるものであったといえる。加えて、当邸宅の庭園は池と築山をもつ、いわゆる「池泉回遊式庭園」に相当するが、こうした庭園は岡山城後楽園や旧陸軍第十七師団駐屯地（現・岡山大学津島キャンパス）などの特殊な施設を除けば、地主階級をはじめ上層階級の邸宅を特徴づけるものである。当邸宅は、明治時代以降、城下外縁へ宅地が拡大していく最初期のものと考えられるが、それにふさわしい格式を備えたものであったと評価できよう。

なお、邸宅の建築時期は定かでないものの、明治時代半ば以降の邸宅でしばしば採用される土台を欠く点や、土地所有権の推移からすると、明治時代初頭～半ばに位置づけうる。

ここまで、通有の邸宅との相違点の抽出を通じて、当邸宅の格式の高さに言及してきたが、一方で地域の中での共通点も少なくない。例えば、岡山市域の縁側は外縁、高梁川以西および久米郡では内縁が採用されるなど地域性が認められるが（鵜藤1976）、当邸宅の縁側は外縁であるなど岡山市域の特色を備える。加えて、備前地域の大正期の建物は桁行方向の室空間を、１間半を単位として分割することが特徴だが（渋谷1980）、上で復元した邸宅もやはり同様のあり方を見せる。とりわけ、備前西部や旭川流域には図示したような大形の邸宅が分布するというが、例示した建物は桁行方向を１間半・１間半で区分し、外縁の右手に厠を有する点でまさしく建物２と合致した特徴を備える（図９）。こうした諸点に鑑みても、復元した２棟の建物は岡山市域の建築様式に則って建てられたものとして理解できるのである。

ただし、岡山市を含めて県南の邸宅が夏の季節風を取り入れるために建物の平面プランを総じて「┐」型にするのに対し（渋谷1980）、上で復元した建物は構内図とあわせてもおそらくは、「┌」型の配置になる蓋然性が高い。こうした配置は、むしろ季節風を避けることを企図した県北に特有であるというが、上記邸宅の場合は宅地のすぐ東側を流れる枝川からの取排水を意識した配置として理解しておくのが穏当であろう。県南・県北という二項対立的な様相だけでなく、建物の立地的な要因がその配置に大きな影響を与えたと考える。

以上、ほぼ同時期の岡山市域あるいは県南地域との邸宅と比較し、上記の復元建物がその中でも格式の高い部類に属すること、一方で岡山市域に通有の建築様式に基づくものであることを指摘してきた。当地域は戦災により、多くの邸宅が消失し、近世～近代の建築様式を今に残す建物はごく少数である。こうした状況下にあって、



H　備前の民家Ⅰ　　Ⅰ　備前の民家Ⅱ

図９　備前地域における民家の諸例

上の復元は断片的ながらも貴重な一例となろう。

おわりに

検出された庭園遺構に端を発して敷地の復元を試みた。古写真や構内図の検討といった考古学的な手法によらない部分も少なくないが、検出された遺構の意義づけに際してはあらゆる史資料を探索することが不可欠である。一方、考古学的には池の構築にかかる二つの流派を抽出することができた。第22次調査の調査区では、互いに隣接しながらも異なる流派の作庭集団が関与するといったように個別的な経済活動の一端が垣間見えたが、その系譜などは今後の調査研究に期する部分も多い。引き続き検討を進めていきたい。

註

(1) この地域では畳割寸法ではなく、柱割寸法が採用されていた可能性も指摘されており（鵜藤1976）、若干の誤差を含むことも想定される。

参考文献

岡山大学医学部附属看護学校　1989「校舎と寄宿舎の変遷」『岡山大学医学部附属看護学校看護教育60年の歩み』
岡山医科大学　1921『岡山医科大学一覧　自大正十年至大正十一年』
岡山医科大学　1925『岡山医科大学一覧　自大正十四年至大正十五年』
岡山医科大学　1929『岡山医科大学一覧　昭和四年現在』
岡山医科大学　1942『岡山医科大学二十周年誌』
渋谷泰彦　1980『岡山の民家（Ⅱ）』山陽新聞社
鵜藤鹿忠　1976『岡山市の民家』『岡山県の民家研究』日本文教出版

図表出典

図１：岡山医科大学1921・1925・1929，岡山大学医学部附属看護学校1989より筆者作成
図２・３・８：筆者作成
図４～７：中山栄美子氏提供写真をもとに筆者作成
図９：渋谷1980
表１：筆者作成

第6章　結　　語

本調査地点では弥生時代後期から近代にいたる遺構・遺物を確認した。調査地点は鹿田キャンパスの北東部に位置しており、岡山医学専門学校、岡山医科大学に移管された後、1930（昭和５）年10月にコンクリート建物（炊事場のち管理棟）が建設された地点である。発掘調査はこのコンクリート基礎の扱いに難渋しつつ実施した。近隣では北側で第16次調査が実施されているが小規模なものであり、キャンパス北東部の状況について、まとまった貴重なデータを得ることができた。

本調査地点をめぐる地形環境

本調査地点では弥生時代後期の時点で南半が微高地状、北半は低位部であったことが確認された。鹿田キャンパスにおける地形環境についてはボーリングコア分析を主とした研究による一定の成果が得られ、弥生時代後期段階の地形復元が試みられており[1]、今回の調査成果もこれを補強するものである。キャンパス北部中央（第１次・２次・５次調査地点）に最も高い微高地が広がり、住居・井戸・墓等が確認される。この微高地の東側に低い微高地が広がるが、その東端部に本調査地点南端があたる。本調査地点の微高地部は西から東への緩斜面を呈しており、北側低位部との境界に溝１～３が走行する。北側低位部は砂の堆積が顕著に認められ、河道の状態を経て、弥生時代後期の間にも堆積が進み、次第に微高地との比高差が解消されたことが窺える。本調査地点では低位部の堆積状況に加え、南半微高地の形成過程の分析に必要な堆積状況を記録することもできた。今後、他調査地点も含め、鹿田遺跡の地形環境の変遷について検討を深めたい。

中世の調査成果

本地点で確認された中世に属する遺構は井戸３基と希薄な状況であった。このうち中世前半の井戸２基は調査地点南端で検出したものであり、弥生時代後期の状況と同様、本調査地点南半から調査区外の南方に居住域が存在する可能性を示す。井戸以外の遺構はみつかっておらず、鹿田遺跡において中世前半の集落を特徴づける区画溝も確認されていない。中世前半には、鹿田キャンパスの広範囲に、溝で区画された屋敷地が配置される状況が確認されているが、その並びから推定すると、13世紀前半に比定される井戸５を含む屋敷地は、東をキャンパス東端の（現）枝川に区切られ、西・南を区切る溝は調査地点外に想定される。この段階に本地点北半の低地状態は解消されているが、依然居住には適さなかったと推察される。

中世後半には井戸６が調査区北部で確認される。15世紀後半に廃棄される井戸であるが、これ以降、近世の井戸が多数構築されており、15世紀代以降は調査区北半も居住地として利用され始めたことがわかる。

近世の調査成果

近世の井戸は８基が確認され、近世時期は一帯が居住域であることを示す。柱穴は僅かに検出されているが、まとまりや建物位置を検討することはできなかった。井戸の分布は、調査地点内全域に見られた一方、屋敷を区画するような溝は本調査地点内では確認されていない。

近世については、後述する庭園遺構に伴って出土したいくつかの遺物に注目したい。庭園遺構１（SG1）から出土した肥前陶器紅猪口（図63－1）や土師器煎茶急須（同－４）はいずれも江戸時代後期に比定される化粧道具や茶道具の類にあたる。庶民の持ち物には相応しくない上質のものである。同様に土製角型焜炉（図64－Ｔ８）も江戸時代後期に比定され、煎茶用焜炉である可能性が考えられる。こうした特徴ある遺物は、同じく近世に居住域が確認された第20次調査Ｂ地点でも指摘される[2]。17世紀前半に比定される井戸22から出土した京焼の猿形水滴や18世紀半ばに比定される肥前磁器水滴片（土坑20出土）に代表されるような、やはり庶民とは一線を画する品の存在がある。また同調査地点では、16世紀末に比定される土坑から「寺」刻印のある瓦片が出土しており、近隣に寺の存在が想定されている。

以上のように近世については、本調査地点を含むキャンパス北東部に居住域が展開し、そこには寺の存在や、一定の富裕層の存在が窺える。

近代の調査成果

本調査地点の成果を特徴づける点の一つは近代遺構に関する成果である。前章までに検討してきたように、近代における本調査地点は、当時の字名で岡五番160地番と158地番にあたる。地番により所有者も異なり、検出した庭園遺構は北側のSG2は160地番、SG1は158地番に位置する。SG1については1925（大正14）年に撮影された写真の存在が判明したことから、庭園および邸宅の配置の復元を行い得た（第５章２）。これらの遺構の廃棄年代は158地番が1928（大正14）年、160地番が1928（昭和３）年以降であることが明らかである。一方、庭園遺構の造営年代について確定はできないが、護岸石組の間から出土した遺物から江戸時代後期以降であり、土地取得年代を重視するならば、158地番は1895（明治28）年、160地番は1898（明治31）年を１つの手がかりをすることができる。

２基の庭園の護岸には石組が採用されており、その構造を記録した。上部は現代の建設工事により破壊されていたが、基礎部分については詳細を確認することができた。構造類例として岡山市南方遺跡で確認された溝が挙げられる[3]。南方遺跡は岡山城下町の一画に位置しており、絵図とも照合が可能な地点である。同遺跡溝１は侍屋敷の区画をなす溝で、石積みの側壁を有する。石積みの基礎に胴木と胴木前面に打ち込まれた杭が確認されている。同溝は18世紀前半以降の構築で、明治期まで機能したとされる。この例に比較すると、本調査地点の庭園護岸は規模が大きく、つくりも複雑であるものの、基礎構造の類似は見逃せない。本調査地点の庭園造営の際にこうした城下の水路石積み構造を知る職人が関わったことも考えられよう。

近代の調査に際しては、遺構・遺物ともに本調査地点の全体量の１/２を占める状況であった。報告書の記載にあたっては、図の縮尺やオルソ図の活用などを考慮した[4]。

本調査地点の成果について項目毎に述べてきた。鹿田遺跡で近代の居住域の調査は初の事例であり、岡山県医学専門学校・岡山医科大学移管直前の状況が捉えられたのは、本学敷地の歴史を解明するうえで重要である。中世・近世についても新たな知見を追加し、敷地全体での土地利用状況を検討する材料を得られた。特に近世・近代については未整理報告が残っており、今後改めて全容を検討したい。

註

(1) 山本悦世　2021『中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究』(平成30年度～令和２年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
山口雄治　2020「ボーリングコアを用いた古地形の発達過程とその評価－岡山市鹿田遺跡を例として－」『日々の考古学３』東海大学文学部考古学研究室

(2) 岩崎志保　2022『鹿田遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第38冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

(3) 氏平昭則　2012『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告234　岡山県教育委員会

(4) 近代の埋蔵文化財調査に際しては文化庁通達により「特に重要なものを対象にすることができる」とあり、本調査の内容は本学の歴史解明の上で重要であると判断し、その成果の公開に務めた。

遺 構 一 覧 表

a．井戸・土坑

報告番号	検出面高（m）		深さ	上面（残存値）		底面（残存値）		断面形	時期
	上面	下面	m	形状	規模m	形状	規模m		
井戸1	0.52	−0.78	1.30	円形	0.8×0.8	円形	0.58×0.58	筒状	弥生時代後期
井戸2	0.55	−0.80	1.25	楕円形	1.35×1.18	円形	0.65×0.65	Y字形	弥生時代後期
井戸3	0.50	−0.50	1.00	楕円形	0.75×0.65	円形	0.4×0.4	逆台形	弥生時代後期後半
井戸4	0.55	−0.75	1.20	方形	0.8×0.8	方形	0.7×0.7	逆台形	中世前半
井戸5	0.60	−1.00	1.60	円形	1.1×1.1	円形	0.9×0.9	歪な筒形	中世前半（13世紀前半）
井戸6	0.70	−0.80	1.50	楕円形	1.1×1.2	円形	0.8×0.8	歪な筒形	中世後半（15世紀後半）
井戸7	0.60	−0.55	1.15	円形	0.85×0.85	円形	0.65×0.65	逆台形	近世
井戸8	−0.20	−1.00	0.80	円形	0.88×0.88	円形	0.88×0.88	筒形	近世
井戸9	0.50	−0.30	0.80	楕円形	0.7×0.8	楕円形	0.65×0.75	筒形	近世
井戸10	0.55	−0.50	1.00	楕円形	0.9×1.0	楕円形	0.6×0.7	筒形	近世
井戸11	1.10	−0.25	1.35	長楕円形	1.2×1.0	円形	0.8×0.8	逆台形	近世
井戸12	0.65	0.10	0.50	円形	0.6×0.6	円形	0.5×0.5	筒形	近世
井戸13	0.85	−0.90	1.75	不整円形	1.1×1.1	円形	0.8×0.8	逆台形	近世
井戸14	0.30	−0.85	1.15	円形	0.6×0.6	円形	0.55×0.55	筒形	近世
井戸15	1.60	−0.02	1.62	円形	0.9×0.9	円形	0.6×0.6	逆台形	近代
土坑1	0.36	−0.45	0.80	隅丸長方形	2.6×1.6	隅丸長方形	（2.4×1.0）	不整台形	弥生時代後期
土坑2	1.17	0.67	0.40	楕円形？	（1.2×1.4）	−	−	U字形	弥生時代後期後半
土坑3	0.35	0.00	0.35	楕円形？	（1.4×0.4）	楕円形？	（1.05×0.2）	逆台形	弥生時代後期後半
土坑4	1.10	0.80	0.30	長楕円形	（1.0×0.8）	楕円形	（0.35×0.3）	二段台形	弥生時代後期後半
土坑5	1.40	1.10	0.30	不整形	（1.0×0.6）	−	−	U字形	弥生時代後期中頃
土坑6	1.00	0.70	0.30	不整形	（1.3×1.3）	−	−	U字形	弥生時代後期
土坑7	0.60	0.00	0.60	楕円形	1.5×1.2	隅丸方形	1.0×0.9	逆台形	近世
土坑8	1.60	1.30	0.30	歪な楕円形	1.1×0.6	隅丸長方形	0.6×0.3	U字形	近世
土坑9	0.70	0.55	0.15	楕円形	0.7×0.6	楕円形？	0.6×0.5	U字形	近世
土坑10	1.00	−0.10	1.10	楕円形？	（2.85×2.5）	楕円形	（0.7×0.8）	逆台形＋U字形	近世
SG1池部	1.05	−0.40	1.45	三角形	19・17・15	−	−	−	近代
SG2池部	1.10	0.50	0.60	円形？	−	−	−	−	近代

b．溝

報告番号	上面高m	底面高m	深さm	断面形	幅m	方向	時期
溝1	0.60	0.39−0.54	0.15	U字形	0.6−1.0	E	弥生時代後期
溝2	0.60	0.23−0.45	0.30	U字形	0.60	E2°S	弥生時代後期
溝3	0.60	0.3−0.48	0.30	U字形	0.7−0.9	N85°E	弥生時代後期
溝4	1.05	0.88−0.95	0.10	U字形	0.50	N	弥生時代後期
溝5	1.10	0.90	0.20	U字形	0.80	E7°S	弥生時代後期
溝6	1.50	0.9−1.0	0.50	U字形	1.05−1.1	N22°E	近世
溝7	1.35	0.45−0.5	0.85	逆台形＋U字形	2.0−2.4	N70°E	近代
SG1水路1	1.00	0.1−0.35	0.90	逆台形	1.0−1.1	N70°E	近代
SG1水路2	0.45	−0.20	0.65	U字形	1.0−1.5	E54°S	近代
SG2水路	0.80	−0.20	1.20	逆台形	（3.20）	E32°S	近代

報告書抄録

ふ り が な	しかたいせき
書　　名	鹿田遺跡17－第22次調査－
副　書　名	地域医療人育成センターおかやま新営に伴う発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告
シリーズ番号	第40冊
編 著 者 名	岩崎志保（編著）・木村　理・能城修一・沖　陽子
編 集 機 関	岡山大学文明動態学研究所
所　在　地	〒700－8530　岡山県岡山市北区津島中３丁目１番１号　TEL 086-251-7290
発行年月日	2024年３月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
しかたいせき 鹿田遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくしかたちょう 北区鹿田町２ ちょうめ　ばん　ごう 丁目５番１号	33201	県2208	34°39′3.62	133°55′19.14	20110615～ 20111118	533㎡	地域医療人育成センターおかやま新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿田遺跡第22次調査	集落	弥生時代～古墳時代	井戸３基、土坑６基、溝５条	弥生土器・土師器・石器	
	集落	中世	井戸３基	中世土器・備前焼・瓦・木製品・鉄器・石器	
	集落	近世	井戸８基、土坑４基、溝１条	木製品	
	集落	近代	井戸１基、庭園遺構２基	陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品	

2024年３月21日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第40冊

鹿田遺跡17

編集・発行　岡山大学文明動態学研究所
文化遺産マネジメント部門
岡山市北区津島中３丁目１番１号
（086）251－7290

印　　刷　西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651
（086）254－1111代